

陸軍歩兵伍長勳七等功六級 石田長壽

王谷莊堡石頭村攻撃に分隊全滅する迄奮戦して戦勝の端を拓く

氏は茨城縣行方郡八代村の人にして父を勝三母をたつと云ひ大正三年九月二十日に生れ妻たみとの間に未だ愛子はなかつた。資性眞面目にして責任觀念強く事に臨み積極果敢不屈不撓の人であつた。而して在郷中は一村公共の爲克く盡力して村民より敬愛せられて居た。昭和四年三月八代村小學校高等科を卒業し引續き行方郡麻生中學校へ入り家事の都合により在校一年にして退校し其後農業に精勵して居た。昭和九年十二月徴兵として滿洲獨立守備歩兵大隊に入營し熱心勉勵滿洲の治安工作に貢献せし所尠ならず功に依り勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり同十二年三月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊第八中隊に編入輕機關銃手として同月二十七日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十二日より十四日に亘る永定河附近の戰鬪に際しては克く分隊長を輔佐して活躍し九月十五日より十七日に亘る拒馬河畔附近の戰鬪には右岸の敵陣地攻撃に當り分隊の一番として輕機關銃の射撃を適切に指揮し分隊並に小隊の前進を容易ならしめ次で九月十八、十九日平漢線西側地區を追撃するや退却中の敵に對し機を失せず有効なる射撃を浴せ小隊の追撃を容易ならしめた。

九月十九日所屬大隊は涿州南方松林店の線を出發し泥濘膝を没する田畑を跋涉し遠く大冊河の線に向ひ不眠不休の急追撃を行ひ將兵一同疲勞困憊其極に達した。氏は此間堅忍持久不屈不撓志氣常に旺盛にして進んで難局に當り克く其の任を完うし續いて九月二十一日には克く十三里の行程を突破し直に大冊河畔王谷莊堡附近石頭村西南方高地の堅固に設備せる敵陣地に對し夜襲することとなり中隊は其の夜即ち二十二日午前二時行動を起し同二時三十分大冊河の徒渉を開始した。

當夜は陰曆十七日の皎々たる明月中天に懸りて晝をも欺く明るさありし爲早くも敵は我企圖を察知し果然猛烈なる射撃を浴びせて來た。しかも大冊河は水深腰或は胸に達する濁流なりし爲對岸に向ふ前進は頗る困難なりしが此間氏は率先勇敢凡ゆる困難を克服して對岸に達した。此頃敵火は一層猛烈となりしが之を物ともせず上野分隊長指揮下に分隊の中堅となりて勇敢に躍進を重ね敵陣地に近迫するや大隊正面にありし敵機關銃は熾に猛射を浴せ來り我前進を妨害せしを以て分隊



は此敵機關銃陣地に對し剛膽にも巧に其側面に肉薄して突入し遂に之を撃退し尙も續いて前進し勇敢に敵陣地の側面に進出し前線より退却せる敵に對し射撃と突撃とを反覆し多大の損害を與へ尙且大隊正面に於て執拗頑強に抵抗しつゝある敵に對し中隊に先んじて益々肉薄し此頃我が死傷續出せるも分隊長以下之に屈せず突入り數十名の敵を撃退し以て大隊の重任たる敵陣地奪取の端緒を開きしが敵機關銃の側防猛火により無念分隊は全滅するに至り氏亦遂に敵彈の爲壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏や義に駐滿して武勳を樹て今次再び戦陣に立つや分隊の中堅となり不屈不撓彈雨の下積極果敢率先奮闘死生を顧みず只管戦勝に邁進し兵の本分を完うして遺憾なかつた。當時石黒部隊長より「第八中隊の上野分隊は敵陣地に突撃し機關銃の側防火の爲全滅したるも死傷を顧みず敵を全滅せしめたる奮闘は蓋し範とすべきものと信ず」との激賞を受けたるに徴するも分隊擧つて如何に奮戦せしかを想察し得らるゝのである。實にかくの如きは身を君國に献けて死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。噫氏は征戰中途にして大

冊河畔の華と散りしは惜みて尙餘あるも奮戦玉碎して以て樹てたる披群の武功は滿州事變に於ける勳功と共に萬世不朽皇軍戦史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の多幸を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 稻富政吉

忠孝兩全の勇士南京郊外に奮闘し重要任務を遂行す

氏は福岡縣大牟田市稻荷町の人にして母をエキと云ひ大正五年二月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性温良寡黙にして孝心深く事に當るや眞摯熱誠遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。昭和五年三月優良なる成績を以て駿馬高等小學校を卒業し受持教師より上級學校への入學を勧められたが母の負擔の容易なざるべきを察し直に三井鑛業所に入所し勤勞生活に入り精勵努力所員の信用厚く又給料は袋のまゝ母に渡し自らは一圓の浪費をもなしたる事なく唯一筋に身寄少き母を慰めて居た。氏は柔道に興味を有し昭和六年八月以來山田尚武館に入門し昭和十一年には同館に於て三段の免狀を與へられた。昭和十二年一月現役兵として久留米山砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して優良なる成績を擧げ砲兵上等兵を命ぜられた。

支那事變起るや間もなく原田部隊に屬し片山中隊第三分隊の二番砲手たる榮職を擔ひ勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は十一月上旬中支江南戰場の一角に到着し爾來金山衛松隈を經由し南京に向ひ行程實に百五十里を突破した。其間道なき稻田を涉り山を越え河を涉り喰ふに食なく寝ぬるに家なき難行軍を續け疲勞困憊其極に達し乍らも氏は常に志氣旺盛克く

分隊長を輔け戰友を勵まし分隊の中堅として一意猛進十二月八日南京南方約八里の東善橋附近に到着するを得た。所屬中隊は殆んど休息の暇もなく同日の午後より牛首山將軍山の本防禦線に對して猛攻しつゝある兵團に協力して激戦を交へ氏の所屬小隊長を初めとし戰友若干名の負傷者を出すに至つた。氏は斯かる激戦の中にも毅然として正確迅速なる照準を行ひ以て火砲の威力を發揚し中隊長の射撃指揮を容易ならしめた。翌九日より十二日にかけては鐵心橋及棉花地附近の戰闘

に参加し數次に互り砲撃したが敵彈下に從容自若常に正確なる操作を續け砲手の中堅として火砲の威力を遺憾なく發揚した。



十二日夜半所屬中隊は南京の西北部に在る下關に進出し敵の退路を遮斷すべき任務を有する歩兵部隊に配屬せられ將兵一同勇躍して同夜十二時棉花地を出發したが友軍歩兵と行動を共にするを得ずして遂に孤立状態を以て前進した。然るに途中千餘の敗殘兵に遭遇し猛烈なる射撃を受けたが之を排除して午前五時三十分江東門に達し更に下關に向ひ前進し途中天明となり爲に敵彈を受くる事益々猛烈となつたが所屬中隊は之と交戦を避け一意下關に急行するに決し各

分隊の距離を大にして前進を繼續した。此日氏の所屬分隊は中隊の先頭に在りて急進中であつたが氏は克く率先諸種の障礙を排除して前進を容易ならしめ午前九時三岔河西端クリークに達し迅速に放列を布置した。三岔河は下關南方約二軒にある市街で市街の中央には大クリーク流れ今や數千の敵兵は舟を利用して揚子江對岸に遁走せんとする所であつた。小隊長代理佐々木准尉以下は好機逸すべからずと直ちに猛砲撃を加へ之に多大の損害を與へた。就中氏は先頭砲車として最も

迅速に放列を布置し迅速なる射撃を繼續したが敵兵は周章狼狽しつゝ小銃機關銃を猛射して必死と應戦し其射弾は文字通り雨や霞の如く集中して來た。無念なるかな此時氏は頭部に貫通銃創を受けて壯烈なる戦死を遂げた。小隊長代理佐々木准尉も身に三弾を受けて悲壯の戦死を遂げ彈藥搬送中の大村砲手も頭部を貫通されて斃るゝ等惨烈なる激戦を交へたが氏等の奮戦と尊き犠牲に依り所屬中隊は支隊全般の任務達成に重要な貢献をなし赫々たる武勳を奏するに至つた。

氏は母一人子一人の淋しき家庭に育ちたるも質實剛健克く母に事へ人の子の鑑と敬慕されて居た。今次聖戦に参加するや克く精到なる武技と忠君愛國の至誠と相俟ち各戦偉功を奏し又分隊の中堅となり堅忍持久幾多の辛酸を克服し所屬中隊をして其任務を完遂せしむるに至つた。寔に是れ皇軍砲兵の本領を發揮して遺憾なく又一般軍人の龜鑑たるものであつた。斯る忠孝兩全の士を表へるは眞に斷腸痛惜に堪えないが士が戦場に臨むや素より生還を期せず而かも死所を得るや洵に難い。氏や護國の人柱として既に肉體を隠したが其至孝至忠の英靈は永遠に生きて護國の神となり又一家の守護神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るべく又赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に輝き芳名永く後世に誦はれて百世の下懦夫をも起たしむるであらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 井口利一郎

優秀なる觀測車長にして郷土の模範青年上海戦線の華と散る

氏は山梨縣北都留郡笹子村の人にして亡父を治郎吉母をいちのと云ひ明治四十一年一月十五日に生れ妻芳子との間に利

文元治の二愛子を擧げた。性温順眞摯にして孝心深く一家の中堅として家業に精勵し又情誼に敦く責任觀念旺盛にして村内の模範青年として其將來を囑目されて居た。大正十年三月笹子小學校高等科第一學年を修了し爾後庭家に在りて母を扶けて家業を勵みつゝ笹子實業補習學校に通學し昭和三年十二月同校専修科を卒業其間模範生徒として前後二回に亘り笹子村青年團長より表彰せられた。昭和四年一月現役兵として野戦重砲兵第二聯隊へ入營し熱誠克く軍務に精勵し精勳章を附



與せらるゝ事二回又通信手として教育を受け其成績優良にして二回通信褒賞勳章を授けられ翌五年五月には伍長勤務上等兵を命ぜられ同年十一月滿期除隊に際しては善行證書並に砲兵科下士官適任證書を授與せられ輝かしく歸郷した。歸郷後は笹子實業補習學校指導員及村立農工青年學校督勵員等の名譽職を囑託され熱誠忠實郷黨青年の爲指導に當り又一一般公益を圖りて在郷軍人會分會長青年團分團長猿橋警察署長北都留佛教會長各氏より夫れ夫れ感謝狀を贈られた。

支那事變起るや昭和十二年九月應召平野部隊に屬し中隊觀測車長として勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて九月下旬上海戦線へ到着後は主として寶山縣下各地の戦闘に觀測車長として参加し常に人員馬匹器材の區處を適切にし克く觀測小隊長を輔佐して其戦闘指揮を容易ならしめしが殊に十月上旬に於ける大場鎮附近の戦闘に於ては軍直轄砲兵として秋山部隊の戦闘に協力し劉家行より頓悟橋橋亭宅附近に至る陣地攻略に参加するや氏は熾烈なる敵の彈雨を冒し適切機敏なる行動に依り所屬部隊の戦闘に大に貢献して其砲兵威力を遺憾なく發揚せしめた。

十月三十日我が軍は蘇州河の全線に亘つて進出し敵を蘇州河南岸に追ひ込んで爾後の攻撃を準備した。氏の所屬中隊は張家橋に放列陣地を占領し蘇州河畔の總攻撃に参加した。中隊觀測所は實に敵前五、六十米に位置して居たが午後四時十分頃突如砲彈飛來名倉中隊長を初め觀測小隊長淺池少尉等は壯烈なる戦死を遂げた。中隊は正に親に離れし雛鳥の悲しみに一時途方に暮れたが氏は深く決する所あり翌三十一日の戦闘には切齒扼腕午前九時半頃より砲撃を開始して敵砲兵陣地を粉砕し情況愈々急迫を告ぐるや歩兵の渡河掩護の爲巨砲は火を吐いて猛射を続け頑敵亦必死の應戦に努め砲煙天を掩ひ砲聲地軸を震撼し壯絶慘烈の激戦を展開した。此時氏は戦機を明察し中隊爾後の行動に應ぜんが爲敢然身を挺して器材の撤出に従事であつたが此の時無念敵の一砲彈は身邊に落下炸裂し氏は其破片の爲重傷を受け打倒れた。されど豪氣の氏は尙も任務に邁進せんと渾身に力罩めたが力及ばず壯烈なる戦死を遂げた。時に午後三時頃であつた。

氏や人格高邁にして克く家政を治め且郷黨の子弟を導き出で、軍務に服するや諸成績群を擢んで衆の模範となつた。今次聖戦に参加するや敵が數年の日子と巨額を投じて構築せる近代の築城と各種銃砲火器を配して必死の抵抗を試みたる上海戦線に出動し晝夜間斷なき敵の彈雨を浴び又クリク泥濘の運動困難なる地形下に觀測車を適切に誘導し常に器材の出納整備を初めとし其人馬の區處を適切にし以て觀測小隊長の企圖遂行に毫も支障なからしめた。而かも戦機を看破するや器材の運用を顧慮して獨斷推進用の器材を整備中玉碎するに至つた。斯かる有爲にして精銳の士を喪へるは定に痛惜哀悼に堪えざるも氏が赫々たる功績は皇軍戦史に輝きて芳名は不朽に傳へらるべく又氏の尊き生涯は郷土の光華とも謳はれて英靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵伍長勳八等功七級 泉田 元

廣陽鎮に於て敵の奇襲に逸走せる重要書類積載駄馬を求めて職に殉す

氏は大阪府泉南郡貝塚町の人にして父を市松亡母をよねと云ひ明治四十年十一月二十九日に生れ妻シズエとの間には未だ愛子がなかつた。性温厚着實にして孝心頗る深く友情に富み又業務に對しては忠實熟識遂げずんば息まざる氣概を有し前途有望の青年として囑目されて居た。大正十三年三月貝塚町北小學校高等科第一學年を修了し其後は家庭に在りて父を扶けて構職に精勵して居た。徵兵適齡に達するや現役兵として輜重兵第四大隊へ入營し克く軍務に精勵し成績亦優良にして輜重兵上等兵を以て滿期除隊となつた。除隊歸郷後は再び家業に従事し家庭の中堅として父に孝養を盡し弟妹を慈しみ又在郷軍人分會の幹部町會幹事消防旗手青年團理事等として公共の爲にも大に盡力し率先垂範町内の中堅人物として信望自づから一身に蒐まつて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召加藤部隊に屬し喇叭手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來所屬部隊は京漢線方面の後方動致に服し九月中旬より同月下旬にかけては涿州保定の會戦に糧秣を補給し又九月下旬より十月中旬にかけ石家莊及滄陽河附近の會戦に彈藥を輸送し續いて十月中旬より十一月初旬にかけ太原の攻略戦に参加して彈藥を補給し以上の歴戦に鑑み特に所屬部隊の偉勳を認められて軍司令官より感状を授與せられた。氏は其間主として傳令勤務に服し常に正確機敏に命令意圖を關係指揮官に傳達して部隊長の指揮運用を容易ならしめた。殊に北支は數十年來稀なる大雨に見舞はれ到る處氾濫泥濘の地帯と化し加之高粱畑連續して果てしもなく尙所在に敗殘兵の出沒せる情況下なりし爲所屬部隊の行動は言語に絶する勞苦と危険とを伴つた。又正太沿線に至つては有名なる天險地帯にして仰げば堅岩絶壁雲表に聳

先俯すれば溪流に咽び肌を寒からしむる如き險難なる山道而かもそこにも敗殘兵の潜伏蠢動する極めて危険なる情勢下に氏は細心豪膽よく傳令の重任を果したる功績に至りては第一線に活躍せる勇士に比し勝さるとも劣らざるものと謂ふべきであつた。



十一月三日氏の所屬隊は太原方面に作戰する兵團の左追撃隊に配屬せられ岡崎少佐指揮の下に午前六時三十分彈藥中隊として駄馬編成を以て平定縣を出發し本隊の後方に跟随して榆次方向に向ひ前進した。翌四日所屬中隊は午後一時三十分頃廣陽鎮東方約七百米の河原に到着するや突如此河原の左側方山地より迫撃砲及重機關銃を有する優勢なる敵の猛射を受けた。中隊長は河原の堤防を利用して廣陽鎮部落に部隊集結を命ずると共に自衛隊をして應戦せしめ同時に氏に命じて中隊の先頭に行進せる機密書類の公用行李駄馬を監視せしめた。此時敵の迫撃砲彈附近に落下炸裂し其爆音に氏の監視駄馬は狂奔して部隊を横切り部落の東方約百米の地點まで逃走し敵彈の爲斃れた。氏は此駄馬を追ひ將に斃馬の傍らに達せんとせる時敵彈飛來胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時正に午後二時であつた。而して所屬隊は氏等の尊き犠牲に依り同日午後六時當面の頑敵を撃退する事を得た。

氏や郷に在りて孝悌郷土の模範となり又郷土公共の爲凡ゆる方面に至誠を致し又出で、軍務に服するや忠實熱誠衆兵の模範となり上下の信頼特に厚かつた。果然聖戰に参加するや滅私報國の念に燃え幾多の辛酸を克服し又幾多の危険界を突

破して重なる傳令勤務を全うした。而して廣陽鎮附近に於ける敵の奇襲に際會するや一意所命任務たる監視馬の行衛を求め遂に其職に殉ぜしは眞に崇高なる責任觀念の發露にして皇軍々人の精華を遺憾なく發揮せるものであつた。斯かる忠誠にして有爲の士を表へるは眞に痛惜の情を禁じ得ずと雖氏の隠れたる累次の功績たるや天晴れ皇軍戦史を飾りて芳名は後世に傳ふべく又其魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神ともなりて其前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日輜重兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 堀田 定藏

忠節に透徹せる勇士衆敵を撃潰し遂に南苑に玉碎す

氏は北海道夕張郡角田村の人にして父を庄之助母をサトと云ひ大正四年二月八日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く人に接して誠實温和克く諸人の愛敬を受け又事に當るや忠實にして不屈不撓の氣概を有し幼時より軍隊生活希望して居た。昭和四年三月雨煙別高等小學校を優等を以て卒業し又八ヶ年間の皆勤に依り皆勤章を附與せられた。其後は家庭に在りて農業に従來する傍ら雨煙別青年學校へ通學し同年三月所定の課程を修了したが其成績優秀の爲査閲官より賞狀を授與せられた。昭和十一年一月旭川歩兵聯隊へ入營し同年四月支那駐屯部隊に屬して北支へ派遣せられ克く軍務に精勵し其成績亦良好にして翌十二年三月には歩兵上等兵を命ぜられた。

北支の情勢急迫を告ぐるや間もなく品部部隊に屬し檜崎歩兵砲中隊の一番觀測手として直ちに所命の警備に就いた。七

月二十六日所屬部隊は通州南方にある一營の敵に對し武裝解除を要求したるに彼は之を拒絶せしを以て茲に翌二十七日午前四時を期し戦端の火蓋を切るに至つた。此際所屬小隊は午前七時南門北方約八十米の地點に放列陣地を占領し氏は城壁上に位置し我射彈の觀測並に敵情を機敏に觀察して所屬小隊長を輔佐し其戦闘指揮を容易ならしめ以て第一線歩兵に有效適切なる協力を與へた。



七月二十八日我が軍は南苑に立籠る約二萬八千の敵軍に對し總攻撃を實施する爲東西南の三方面より之を包圍し拂曉と共に砲兵及空軍を以て要點を破壊せしめ續いて歩兵部隊の一齊攻撃前進を開始した。氏の所屬部隊は東正面より攻撃したのであつたが敵は我が猛攻に堪へ兼ね午前九時頃より北方北京方向に退却を始めた。之より先き所屬部隊長は敵の退却を豫想して機を失せず有力なる一部を馬村附近に先遣した。氏の所屬小隊も亦之に参加し石榴莊に達し待機して居た。午前十時半頃より敵兵逐次待機位置附近に現はれ漸次銃砲聲激烈を極めて來た。併し周圍の地形は高粱畑打積き高粱の高さは實に十五尺内外にも達し全く砲の威力を發揮する事が出来なかつた。午前十一時三十分敵兵約百名は左前方の高地より氏の所屬小隊を目がけて奇襲して來た。小隊は小銃及拳銃を以て直ちに之に應戦したが當時携行せる小銃は僅少にて到底火力戦を以て對抗し得べくもなく敵兵既に三十米に肉迫して來た。今は是れ迄と氏は觀測器材を掩蔽下に入れ小隊長以下七名は敢然敵中に突入した。氏も亦右手に拳銃を左手に銃剣を執りて撃つ刺すの奮闘を續けた。敵は此勢に恐れ多數の武器彈

藥と死體二個を遺棄して潰走した。幸に所屬小隊には損害がなかつたが小隊の四周には尙も銃聲歇まず至嚴なる警戒を以て情況の推移に注意を拂つて居た。午後一時半頃前回と略同等の敵部隊が俄然襲撃し來り其距離既に約三十米に及んだので小隊は再び決死の突撃を敢行した。氏も亦銃剣を右手に持ち率先群がる敵中に突入して敵數名を刺殺した。此勢に敵は僻易して一時山上に向ひ潰走したが新なる敵は輕機關銃三を以て我が小隊を猛射した。此時小隊は敗敵を追撃中であつたが此猛射を浴びて停止するの已むなきに至つた。氏は直ちに拳銃を以て猛射中の敵輕機關銃に對し射撃を加へ將さに第四發目を發射せんとする一刹那無念にも敵彈飛來左眼上より後頭部にかへ貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。戦友日下部上等兵が「小隊長殿！堀田がやられました」と告ぐるや衆皆悲憤死力を以て當面の敵を撃破し茲に火砲及小隊は危機を脱するを得た。

氏の郷里に寄せたる絶筆に「今度出づれば戦闘が大きくなるでせうが何卒御心配なく。唯神様に祈つて欲しいのは自分が戦死する迄は身體が建者で立派にお國の爲に盡せる様祈て居て下さい。自分は一心にお國の爲に活躍する覺悟です……自分は飽くまで觀測手として敵情を搜索しお國の爲に御奉公します。自分の事をあだ。こうだと心配して下さつても何も十分なお役は出来ませんから其點は十分御了承を願ひます云々」とあゝ崇高なる其報國の赤誠唯々感激と敬服の外はない。斯る忠誠勇武の士があればこそ雲霞の如き支那大軍を瞬く間に平津地方より撃攘し得皇軍爾後の作戦行動を容易ならしむるを得たのである。今や其壯容に接し得ざるは眞に痛恨哀悼の情を禁じ得ざるも氏が赫々の功績は其烈々たる忠節と共に皇軍戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 田路 頼一

勇敢なる小銃手東花園に奮闘して戦勝の端を拓く

氏は兵庫縣朝来郡山口村の人にして亡父を安太郎母をいちと云ひ大正十二年十一月十二日に生れ妻きくるとの間には未だ愛子がなかつた。性沈勇温順にして孝心深く弟妹を慈み病弱なる父を扶けて農業に精勵し傍ら石積工を副業とし父死亡後は一家の中堅となり益々質實剛健に家政を治め模範青年として村民の愛敬を受けて居た。昭和八年十二月現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し間もなく滿洲臨時派遣部隊に屬して渡滿し一面波方面に於て警備及討匪の重任を果たし功を以て勳八等に叙せられ翌九年五月内地へ歸還し同年十二月には上等兵に進級し同時に伍長勤務上等兵を命ぜられ翌十年五月輝かしく成績を以て歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊に屬し田卷中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。氏は召集令に接するや特に家政を整理し又自己の戦歿後家族の爲探るべき詳細なる指針を認め遺書として残し置き爲に今次氏戦死するも遺族は之に依り何等の蹉躓なく生活を営むを得村内一般の感激を受けて居る。所屬部隊は北支到着後津浦線に沿ひ南進し泥濘濁流を踏破し九月十日愈々馬廠陣地を攻撃するに至つた。馬廠陣地は第三十八師の殘兵と支那軍の精銳を誇る中央軍二ヶ師を合して其兵力約三萬馬廠河の障礙を利用し月餘に亘り堅固に陣地を占領して居たが氏の所屬中隊は敵陣地左翼據點たる小王莊を夜襲を以て奪取すべき命令を受け午前三時半を期して之を決行した。此際氏は中隊の第一線たる第三小隊第四分隊に屬し敵の猛火を浴びながら率先勇敢にも身を没する大水壕を跳び越え中隊長以下先づ敵の第一線陣地を奪取し續いて小王莊西北方陣地に殘留せる敵を猛攻して之を驅逐し以て拂曉以後に於ける戦鬪に極めて有利なる戦果を獲得した。

斯くして所屬部隊は九月二十一日午後六時より津浦線の最堅壘たる滄州附近の敵の數線陣地に對し攻撃を開始し連日晝夜に亘る肉弾戦を續け逐次敵陣地を奪取して戦果を擴張し二十三日南部人合庄の線に進出し同日午後六時三十分より敵陣地の最堅壘たる東花園の陣地に對し夜襲を準備した。敵の陣地直前には中五米深三米の大水深壕は更に陣地内部には水壕鐵條網を張りまわし掩蓋機關銃座迫撃砲陣地も物凄く配置されて各陣地前の斜射縱射の設備を完了し眞に難攻不落の堅



壘たるを思はしめた。氏は所屬中隊の火線分隊内に在りて一意攻撃

前進を續けたが前進地域は泥濘水深交錯して行動極めて困難なる上敵銃砲彈の飛來は雨か霞か將た嵐か忽ち友軍は死傷續出し名狀すべからざる慘狀を呈した。併し豪膽不敵の氏は之に屈せず率先躍進を續けて分隊の前進を誘起し克く分隊長を輔佐し又正確なる射撃に依りて活躍中の頑敵を射殺して之に多大なる損害を與へて突撃陣地に取りつき小隊長の號令一下勇躍突撃前進に移つた。其瞬間無念一彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は氏等の勇猛果敢なる奮闘に依り午前一時十分敵の第一陣地を奪取し爾後

戦果を擴張して午前六時さしも堅固の東花園陣地を占領するを得た。

氏や郷に在りては素朴温厚の農村青年として郷黨に範を垂れ出で軍務に従ふや曩には滿洲事變に参加して武勳を樹て今次聖戦に臨むや至誠奉公既に生還を期せず周到なる遺書を残し家人の嚮ふ所を示して壯途に上り幾多の辛酸を克服し劍電彈雨亦眼中になく職責の存する所率先水火の中に身を投じ既往聖戦の體驗に基き戦友を激勵し分隊長を輔佐して難局を

打開した。寔に是れ皇軍歩兵の本領を發揮して餘す所なく又一般軍人の龜鑑たるものであつた。あゝ高邁にして忠勇の士今や其壯容に接すべくもなく痛惜の情に堪えざるも氏が累次の功績は皇軍戦史に輝きて其芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功六級 大久保八百三

滿洲事變の殊勳機關銃手小趙村に奮戦再び殊勳を樹て玉碎す

氏は長野縣下高井郡延徳村の人にして亡父を政治郎母をたきと云ひ明治四十四年四月二十六日に生れ妻きみとの間に長女八重子を擧げた。性温良眞摯にして友情に厚く又難局に當りては沈着豪膽にして不屈不撓遂げずんば已まざるの氣概を持つて居た。大正十三年三月延徳尋常小學校を卒業し其後は家庭に在りて家業に従事し専ら孝養を盡して居た。昭和六年十二月現役兵として安東獨立守備歩兵隊へ入營し克く軍務に精勵し歩兵上等兵に進級したが滿洲事變に際會して服役延期となり各地に勇戦奮闘して拔群の武功を奏し功を以て勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はり昭和十年六月輝かしく滿期除隊となつた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月應召遼山部隊に屬し後藤機關銃中隊第四小隊の四番銃手たる榮譽を擔ひ勇躍北支戦線への征途に就いた。所屬部隊は九月十四日永定河畔に敵を撃破したる後敵を急進して琉璃河畔頭鎮の敵陣地を一蹴し途中輕敵を撃破しつゝ九月二十一日二十二日には大冊河畔黃村の激戦に難攻不落を誇る堅壘を粉碎して驍名を馳せ續いて

保定附近の殘敵を掃蕩し沙河北岸地區に進出した。氏は此間生粟甘藷に飢を凌ぎ泥濘降暑を克服し或は熾烈なる敵砲彈を身に浴び乍ら克く分隊長を輔佐し分隊の中堅として戦友の志氣を鼓舞し其卓越なる射撃技能を發揚して重機關銃の全威を振ひ以て所屬中隊の重要任務の達成に寄與せる所甚大であつた。



九月二十七日所屬田領大隊は新樂を距る南方數里小趙村の既設陣地に敵ありとの情報に接し同日午後零時三十分新樂を出發し進路を西に取り鐵橋の上流一里半の地點に於て午後三時前後沙河を渡河し午後五時頃主力を以て小趙村の西北側地區に進出した。氏の所屬小隊は部落に通ずる本道以東の敵陣地を火制する目的を以て部落の北方地區占領を完了したが部落の周圍はポプラの並木に圍まれ且被我の中間地區には芦の繁れる濕地介在して射撃威力を發揚する事は殆んど不可能であつた。茲に於て本道の西側濕地を超えて敵前數百米に陣地變換を行つた。所屬小隊は第十中隊に協力して敵の左翼より攻撃した。氏は小隊長の射撃號令に従ひ敵彈雨飛の中に自若として有效なる射撃を續行して敵を壓倒し小銃中隊に適切なる支援を與へたが戦況の進むに従ひ更に敵前二百米の稗畑に陣地變換を行ひ小隊長と連絡を取り所屬分隊長の許に復歸せんとする折しもあれ本道東側部落の突出部に占據せる敵より猛烈なる側射を受け左腕附根より右背部にかけ貫通銃創を受けて打倒れ「小隊長殿！ 残念です大久保はやられました」と叫んだ。戦友等はかけつけて介抱したが重傷の爲力及ばず次第に青ざめ行く氏を見守つたがやがて氏は苦しき息の下より「天皇陛下萬歲」と繰り返へし一言私事に及ばず從容と

して戦場の華と散つた。其後所屬部隊は終夜激戦の後翌二十八日午前五時遂に頑敵に致命的大打撃を與へ完全に小趙村の部落を占領するを得た。是れ實に氏等の尊き犠牲が其礎石となつたものであつた。

氏は温良にして豪膽寡黙にして實行の人であつた。其郷に在るや一家團樂忠實業に服し出で軍務に服するや曩には滿洲事變に赫々たる武勳を奏し今次聖戦に参加するや既得の體驗に基き克く分隊長を輔け分隊の中堅となり特に渡河時の如きは重き銃身を無交代にて搬送し其他常に率先難局に當り一意献身報國の至誠に充ち溢れ將兵の深き信頼を受けて居た。寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして一般軍人の模範たるものであつた。斯る忠誠有爲の士を喪へるは痛恨限りなしと雖氏が金鵄勳章を拜受する事二回に及べる累次の赫々たる武勳は皇軍戦史に輝き芳名永く後世に誦はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守り又一家の守護神として遺族殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 小田垣敏郎

優秀なる傳令屢々武勳を奏し清涼店の激戦に玉碎す

氏は兵庫縣城崎郡日高町の人にして亡父を伊太郎亡母を雪枝と云ひ大正五年十二月十一日に生れ未だ獨身であつた。性剛毅闊達にして責任觀念に富み諸事に熱心遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。昭和六年三月日高小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて農業に従事し傍ら青年學校へ通學し三年間の課程を修了した。幼時より身體強健にして劍道を好み小學校在學間劍道高點試合に於て十八人に對し勝通した事もあつた。昭和十年一月現役志願兵として鳥取歩兵聯隊へ入

營し克く軍務に精勵して優良なる成績を挙げ特に銃劍術射撃技能は優秀にして屢々上官より賞狀を附與せられ翌十一年十一月歩兵上等兵を以て滿期除隊となつた。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し岡本中隊の第一小隊長傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し泥濘炎暑の難行軍を續けて津浦沿線を南進し九月五日所屬中隊は馬廠攻撃の爲挺身隊となり敵彈下に

惡路を突破し郝庄に到着した。此の夜氏は將校斥候の一員となり大隊の攻撃正面たる丁莊及康莊子附近の敵情搜索の爲派遣せられた。氏は疲労困憊にも不拘勇躍して出發し暗夜殊に錯雜せる地形なりしが他斥候をも適切に誘導して方向を誤らず所望の敵主陣地前五六十米に近迫し側防機關銃並に障礙物の状態を詳細に偵知して斥候長を輔佐し完全に其任務を遂行した。



時より入合庄附近の敵陣地を夜襲して之を奪取し翌二十二日敵を追撃して姚官屯驛の北方約八百米附近に達せし時突如驛監視家屋前の掩蓋陣地より猛射を受け其攻撃前進意の如く進捗せざる爲所屬小隊は此敵の側背に迂回して攻撃中所属中隊主力との連絡は全く杜絶するに至つた。氏は自己の責務を痛感し之れが連絡を恢復せんと小隊長の許を出發し錯雜蔭蔽の地形を意とせず猛烈なる敵の彈雨を物ともせず發見容易ならざる中隊位置を求むる事數十分遂に目的を達し再び小隊長の

許に歸來し中隊命令を傳達し小隊爾後の行動に大なる憑據を與へ得た。

翌二十三日姚官屯驛の攻撃に方りては所屬中隊は大隊の右第一線となり氏の小隊は中隊の右側掩護として現在地附近を死守すべき命を受けた。茲に於て所屬小隊は敵前百米の要地を占領し之を確保中午後三時半驛南方のトーチカ内に在る輕機關銃が我が中隊主力に猛火を浴びせあるを發見し氏は機を失せず之を狙撃中氏も亦姚官屯驛方向の敵より狙撃を受け右上膊部に破片創を受けた。然かし氏は之に屈せず狙撃を續け數發の後之を制壓し以て中隊の突撃を容易ならしめた。其後小隊は屢々逆襲を受けたが氏は沈着且正確迅速なる射撃を以て之を撃退し守地の確保に大に貢獻し戰鬪夜に入るや慘烈なる状況下に數百米を隔つる中隊主力間を往復し常に緊密なる連絡を保持し中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。翌廿四日南方第三陣地の攻撃に方りては神速機敏に水濠及鐵條網を突破しトーチカより脱出中の敵を猛射して之を殲滅し此陣地を突破した。折柄鐵道線路東側の姚官屯部落より約三百名の敵兵が逆襲して來たが氏は敵の投ずる手榴彈々幕下に冷靜大膽正確なる猛射を加へて多大の損害を與へ之を撃退した。斯くて翌廿五日夜々河南舞來河占領に際しては斥候として大に活躍し以て貴重なる資料を提出し所屬中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

十月三日所屬大隊が德縣城の攻撃準備に就かんとするや氏は將校斥候要員として敵彈下を恐れず勇躍し前方の陣地には既に敵なきを逸早く發見し自ら大隊主力との連絡に任じ大隊をして神速果敢に追撃前進に移らしめ五日德縣城攻撃の爲午後九時迂回行動を起すや所屬小隊は尖兵として急進中城内より退却し來れる約二十名の敵と俄然遭遇したが豪膽なる氏は忽ち其數名を血祭にあけて之を潰走せしめ更に咫尺を辨ぜざる暗夜の中に斥候と中隊主力との連絡を確保した。所屬部隊が德州城攻略後は一意黃河北岸地區に向ひ敵を急追したが所屬中隊は其急先鋒として前進路上の敵情地形の偵察を命ぜられた。氏は其際屢々斥候として泥濘浸水地帯を突破し幾多の道路崩壞箇所を發見し或は水深身を没する河川に身を投じて

偵察する等常に積極的に活躍して其重任を全うした。

所屬部隊は臨邑附近の敵を包圍殲滅する目的を以て拾數里を一晝夜に突破して十三日午前六時清涼店東方約千五百米の部落に到達した。所屬中隊は健脚中隊を以て驅はれて居たがこの迂回行動間尖兵中隊として活躍した。見渡せば渺茫たる大平野には朝霧立ち罩めて西方に清涼店其北方に石莊の部落が朦朧と浮び霧の薄らぐに従ひ北方に黃王店東北に羊庄の部落も漸次姿を現はして來た。敵は當初所屬部隊の行動に氣付かざりしが漸くそれと覺るや周章狼狽所屬大隊の猛攻に應戦して來た。所屬中隊は大隊の右第一線となり氏の小隊は中隊の左第一線として先づ石莊部落の左翼を包圍攻撃すべき任務を受け熾烈なる敵の彈雨を冒して猛烈に攻撃を開始した。此時氏は石莊部隊より遁走する乘馬者及同部落より逆襲し來る約二三百名の敵を機敏に發見して之を小隊長に報告すると共に我が機關銃に逸早く連絡して之を猛射せしめ以て敵の逆襲企圖を破砕したが間もなく羊庄方面より百數十名の敵我が側背に來襲するに及び所屬小隊は孤立状態となつた。小隊長は速かに中隊長に報告せんと數名の傳令を派遣したが悉く負傷して目的を達する能はざりしが氏は進んで此難局に當らんと申出で勇躍急進中隊部に貫通銃創を受けた。氏は苦痛に堪えつつ中隊長の許に至り任務を全うし更に小隊に復歸して奮闘を續けたが三方面より猛射を受け無念！腹部に貫通銃創を蒙り竟に壯烈なる戦死を遂げた。併かし所屬隊は氏等の奮闘と尊き犠牲に依り同日午後三時十分優勢なる敵を撃退するを得た。

氏や志操高邁にして頭腦並に武技亦優秀到る處に諸人の愛敬を受けて居たが今次聖戰に参加するや選ばれて小隊長傳令となり毎戰赫々たる武勳を奏し殊に清涼店附近の苦戰に遭遇するや進んで難局に當りて重要連絡を完遂し遂に聖戰の尊き犠牲となつた。寔に是れ軍人の龜鑑と云ふべきである。今や其壯容に接する能はず痛惜哀悼に堪えざるも其赫々たる功績は皇軍戰史に輝きて其芳名を後世に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助

を垂るゝと共に亡き父母にみたま乍らに大いなる功績を報告し得る事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 太田 保

滄州血戦に突撃路を開き又トーチカを制壓して戦勝の端を拓く

氏は兵庫縣城崎郡豊岡町の人にして亡父を淳之助母をよねと云ひ大正四年二月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性温順明朗にして責任觀念強く事に當るや熱誠着實難局に處しては沈勇果斷であつた。昭和三年三月郷里の高等小學校を卒業し其後は家庭に在りて家事を手傳ひ昭和十年十一月より大阪鐵道局福知山運輸事務所豊岡保線區に勤務して居たが翌十一年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し優秀なる成績を擧げ上等兵を命ぜられた。

支那事變起るや間もなく長野部隊に屬し岸田中隊の第一小隊第五分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進し九月十日未明より馬廠陣地帯の西北方面の敵陣地に對し攻撃を開始した。此の時所屬中隊は當初聯隊豫備隊となり將兵一同瘁肉の歎を啣ちつつ待機して居た。拂曉後漸く待望の第一線部隊として流河鎮の堅壘を攻撃したが隣り間に之を占領した。然るに此陣地は極めて重要點なりし爲敵は夕刻に到り約二大隊の兵力を以て奪回の爲猛烈なる逆襲に轉じて來た。氏は此際沈着豪膽克く部下を掌握し好機に投じて輕機關銃分隊の威力を遺憾なく發揚して敵を撃退し該地を確保し以て馬廠攻撃成功に一素因を與へた。

所屬部隊は馬廠附近に赫々たる戦勝を收めたる後敗敵を急追し敵が津浦線上の最後の抵抗線と特める滄縣附近の最も堅

固なる數線陣地に對し攻撃を準備した。所屬中隊は先づ北部人合庄の堅壘を奪取せんが爲九月二十日午後十一時高官屯を出發し敵情地形の搜索に従事した。氏の小隊は第一線を命ぜられ最前線に位置して居たが敵は其兵力の優勢を恃み數次に亘りて夜襲して來た。氏は此場合も能く部下を沈靜せしめ好機に投じて熾烈なる猛火を浴びせ敵に多大なる損害を與へて見事に之を撃退し以て中隊の搜索任務遂行に甚大なる貢獻を與へた。翌二十一日に至るや早朝より敵火は愈々熾烈にして

偵察意の如く進捗せず午後五時頃より友軍砲兵の砲撃開始と共に一進一止敵前に肉薄したが敵の陣地前には幅四米深さ約二米の水濠横はり之に接して其後方には網形鐵條網ありて突撃の決行は至難であつた。斯くと見たる敵は必死となつて所屬中隊目がけて猛射を浴びせて來た。氏は部下分隊を叱咤激勵しつつ匍匐前進して敵前四十米に近迫し二十二日未明徹底的に頑敵を猛射し以て架橋作業並に突撃動作を最も有効に支援した。

二十三日午後三時所屬中隊は午後三時より姚官屯驛に向ひ攻撃するや氏の小隊は大隊豫備隊として控置されたが驛東北側に在るトーチカより猛烈なる側射を受け爲に第一線諸部隊は前進困難となつた。當時所屬中隊主力の兵力は寡少なりし爲豫備隊たる氏の所屬小隊より一ヶ分隊を以て中隊主力の戦闘に協力すべき命令があつた。之を聞きたる氏は進んで此難局打開に當らん事を志望して認可を受くるや先づ兵器を點檢し部下を激勵し胸迄没する水濠を超え小十字銃を以て自ら鐵條網を切断して之を突破し更に射界を清掃して之を完了するや否や至烈至猛の火力を驛東北のトーチカ機關銃に指向し隣り間に之を制



壓し以て第一線部隊の攻撃に至大なる援助を與へた。されど分隊は此時敵の輕機關銃の集中射を受け無念にも氏は頭部に敵彈五發を受け壯烈なる戦死を遂げた。併かし所屬中隊は氏等の奮闘と尊き犠牲に依り遂に當面の頑敵を粉碎し茲に赫々たる戦果を収むるに至つた。

氏や温良忠勇の人、郷に在りては模範青年たり出でて軍務に従ふや誠實にして成績群を擢き將兵一般の愛敬を受けて居た。果然聖戦に参加するや選ばれて輕機關銃分隊長たるの榮職を擔ひ毎戦其俊敏敢爲の手腕を發揮して所屬中隊の戦勝に貢獻し殊に姚官屯驛附近の苦戦に遭遇するや沈着豪膽機敏に輕機關銃の威力を發揮して其の難局を打開し終に玉碎するに至つた。あゝ是れ皇軍歩兵の精銳にして一般軍人の龜鑑たるもの壯烈真に鬼神を泣かしむるものがある。今や壯容に接する能はずと雖も其赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に光彩を放ち百世の下懦夫をも起たしむべく芳名永く後世に誦はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 大木善吾

堅忍勇敢の小銃兵平漢沿線に奮闘遂に滹沱河畔に散る

氏は栃木縣芳賀郡中川村の人にして父を善太母をハルと云ひ大正三年三月二十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして友情に厚く而かも大事に臨みては沈着勇敢であつた。昭和三年三月中川村高等小學校を卒業し同年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同年十二月滿洲獨立歩兵部隊第三機關銃隊に編入せられ滿洲公主嶺に駐屯翌十一年二月外蒙事件

の爲臨時派兵として澁谷支隊歩兵大隊機關銃隊に屬し二月二十二日より七月十三日に至る間海拉爾附近の警備に任じ其間三月二十一日より四月四日に亘り「アツセル」廟附近に進出して國境を警備し且三月三十一日及四月一日は「タウラン」附近の戦闘に参加し六月十七日より七月二日に亘りては「ホルンデルス」附近の警備に任じ七月十五日公主嶺に歸着同十二年三月上等兵に進級の上滿期除隊となつた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第二中隊に編入小銃兵として同月二十六日勇躍征途に就いた。斯くて北支戦線に到着し所屬隊は京漢線に沿ひ九月二十一日行動を起して敵を追撃した。此の時第二中隊は尖兵となりて前進し所在の小敵を驅逐しつゝ下柴口南方高地に達するや忽ち高地上より突如猛烈なる射撃を受け所屬中隊は直に展開して此敵を攻撃した。氏は彈雨の下率先勇敢に攻撃前進を繼續して敵に近迫し愈々突撃命令下るや急峻なる高地を駆け登り而かも勇猛果敢に敵陣に突入して敵を撃退し續いて逃ぐる敵に尾して追撃し紡上部落に至つて再び敵の抵抗を受くるや追撃の勢を以て勇猛果敢忽ち敵前百米に肉薄し冷靜沈着正確なる射撃に依り敵を制壓し敵兵動搖の色あるや機に乗じ勇敢に突入し遂に同部落をも占領確保し中隊の任務達成を容易ならしめた。其後中隊は引續き前進し王谷莊堡附近大冊河の渡河點を占領するや氏は敵の熾烈なる射撃下にありて分隊長指揮下に絶へず極めて勇敢に敵情を監視し其警戒を完ふし二十二日午前二時中隊は大隊の右第一線として王谷莊堡北側の陣地向ひ夜襲を敢行した。然るに敵は頑強にして正面のみならず左右より

側斜射を浴びせ來り中隊は忽ち死傷者續出せるも氏は之に屈せず分隊長と共に勇敢に前進し水雷鐵條網等を排除して敵陣に突入し掩蓋銃座及陣地の一角を占領した。然るに敵は拂曉までの間再三逆襲し來りしが沈着勇敢其の都度之を撃退し夜の明くるや敵は近距離に踏止まりて我を狙撃し爲に戦友相次で斃るゝに至りしが氏は尙も之に屈せず應射克く努め同陣地一角の確保を完ふした。

十月八日より十日に亘る滹沱河々畔の戦鬪に際しては氏は連日の追撃に加へ道路不良なりし爲甚しく疲勞困憊せるにも拘はらず克く分隊長を補佐して敵を急追し勇躍渡河して右岸に進出し中隊の任務達成を容易ならしめ次で中隊は前兵大隊に屬して敗退せる敵を追撃中十一日午後六時突如保家庄の敵より猛射を受け大隊展開するや其の中央第一線となり正子より夜暗を利用して翌拂曉攻撃の準備位置に就いた。愈々拂曉となり午前六時三十分攻撃前進を起すや朝霧の中より敵は十字火を浴せ來り前進極めて困難なりしも氏は克く分隊長指揮下に彈雨を冒して勇敢に躍進を繼續し敵を制壓しつゝ逐次敵陣地に近迫した。然るに右斜前方よりする敵輕機關銃の火力は益々熾烈を極め我小隊の前進を惱ますに至れるを以て此の敵の輕機關銃を制壓せんとし勇敢にも更に躍進して此敵輕機關銃を目標に沈着正確なる射撃を爲しつゝありしが無念敵の一彈は氏の頭部を貫き遂に壯烈なる戦死を遂げた。時に午前十時頃であつた。

氏の戦陣に立つや分隊の中堅となり率先勇敢不屈毎戦克く兵の本分を完ふして遺憾なく殊に保家庄に於て敵の側防輕機を制壓せる積極果敢なる行動の如きは是れ一に氏が身命を君國に獻けて戦務に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべく征戰中途北支の華と散りしと雖も其赫々の武勳は千載に輝き嘗ては外蒙の邊境より今次は北支の曠野に亘りて長驅活躍東亞建設に盡したる功績は赫々として皇軍戦史を飾り其英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇國を守護し遺族一家の前途に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 大塚利一

勇敢なる連射砲手致命傷を受くるも自己の任務を連呼しつゝ瞑す

氏は群馬縣勢多郡黒保根村の人にして父を鶴次郎母をセキと云ひ大正四年四月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實而かも責任觀念旺盛負けぬ氣象の人にして大事に臨み沈着且勇敢であつた。昭和四年三月黒保根高等小學校を卒業し其後農業に精進しつゝ傍ら青年訓練所に通ひ其課程を修了し又黒保根青年團八木原支部長に推され團の向上發展に盡瘁してゐた。同九年四月壯丁教育會より代表青年として表彰せられた。昭和十年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營歩兵砲隊に編入爾來軍務に精勵學術の成績良好にして同年十二月上等兵に進級し翌十一年七月歸隊除した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊連射砲中隊に編入第二小隊第三分隊第四番砲手として同月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十二日の永定河股家舖附近に於ける同河の渡河戰鬪に際しては第一線近く進出し敵彈下に於て敵情並に渡河點の偵察に任じ勇敢に活躍所命の任務を遂行し適時有效適切なる報告を齎して砲隊爾後の戰鬪を有利ならしめた。次いで九月十五日拒馬河右岸西茨村附近の敵陣地攻撃に當つては對岸陣地より猛射して我第一線部隊の攻撃を機ましつゝある敵の重火器に對し氏は連射砲々手として従つて敵彈下に沈着冷靜常に分隊長の指揮に従ひ正確なる射撃を實施し以て逐次敵の重火器を撲滅し友軍の攻撃を容易ならしめた。

引續き翌十六日拒馬河畔望海庄附近の攻撃に當り連射砲中隊は前衛及聯隊主力の渡河掩護の重任を受け午後一時同河左

岸に進入陣地を占領した。敵は我が渡河を妨害すべく有ゆる火器を我渡河點に集中せし爲渡河部隊に死傷續出するに至つた。此危機に際し氏は砲手として敵彈猛烈を極めし中に於て克く分隊長の命に従ひ勇敢にして沈着正確なる射撃を爲し敵陣地の重火器及偽裝繫留船中より猛威を逞ふしつゝありし重火器を撲滅しかくして逐次渡河部隊に對す危害を除きつゝ激戦正に數時間聯隊の渡河攻撃を成功せしむることを得た。斯くして午後五時頃追撃に移らんとするや敵機上空に現はれ其

投下せる爆彈身邊に炸裂し無念頭部爆創全身爆彈破片創を受け其場に斃れ直ちに收容せられて天津野戰病院に入院衛生部員の手厚き醫療を受けたが殆ど人事不省の裡にも「大塚は大丈夫です速射砲頭張れ」と叫び續け衛生部員をして感涙にむせばしめたとの事である。氏は遺憾にも手當の甲斐もなく九月二十六日同病院に於て遂に名譽の戦傷死を遂ぐるに至つた。



氏の戦陣に立つや最新兵器の花形たる砲手として弾雨の下勇敢而かも沈着常に正確なる射撃に依り數多の敵重火器を屠り敵の心膽を寒からしめ新鋭火砲の威力を遺憾なく發揮せしのみならず致命傷を負ふて自ら戦ふ能はざるに至るも尙堅忍奮闘を續け連呼已まなかつた。かくの如きは最新兵器の砲手たる名譽と重責の存する所身命を君國に献げて息の絶ゆるまで奮闘せんとせる盡忠至誠の發露にして眞に連射砲手の鑑と云ふべきである。唯天氏に一層の雄腕を揮はしむるの時を借さず参戦間もなく空爆の犠牲たらしめしは惜みても尙餘あることであるが然し兩度の戦に樹てたる拔群の功績は千載の下支那事變史に輝き其赫々の芳名は萬古不朽に語り傳へらるべく英靈は不滅に生き

て護國の神と仰がれ神靈尙皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 奥村 琢男

勇敢なる機關銃手萬難を排して自己任務を完遂し遂に靈壽攻撃に玉碎す

氏は廣島縣豊田郡船木村の人にして父を伍市母をツタと云ひ大正四年二月三日生れで未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして孝心深く郷黨の模範青年として將來を囑望されて居た。昭和四年三月學術品行共に優秀の成績を以て船木小學校高等科を卒業し爾後家庭に在つて父の業を助けて居たが家事の都合にて昭和九年四月より鐵道線路工夫となり同十一年一月現役兵として朝鮮龍山歩兵聯隊に入隊し翌十二年六月には上等兵に進級し且善行證書を附與せられて歸隊となつた。

支那事變起るや間もなく應召森本部隊に編入せられ家森機關銃隊第八分隊の四番銃手として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて北支に上陸するや酷暑泥濘飢渴の困難を冒し天津より北京を経て京漢線に沿ひ前進し九月十五日琉璃河畔の戦闘に所屬大隊は敵前迂回行動を爲して凹世庄及田各庄の敵を攻撃した。此際所屬機關銃隊は第一線歩兵の前進に伴ひ逐次其陣地を推進變換して歩兵の攻撃に協力し大隊をして敵翼包圍の行動を容易ならしめ翌十六日夏村攻撃の際に氏の小隊は第六中隊に配屬せられ適時適切に敵の重火器を制壓して該中隊の攻撃を容易にし遂に其の突撃を成功せしむるに至つた。之等兩日の戦闘に氏は雨下する敵火に克く分隊長を輔佐して終始勇敢に活躍し遺憾なく機關銃の威力を發揚して戦勝に寄與する所大なるものがあつた。

九月十七日所屬部隊は琉璃河畔を出發し連日連夜敗殘兵を驅逐しつゝ保定南方地區に追撃を續行し同月二十五日には沈家、佐羅家井附近に陣地を占據し我が前進を拒止する敵を攻撃した。氏は此の追撃間不眠不休の身を以て自己の勞苦を顧みず馬匹を勞り或は警戒に或は搜索に活躍し殊に沈家佐附近戰闘の際には氏の分隊は抱陽山方向より猛射を受け戰闘頗る苦境にありしも氏は不屈不撓四番銃手として勇敢に活躍し功績偉大なるものがあつた。



沈着適切なる射撃を爲し機關銃威力を遺憾なく發揮したが敵又氏の小隊目がけて銃砲火を集中し激戦正に最高調に達した。午後四時三十分頃無念氏は右大腿部に貫通銃創を受け出血甚しく遂に名譽の戦死を遂げた。併し此際氏等の奮闘掩護に依り我が砲兵及歩兵砲は陣地變換を爲すを得其の協力を得て所屬隊は此の日間もなく敵陣を奪取し延いて十日石家莊は皇軍の占領する所となつたのであつた。

十月初旬皇軍は敵が戰略要地として多年防禦工事を施しありし工業都市石家莊正定を攻略すべく行動を開始し所屬森本部隊は十月七日敵の前陣地たる石家莊西北靈壽を攻撃した。敵は二線に陣地を占領し激戦の後其の第一線を奪取したが敵の第二線陣地は尹凡同の高地帯にあつて最も頑強に抵抗し殊に第一線奪取後我が砲兵及歩兵砲の協力を得ざりし爲敵の迫撃砲機關銃は猛威を振ひ我が第一線歩兵の攻撃前進は頗る困難に陥つた。此の時氏の小隊は敵前百五十米に近迫し我が第一線部隊を猛射しつゝある敵重機關銃を制壓すべく必死の奮闘を續け氏は四番銃手として篠つく雨の如き敵彈下に剛膽

氏は幼より孝心深く村内の模範青年と賞讃されて居たが今次聖戦に従うや機關銃手として沈着剛膽身命を惜まず凡ゆる辛酸を克服し重要任務の遂行に邁進し遺憾なく機關銃の威力を發揮した。戦死二ヶ月前所屬銃隊長家森大尉より氏の父宛の通信に「令息琢男殿は初年兵の時より小官が教えたが實に兵中の兵たる模範兵であつた。小官が深く信頼して居る。小官とは異體同心であるから御安心下さい」とあつた。如何に厚く信頼されて居たかが判かる。今や其勇姿に接するを得ず洵に痛惜に堪えないが其赫々たる偉大の功績は燦として皇軍戦史に輝き其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 湧井憲次郎

堅忍勇敢の機關銃手院家村攻撃に奮戦するも尙銃把を離さず

氏は栃木縣安蘇郡葛生村の人にして父を彌四郎母をマシと云ひ大正三年五月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温良快活事に當り熱心にして不屈不撓の氣概を有し又責任觀念頗る強かつた。昭和二年三月葛生小學校尋常科卒業後引續き縣立佐野中學校に入り同七年三月同校を卒業し其後は家事に従事してゐた。昭和十年一月徵兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し學術の成績優良にして翌十一年五月上等兵に進級し同年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三機關銃中隊に編入せられ機關銃射手として同月廿六日勇躍征途に就いた。北支戦線に到着するや早くも九月下旬小朱寨附近の戰闘に参加し其後保定附近に於て爾後の追撃準備の爲諸般の整備

に不眠不休の努力を続け克く所命の任務を完ふし次で十月上旬津沱河の線に向ひ三十里餘の強行軍を實施した。然るに道路頗る不良加うるに屢々河川の徒渉等機關銃隊としては頗る難行軍なりしが氏は此間不屈不撓凡ゆる辛酸困難を冒し而かも常に進んで難局に當り遂に津沱河附近に達するや所屬隊は第十二中隊に配屬せられ敵陣地近く進出して敵情を偵察しつゝ爾後の攻撃を準備し十月八日より津沱河の渡河戦は開始せられた。該河は河幅三百米もあり水深所々身を没する所あり



而かも濁流二米餘に及び其の渡河は極めて困難であつたが氏は率先裸體となりて或は馬を牽き或は鞍を背負ひ或は機關銃を擔ひて再三渡河して銃隊の渡河を全からしめ爾後の進撃に滋滯なからしめた。十月十日午後所屬隊は石家莊を占領し引續き敗退せる敵に對し急追撃に移り十一日午後院家村附近に達するや午後一時三十分頃該村附近に於て頗る優勢なる敵と遭遇するに至つた。敵は村落に據り機關銃迫撃砲等を以て猛烈に射撃し來りしが破竹の勢を以て追撃せし我軍は寡兵に拘はらず直ちに展開して猛攻を開始した。氏の所屬隊は大隊の右第一線たる第十中隊に配屬せられ猛火の下歩兵中隊に協力して一進一止勇敢に前進中我が第一線歩兵の前進を憚ましつゝある敵の自動火器に對し射撃を命ぜらるゝや氏は沈着かく正確なる射撃を以て見事之を撲滅し以て歩兵の前進を容易ならしめたかくして逐次敵に近迫し第一線歩兵は體て突撃に移らんとする頃再び敵自動火器の猛射により歩兵の前進は頗る困難に陥つた。かくと見たる氏は此の敵自動火器の位置を確かめんとせしも巧に地物を利用し其位置容易に判明せざりしが氏は此頃敵彈一層猛烈を極めしも之を意とせず熱心敵情

を視察し遂に之を發見確認するに至り直ちに分隊長に報告すると同時に時を移さず之に急襲的射撃を加へ忽ちにして之を制壓した。之が爲第十中隊は此機を逸せず突撃を敢行したが然し其時恰も午後五時過無念氏は右胸部及腹部に貫通銃創を受け銃把を握り緊めたる儘遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦場に臨むや不屈不撓路河川飢餓不眠不休の諸勤務等何れも未だ氏を屈するに足らなかつた。而して彈雨の下に立つや沈着勇敢或は迅速なる敵發見となり或は毎發必中の射撃となり以て皇軍機關銃の精銳を發揮し第一線歩兵戦勝の動機を作りて遺憾なかつた。殊に斃れて尙ほ銃把を離さざる如き是れ一に機關銃射手たる重責の存する所一身を君國に獻げ敵を殲滅せずんば斃るゝも尙已まざる盡忠至誠の發露と云ふべきである。征戰中途氏の如き堅忍勇敢の良射手を喪ひしは洵に痛惜に堪へざるも其樹てたる拔群の武功は萬世不朽皇軍戦史に輝き其英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 河合 彌七

乘艇黃浦江上に破壊し上官の危急を救はんとして犠牲となる

氏は名古屋市東區船附町の人にして父を新作母をたかと云ひ大正二年六月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性温良眞摯にして孝必深く常に責任を重んじ難局に當るや沈勇果斷遂げずんば熄まざるの氣概を持つて居た。昭和二年三月名古屋市清水小學校高等科を卒業後直ちに同市内明治銀行へ給仕として入行し克く勤務に精勵して居たが業務不振の爲昭和七年

辭任しメリヤス製造見習に轉業して勤積中同九年一月現役兵として歩兵名古屋聯隊へ入營し同年四月滿洲事變に従軍して各地の警備討匪に任じ勇戰奮闘し同年十二月には上等兵を命ぜられ翌十一年一月滿期除隊となつた。在隊間勤務精勵學術科の成績優秀にして除隊に際しては善行證書及下士官適任證書を授與せられ又其後滿洲事變の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。除隊後は岐阜縣巡查に採用せられ御嵩警察署詰となり在勤中人命救助に依り署長より表彰せられた。

支那事變起るや間もなく應召某管理部の要員として勇躍中支方面への征途に就いた。八月三十日吳淞附近に於ける戰鬪に於ては敵彈雨飛の情況下に所屬司令部の警戒に任じ進んで傳令斥候の重要勤務を志願し豪膽機敏なる行動を以て克く其任務を達成し以て他兵の模範となつた。次で九月四日五日の兩日に亘る揚行鎮附近の戰鬪を開始せられるや氏は所屬諸上官の身邊を護衛し又所屬司令部全般の警戒に任ずる等常に積極的に活躍し其重任を全うした。

九月五日より飯田部隊が虬江碼頭附近に於て海軍陸戰隊と策應して上海東北方正面の敵陣地を攻撃するや其情況不明なりし爲所屬司令部副官益森少佐は其攻撃進捗の程度及攻撃計畫を詳知せんが爲氏外二名の傳令を隨へ六日午後八時頃吳淞碼頭より一小艇に乗艇し黃浦江を過りしが途中黃浦江左岸地區及浦東地區より照明彈の照射を受くると共に小銃及機關銃の猛射を受くるに至つた。氏は沈着毫も動ぜず適時正確なる狙撃を以て之を制壓しつゝ一意航行を續けた。時恰も上海附近は敵の空襲圈内に在りて市街は素より各艦艇は悉く燈火の非常管制中にして敵の照明已むや辛じて近接せる船影を認むるの程度であ



つた。乗艇は敵と應戦しつゝ、イよりイを傳はりて虬江碼頭を右に見て上陸地に接近中不幸我が海軍舟艇と衝突し氏等の舟艇は破壊され見る間に浸水沈没の厄に遭ふた。全員は水中に沈んだが勇敢なる氏は武裝のまま益森少佐の危急を救はんとして激流に飛び込んだ。然るに折柄干潮時の激流の爲十數米も流され尙も必死と少佐を求めて居た。海軍舟艇は直ちに照明燈を以て照明し氏に救助器を投げ與へたが力盡き戦友中島上等兵と共に水底に沈んだ。益森副官及隨行者田中上等兵は人事不省のまま海軍舟艇に救助せられた。其後氏等の遺骸は我が軍の手に收容されたが數時間の後蘇生せる益森副官等は連絡の重任を果たして歸還し氏等の尊き犠牲の前に跪き涙ながらの感謝を捧げて英靈の冥福を祈つた。

氏は幼より具さに勤勞を體驗して心身を鍛錬し軍隊教育殊に實戰場裡に往來して愈々忠君愛國の信念を大成した。今次聖戰に参加するや選ばれて高級司令部の要員となり熱誠眞摯常に戦友等の景仰と上司の深き信頼を受けて居た。而して不幸水上の災禍に遭ふや我が身の危険を顧りみず上官の危急を救はんとして遂に尊き犠牲となつた。其崇高なる責任觀念と其果敢なる行動とは正に皇軍精神を發露して遺憾なかつた。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは哀悼痛惜の悲に堪えずと雖も其烈々たる忠誠は滿洲事變の功績と共に皇軍戦史を飾りて芳名を不朽に傳へられるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 川端福三郎

一死奉公の決意固く可西務に奮戦偉功を奏して惜くも空爆に散華す

氏は群馬縣多野郡小野村の人にして父を數衛母をしんと云ひ大正三年十二月十八日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして親切其教職に在りし時代は生徒は勿論村民の敬愛を受け分隊長としては上官の信頼部下の尊信厚かつた。昭和二年三月小野尋常小學校を卒業し引續き縣立藤岡中學校に入り同七年三月同校卒業同八年三月群馬縣多野郡上野尋常高等小學校代用教員に奉職し同十年十二月入營の爲退職した。在職間熱心勉勵して音楽科及教授法管理法並に教育史の夫れ／＼講習證書を附與せられた。昭和十一年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして下士官候補に採用せられ同年十一月仙臺教導學校に入校將來優秀の幹部となり君國に盡すべく孜々として勉學してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月原隊に歸還を命ぜられ森田部隊第六中隊に編入第三小隊第三分隊長として同月十四日勇躍征途に就いた。其出征に當り郷土の地を汽車通過に際し歡送の村民に對し車窓より投出したる書面中「前文略、君國に報ゆる千載一遇の好期が到來しました。誠心誠意粉骨碎身一死以て鴻恩の萬分の一に答へ奉る覺悟であります。皆様の御期待に副ふべく充分に頑張ります云々」君の爲しての御楯と征く吾ぞあだなす敵を打ちもつくさむ。今ぞ知る吾故郷の御めぐみかへるべき日のなしと思へば」とあつた。北支戦線到着後九月十三、十四日永定河附近の戦闘に當つては旅團豫備として司令部並に車輜部隊の掩護に任じ又殘敵を掃蕩しつゝ勃々たる心を押へて第一線に跟隨した。

九月十六日拒馬河畔望海庄附近可西務の敵陣地攻撃に當りては氏は第三小隊長の指揮に屬し第三分隊長として待望の第一線となり本戦闘に参加することを得た。中隊は當日午後零時三十分行動を起し午後二時三十分より攻撃を開始した。敵

は堅固なる既設陣地に據り頑強なる抵抗を爲し殊にトーチカ式側防機關銃を備へ之れより猛烈に射撃し來り頗る中隊の攻撃前進を憚ました。第三小隊は中隊長より此側防トーチカの撲滅を命ぜらるゝや小隊は勇躍此敵に對し攻撃前進を開始せしが氏は敵の十字火を冒かしつゝ勇敢にも率先陣頭に立ち部下を激勵しつゝ克く分隊を掌握し的確に躍進を重ね遂に敵前三十米に達し愈々突撃の令下るや分隊の先頭に立ちて敢然勇躍敵陣地に突入して奮戦しさしも堅固なりし該トーチカを



見事奪取し其結果延いて中隊主力の攻撃を容易ならしめた。而して午後五時三十分頃となるや敵兵約一ケ中隊左小隊の前面に逆襲し來りしを以て氏は可西務方向よりする敵の猛射を意とせず分隊を提げ獨斷白兵を揮つて敵の一翼に突撃し熾滅的打撃を與へて撃退し直ちに機を失せず之に追尾して遂に可西務の一角に突入該陣地をも奪取し尙も敵を追撃中敵機上空に現はれ其投下せる爆弾身邊に炸裂し無念兩大腿部に爆創を受け其場に倒るゝに至つた。其際駆け付けたる軍醫に「今やられるとは残念です」と云ひ再び附近に爆音を聞くや「銃を借して呉れ」と叫び瀕死の重傷なるに尙も銃を執りて戦はん

とす。然し重傷の身は最早起つ能はず望海庄に收容せられ手厚き醫療を受けたるも致命傷のため手當の甲斐もなく翌十七日午前四時遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏は待望の幹部となりたま／＼時運に際會し出陣するや一死奉公生還を期せざるの覺悟牢固たるものがあつた。果せる哉其殉忠の決意流露せる所彈雨の下率先陣頭に立ち掌握確實指揮的確或は果敢トーチカを屠り或は獨斷逆襲を粉碎し或は

疾風迅雷急追功を奏し常に分隊の戦力を發揮して遺憾なかりしのみならず致命傷に屈せず尙戦はんとせるは感嘆の外なしと云ふべきである。惜哉天氏に一層の雄腕を揮ふの時を借さず征戦幾何もなく空爆の犠牲たらしめしは長恨盡きざるも可西務の一戦に樹てたる拔群の功績は其殉忠の精神と共に赫々として皇軍戦史に輝き芳名は千古に謳はれ其英魂は不滅に生き護國の神となりて尙も皇國を守護し兩親遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 川島政吉

一死殉忠の決意固く奮戦克く其の任を完うし張家口城外に散る

氏は埼玉縣北埼玉郡川邊村の人にして父を淺吉母をいよと云ひ大正四年二月十五日に生れ妻たよとの間に一子史子を擧げた。資性温厚眞面目にして責任觀念強く事に臨み積極勇敢であつた。昭和四年三月川上小學校高等科を卒業し同十年一月青年訓練所の課程を修了したが昭和九年には青年訓練所教官より同十年には訓練研究會理事長より夫れく賞状を附與せられ又北埼玉聯合雄辯大會には東日新聞社よりメタル賞を授けられた。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同年五月滿洲に派遣せられ洸南に駐屯警備に任じ八月には贛榆縣下の討伐に参加し翌十二年三月齊々哈爾に移駐し滿洲の治安肅正に貢献してゐた。氏は入營以來軍務に精勵學術の成績良好殊に射撃に秀で射撃徽章を附與せられた。

支那事變起るや小林部隊第十中隊に屬し中隊指揮班員として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。氏は北支戦線に到着後兩親に手紙を送り「總て覺悟の上です天晴軍人の本務を果すべく戦つて居ます。男の子一人持たぬ氣になつて諦めて下

さい。何もかも運命國家の爲です。天皇陛下の爲です軍人としての名譽です。戦場の我々には恐ろしいの悲しいのと言ふ氣持は少しもありません。便りも思ふ様に出来ませんが最後かも知れませんが不覺をとるやうな事は決して致しません御安心下さい。では元氣で戦ひます」とあり洵に一死奮闘國に報ぜんとする決意牢固たるものがあつた。八月上旬所屬隊は天津附近の殘敵を掃蕩し同月中下旬外長城線附近萬全附近の戦闘に参加し當時氏は連絡上最も至難なる夜間或は

峻峻の地而かも彈雨の下に於て不屈不撓勇敢に東奔西走して中小隊間の連絡に努力し終始克く之を確保して中隊長の指揮掌握を確實ならしめ其戦力を發揮せしめた。

八月二十五日午前三時所屬中隊は重機關銃及歩兵砲各一小隊を配屬せられ揚家庄東方永定河右岸に到り兵團の右側を掩護すべき聯隊命令を受け直ちに出發先づ第一小隊を先行せしめて敵情及陣地の偵察を命じた。氏は中隊指揮班より派遣せられ該小隊と行動を共にし目的の地點に達するや第一小隊と中隊長との連絡の爲闇夜道なき高梁畑の中を馳驅して迅速確實に其連絡線を開設した。聽て中隊主力



は目的地に進出して陣地を占領し對岸の敵情を搜索して警戒に任じありしが午前十時三十分敵の歩兵約六百は對岸に自動火器及重輕迫撃砲を配置し其射撃の掩護下に隊旗を翻しつゝ我に向つて反撃前進して來た。中隊は寡兵克く必死の防戦を爲さねばならぬ事となつた。時刻を追ひ戦闘は益々激烈となり中隊長の小隊長に對する命令の傳達も頻繁となりしが氏は彈雨の下益々活躍して逐次其傳達に任じ激戰場裡に於ける中隊長の戦闘指揮を容易ならしめつゝありしが敵は其優勢を持

みて逐次近迫し來り午後二時稍前には我陣地前百五十米に達し益々猛火を逞しふするに至つた。此時氏は中隊長より第一線小隊長に重要命令の傳達を命ぜらるゝや勇躍任に就き篠つく雨の如き敵弾下に據るべき地物もなき河原を縦横に奔走し其命令を迅速に小隊長に傳達し且第一線兩小隊長の状況を現認して詳細之を中隊長に報告し以て中隊長の戦闘指揮を容易ならしめかくして指揮機關の能力を發揮しつゝありしが午後二時頃我陣地中央附近に敵迫撃砲彈連續落達し其一彈は氏の身邊に落下炸裂し一破片は氏の腰部を貫通して其場に倒るゝに至つた。しかし剛氣の氏は之に屈せず尙も指揮機關として奮闘せんと努めしが遂に力盡きて收容せられ初療を受けたる上張北野戦病院に後送せらるゝに至つた。然るに途中死期迫れるを自覺せる氏は戦友の答に對し「何も言ひ遺すことはない」と述べ間もなく遂に二十六日名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏は征途に就くや選ばれて中隊指揮機關となり不屈不撓連絡上最も至難且重要な夜間峻峻の地に或は敵前至近彈丸雨飛の下決死挺身傷つくも尙任務を繼續し中隊の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に其絶命に際する一語は言極めて簡なるも出陣時決意の如く家を忘れ身を忘れ唯々君國に報ぜんとせる以外何ものもなかりし至誠盡忠の精神を窺ひ得るのである。氏惜くも内蒙の華と散りしと雖も其赫々の武勳は万世不朽皇軍戦史に輝き其英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると同時に一家の守護神ともなり遺族の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 川村 潔

決死敵前に水濠を偵察し壯烈堅陣の一角を奪取す（姚官屯血戦の華）

氏は鳥取縣八頭郡中村の人にして亡父を谷口柳平母をいしと云ひ明治四十三年一月二十日に生れ川村家の養子となり養父を徳藏養母をとみと云ひ妻幸枝との間に長男仁志を擧げた。性明朗快活にして情義に敦く感激性の強い人であつた。

大正十三年三月國中學校高等科を卒業後直ちに國中農業補習學校に入學昭和五年十二月卒業又同村青年訓練所へ入所し所定の課程を修了したが小學校時代より頭腦明晰で常に優秀なる成績を擧げて居た。蓋し氏は總べての點に進取向上を企



圖し旺盛なる體力氣力と相俟ち不屈不撓の氣概を以て努力せる結果であつた。昭和六年六月現役兵として近衛歩兵第二聯隊に入營し熱心軍務に精勵常に優秀なる成績を擧げ就中銃劍術に長じ伍長勤務上等兵を命ぜられ翌七年十一月の除隊時には善行證書並に下士官適任證書を授與せられ輝しく歸郷した。其後は家庭に在りて農業に精勵し又在郷軍人分會幹部に推擧せられ大に盡力し尙餘暇を以て實家の家業たる菓子卸業を手傳ひ昭和十一年八月よりは專賣局加茂煙草販賣所に勤務する事となり熱誠其職務に精勵して居た。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し篠原中隊の第一小隊第四分隊長として勇躍征途に就いた。氏は陣中より妻宛に「どうか今後はお前が二人分の親孝行をして呉れ」と認めてあるが此一語は氏が家庭に對する凡べての念願であつた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し炎暑泥濘の難行軍を續け津浦沿線を進み八月下旬には津浦線上永定河畔の要衝靜海附近の諸陣地を一蹴して九月十日前後には馬廠附近一帯の堅壘を突破した。残念乍ら氏の所屬中隊は馬廠攻撃には兵團豫備隊となり一同切齒扼腕の機會を待つて居た。

九月二十日遂に待望の時機が来た。敵が津浦線上最後の抵抗線と恃める滄州陣地帯中最も重點をなす正面に最前線部隊として選ばれた。一同萬歳を唱へ血湧き肉躍り會心の笑みは自づから將兵の顔に漲り居た。滄州附近の陣地帯は二年有半の歳月を費やして構築せる數線の堅陣にして徒渉不能の水濠と鐵條網を到る處に張りまわし、各種の銃砲火器を配置して水も漏らさぬ防禦設備を完成し敵は乾坤一擲皇軍を陣前に撃滅して北支戰線の西北正面より大攻勢を取らんとする氣構へで居たのであつた。所屬中隊は北部李家婁と云ふ小部落の線に進出した。敵との距離は五六百米、敵影は手に取る如く認め得たが陣前水濠の状態は不明であつた。中隊長は夜襲に決して川村を呼べと命じた。間もなく鐵帽迄偽裝せる氏は中隊長の前に進み出で重大命令を受けた。夫は前面の水濠の障壁程度を偵察すべき決死斥候の任務であつた。斯かる中にも敵の迫撃砲弾は能く部落に命中炸裂し誰々上等兵がやられましたと悲痛の報告が傳令に依つて齎されるを中隊長も哀愁の沈黙で僅かに背いて居た。愛としき川村斥候が今又死線に向ふ後ろ姿を眺めて生還を祈り續けた。氏は三名の斥候を隨へ青白き月光を浴び乍ら勇躍水濠に近づけば早くも敵は之を發見して篠突く雨の如く猛射を初めた。氏は一進一止敵陣地直前の水濠に辿りつき水中に飛び込んで深さまで詳細に偵察し全身泥まみれとなり奇蹟的にも全員無事歸還した。中隊長は氏等の手を取つて泣いて其成功を激賞した。明くれば二十一日豫定より一日早く南李家婁及人合庄と逐次に夜襲を行ひ滄州會戰の緒戦に篠原中隊の驍名を馳せたるは氏の決死斥候の功績に俟つ處頗る大であつた。殊に人合庄の夜襲に於ては氏はよく部下を指揮掌握して小隊長の意圖の如く其分隊擲彈筒の威力を發揚して突撃の動機を作り又中隊突撃に方ては水濠鐵條網を突破して率先敵陣地に突入り徹宵部落内の頭敵を殲滅して夜の明け方に南部人合庄に進出するを得た。

二十三日午後六時より所屬中隊は愈々敵主陣地の鎖鑰たる姚官屯陣地に對し壯烈鬼神を哭かしむる肉弾戰を準備した。戰鬪刻々と激烈を加へ大隊長大隊副官相續いで斃れ第八中隊長も重傷を負ふ等正に半數以上の幹部を喪へる所屬大隊の將

兵は怒髮天を衝き午前四時を期し最後の肉弾戰を展開するに至つた。二條の水濠二條の鐵條網を突破して死の突撃を行へば敵の銃火及無數の手榴彈は嵐の如く集中し來り青白い月下に伏屍累々悽慘云はん方もなかつた。此間氏は右翼方面より眞つ先かけて敵陣地に突入りして敵を突き伏せ殲ぎ倒し陣地の一角を占領し尙も戰果擴張中憎くや敵手榴彈數發を胸部に受け「天皇陛下萬歳」を奉唱して壯烈なる戦死を遂げた。部下分隊員も七名は噎れ四名は重傷を負ひ鬼哭愁々邊りを唐紅いと染めたが氏等の尊き犠牲に依り拂曉頃姚官屯を占領するを得た。

氏や志操堅確にして剛毅果斷の人而かも頭腦明敏にして往くとして可ならざるなく家庭に在りては一家の柱石として克く家業に精勵し親戚知己一同の敬慕を受け出で、軍務に従ふや成績拔群にして上下の信用甚だ厚かつた。今次聖戰に参加するや克く分隊員を掌握して團結鐵石の如く俊敏戰機に投合して擲彈筒の威力を發揚し又決死斥候となりて偉勳を奏し遂に姚官屯の血戰に殊勳を奏して玉碎した。定に是れ皇軍歩兵の精銳たり軍人の龜鑑たるものであつた。斯かる有爲忠誠の氏を喪へるは眞に痛惜哀悼の情に堪えざるも氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戰史に光彩を放ちて芳名を百世に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途並に實家養家殊に愛子の將來を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 加藤 高松

小隊連絡掛として勇敢其任を完うし遂に張家口城外に散る

氏は東京市東葛飾區小松川町の人にして父を權次母をまつと云ひ大正四年五月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性温

厚真面目にして熱心勤勉殊に書は得意であつた。昭和四年三月奥戸小學校尋常科を卒業同五年四月青年學校に入り同校卒業後更に同十年十二月同校研究科に入り其課程を修了した。而して小學校在校間は常に成績優等であつた。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同年五月滿洲に派遣せられ洮南に駐屯警備に任じ同年十二月齊々哈爾濱に移駐滿洲國の治安肅正に貢献してゐた。氏は入隊以來熱心精勵學術の成績良好にして同十一年十二月上等兵に進級し殊に射撃に秀で射撃章を附與せられた。



支那事變起るや小林部隊第十中隊に屬し第一小隊連絡掛として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。北支戰線に到着するや所屬隊は天津附近の殘敵を掃蕩し八月中下旬には外長城線附近及萬全附近の戰鬪に参加し其の際氏は連絡上最も至難なる夜間或は峻峻の地而かも彈雨の下に於て不屈不撓凡ゆる困苦を克服し勇敢に東奔西走して小分隊間の連絡に努力し終始克く之を確保して小隊長の指揮掌握を確實ならしめ其戦力を發揮せしめた。

八月二十五日午前三時所屬中隊は重機關銃及歩兵砲各一小隊を配屬せられ揚家庄東方永定河右岸に至り兵團の右側を掩護すべき聯隊命令を受け直ちに出發した。其の際第一小隊は中隊に先行し永定河右岸の陣地及對岸の敵情搜索を命ぜらるゝや氏は暗夜道なき高粱畑を駆け廻りて分小隊間の連絡に努力し終始小隊長の掌握を確實ならしめ小隊の陣地占領を豫定の如く完了することを得しめた。爾後中隊も陣地占領を終り對岸の敵情を搜索して警戒中午前十時三十分敵の歩兵約六百對岸に自動火器及輕迫撃砲を配置し其射撃の掩護下に隊旗を翻しつ

ゝ我に向ひ攻撃前進し來り爲に中隊は寡兵を以て必死の防戦を爲さざるを得ぬ情況になつた。敵は頗る優勢にして戰鬪愈々激烈となるに伴ひ小隊長の部下分隊に對する命令も徹底頗る困難となりしが氏は此間彈雨の下克く活躍して逐次命令意圖を傳達し小隊長の激戰場裡に於ける戰鬪指揮を容易ならしめつゝあつた。然るに敵は優勢を恃みて逐次近迫し來り午後二時稍々前には我陣地前百五十米の距離に達し益々猛威を逞しふするに至つた。爲に其銃砲聲は股々として轟き小隊長の第一線分隊長に對する命令の音聲による下達は徹底不可能となるに至つた。かくの如き狀況となるや氏は小隊長の重要命令を第一線最右翼分隊長に傳達すべく篠つく雨の如き敵彈下に據るべき地物もなき河原を勇敢に躍進して迅速確實に之を傳へ首尾よく其重任を果して再び小隊長の許に復歸途中午後二時頃敵迫撃砲彈我陣地の中央附近に連續落達せしが其一彈は氏の頭上にありし楊樹に觸接炸裂し殆んど其全彈子を蒙り遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏は征旅に就き選ばれて小隊連絡掛となるや不屈不撓連絡上最も至難且重要な夜間峻峻の地に或は敵前至近彈丸雨飛の間に決死挺身克く其重任を完ふし小隊の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。かくの如きは是れ重き使命の存する所身命を君國に捧げて斃れて後已む盡忠至誠の發露と云ふべきである。征戰中途惜くも内蒙の華と散りしは惜しみて尙餘りあるも併し其拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて神靈尙も皇國の前途を守護すると共に一家の守護神ともなり老親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵伍長勳七等功七級 河合一夫

蔡家橋の苦戦に獨斷要點の敵を撃退し中隊の難局を打開す

氏は愛知縣渥美郡福江町の人にして父を作太郎母をとのと云ひ大正六年九月十七日に生れ未だ獨身であつた。性快活眞摯にして孝心深く又責任觀念に富み職務に精勵し世人の愛敬を受けて居た。昭和七年三月中山小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて家業を手傳ひ克く孝養を盡して居た。昭和十年十二月現役志願兵として名古屋騎兵聯隊へ入營し間もなく滿洲派遣部隊に屬し哈爾濱に駐屯し同地附近の警備に任じ功を以て勳八等に叙せられ翌十一年五月原隊へ復歸し同年十月には騎兵上等兵に進級し同時に踏鐵工兵を命ぜられた。

支那事變起るや星騎兵部隊に屬し川島隊に編入せられ八月下旬勇躍中支江南戰線への征途に就いた。斯くて九月初旬には吳淞砲台附近に在りて諸種の警戒勤務に服し同月十一日顧家宅附近の戰闘には小隊長の傳令として熾烈なる敵火を冒して各種の連絡勤務に服し勇敢機敏に任務を遂行し以て其指揮連絡的確ならしめ又所屬小隊が顧家宅附近に於ける敵の第一線陣地を突破せる際第四分隊長戦死するや爾後該分隊長となり指揮適切勇猛果敢に攻撃を續行して午後五時遂に當面の敵陣地を奪取して西部顧家宅西端に進出同地を確保するに至つた。

爾後所屬部隊は王家宅に手馬を残置し大平橋附近に向ひ前進せしが氏は手馬掩護隊の分隊長を命ぜられ同地に在りて至嚴なる警戒勤務に服すると共に彈雨を冒して第一線部隊との連絡を確保した。

十月二十七日大場鎮の陥落するや所屬隊は當面の敵を驅逐して速かに蘇州河方向に進出し敵の退路を遮斷すべき目的を以て午後一時揚家橋を出發した。氏は其際中隊の尖兵に屬し殘敵を掃蕩しつゝ果敢なる前進を續けたが漸次有力なる抵抗

を受くるに及び中隊の右第一線最右翼分隊長として展開し熾烈なる敵の彈雨を浴びつゝ勇躍敵に近迫せるに敵は蔡家橋南側の無名クリークに沿ふ既設陣地に據り頑強に抵抗し中隊主力は爾後の攻撃前進極めて困難となつた。氏は此難局に方り獨斷率先匍匐敵線に肉薄し遂に蔡家橋部落の北端に進出し正確迅速なる射撃を以て之を壓倒し此敵をして退却の已むなきに至らしめ所屬中隊の攻撃前進を誘起し爾後の戰闘に至大なる利益を與へた。



越えて十一月一日蘇州河附近の張家濱北側部落の掃蕩を命ぜらるゝや部下分隊を指揮し午後一時出發所命部落附近に到り豪膽不敵の行動を以て掃蕩中圖らずも敵砲彈は氏等の身邊に落下炸裂し氏は上腹部左大腿部及左上膊部に其の破片創を受けて打倒れた。其後野戰病院に收容せられ手厚き治療看護を受けたが重傷の爲遂に同日午後四時二十分惜くも江南戰線の華と散つた。

氏や郷に在りては温厚篤實の孝子たり出でゝ軍に従ふや慧敏熱心而かも黙々として自己の職務に邁進し衆兵の模範として中隊將兵より深き信頼を受けて居た。果然聖戰に参加するや近代戰中稀に見る級強且慘烈なる上海戰線に起ち晝夜間斷なき敵の彈雨の中に或は決死傳令の任務を果たし或は分隊長として旺盛なる企圖心の下に所屬中隊の爲難局を打開する等騎兵隊本來の性能發揮には至難なる情況下にも拘はらず克く其戰闘威力を發揚して所屬隊任務の達成に貴重なる素因を作爲した。是れ全く氏等の尊き犠牲的精神の發露の賜と謂ふべきである。然るに蘇州河北岸地區の掃蕩戰に早くも斯かる忠誠勇武の士を喪へるは痛惜哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の赫々たる功績は皇軍戰

史を飾りて不朽の芳名を後世に傳ふべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日騎兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 吉澤泰藏

元氏附近戦闘に歩兵砲小隊敵の急襲を受け決死突入玉碎して砲を守護す

氏は茨城縣猿島郡八俣村の人にして父を與三郎母をうらと云ひ大正二年九月十八日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚積極的氣概に富み負けじ嫌の人にして孝心深く如何にもして親を樂にせんことを念願しつゝ業務に奮闘努力してゐた。昭和三年三月八俣小學校高等科を卒業し同五年一月東京市龜戸町宇田洋服店に勤め入營時に至つた。昭和七年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵して學術の成績優良特に武技に長じ射撃劍術共に賞状を附與せられ同九年十一月善行證書を授與せられて満期除隊し翌十年三月より小倉工廠銃器製造所輪削工場に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊第二歩兵砲小隊に編入砲手兼指揮班員として同月二十七日勇躍征途に就いた。出征途上よりの第一信に「兄歸家の由元氣百倍し一死奉公生きて再び歸らぬ覺悟後は宜敷頼む」第二信には「皇軍將士の意氣正に天を衝くの概があります(中略)私は兄の分まで働いて皇恩の萬分の一に報ゆる唯一死奉公一意専心軍務に精勵します」と一死殉忠の決意牢固たるものがあつた。所屬隊は北支に到着し九月十四日永定河の渡河攻撃に際しては濁流腰部を洩し砲車は押流され馬は斃るゝ状況下に氏は克く奮闘渡河して奮戦し九月下旬大冊河畔より保定南方地區に至る

間の行動は道路不良且濕地水流多く車輛の前進頗る困難を極め就中二十一日の如きは遂に大隊主力との連絡を失ふに至り其後小隊は殆んど單獨行動し屢々敗殘兵の射撃に悩まされしが氏は行軍に警戒に連絡に積極的に熱心活躍し小隊の行動を容易ならしめた。此頃其心境を家郷に通信して曰く「其間多數の戦友と別れ我健全なるを恥に思ふ」とあり氏の面目躍如たるものがあつた。九月下旬より十月上旬に亘る保定涿沱河間の行動に際しても渡河其他幾多難路の通過に勞を惜まず眞面目に活躍努力して小隊の任務達成を容易ならしめ十月上旬涿沱河

々畔陳村附近の戦闘に際しては小隊が河岸に於て對岸陣地に對し猛射間氏は指揮班員として勇敢に活躍重要命令の傳達連絡に任じ其後追撃に移るや涿沱河の強行渡河に各種困難を冒して活躍し小隊の行動を迅速ならしめた。

十月十一日所屬石黒部隊は早朝石家莊を出發し鐵道線路に沿ひ元氏に向つて前進し途中午後三時過敵部隊を發見し午後四時大隊は部隊の右第一線として鐵道線路西側に展開し攻撃前進を開始した。歩兵砲小隊は大隊の中間に位置し夕刻までに敵の三線を突破せしが其間第一線歩兵に協力して其の攻撃前進を容易ならしめ引續き大隊は臘月の月光を利用し敢爲猛進恰も疾風枯葉を捲くが如く四周優勢なる敵の包圍を撃破しつゝ敵陣内奥深く突進した。歩兵砲小隊亦之に協力して猛進中偶々負傷者を生せし爲之に對する處置を爲しつゝある間大隊主力に遅れ連絡杜絶するに至つた。此際に於ける氏の活躍と努力とは實に目覺しきものがあつた。總て午後十時頃重機關銃二輕機關銃四を有する敵歩兵約二百は孤立せる我歩兵砲小隊に向ひ逆襲して來た。



此の時小隊は僅かに三十七名に過ぎず敵を近くに引寄せ零分畫射撃を以て急發射し敵を震駭せしめたるも敵は優勢を恃み尙も近迫し來り約三十米にまで肉薄し來つた。狀況かくまで急迫せるを見たる氏は敵の熾んに投擲する手榴彈を物ともせず抜劍して群がる敵中に斬り込み大に奮戦せしが無念敵彈數發を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし石黒部隊は氏等三十數人の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより赫々の戦果を收め敵をして多數の鹵獲品と千二百の屍體を遺棄して遠く潰走するの已むなきに至らしめた。

氏の家に在るや親に對し至孝其召されて征旅に就くや素より忠孝一如其出陣に際し覺悟披瀝の如く一死奉公萬死に一生をも希はず其決意の進る所不屈不撓彈雨の下積極勇敢只管任務に邁進し其本分を完ふして遺憾なかつた。殊に小隊孤立して夜襲を受くるや大敵たりとも懼れず決死突入敵の心膽を奪ひ砲を守護して之に一指だも染めしめざりしは軍人精神の發露にして皇軍の精華と云ふべきである。氏や征戦中途北支の華と敢りしと雖も奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功と忠孝一如の示範は萬世不朽皇軍戰史に輝き軍民の鑑となり英魂亦不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國の前途を守護すると共に一家の守護神ともなり兩親の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 吉 森 豊

慧眼克く戰機に投合して輕機の威力を發揚し遂に後屯に玉碎す

氏は岡山縣英田郡福本村の人にして父を作太郎母をなをと云ひ大正四年九月一日に生れ未だ獨身であつた。資性剛健着

實にして果斷に富み寡黙實踐の人であつた。昭和六年三月福本小學校高等科を卒業し翌七年四月同地青年訓練所に入所し同十年三月卒業したが在所中操行並に成績優良の模範青年として査閱官砂川大佐及郡教育會長より表彰せられ精勤章を附與せらるゝ事三度に及んだ。後青年團教育部長に推されスポーツにも秀でゝ居た。昭和十一年一月現役兵として岡山歩兵聯隊に入隊し成績優良にして十二月一日上等兵に進級し同日伍長勤務を命ぜられた。氏は昭和十二年七月歸休除隊の筈なりしが支那事變勃發し在營を延期せられ八月赤柴部隊に編入三木中隊



第一小隊の輕機關銃分隊長として勇躍北支方面への征途に就いた。

當時北支は稀なる豪雨に至る所出水し道路は泥濘膝を没し補給機關は圓滑を缺き軍行動の困難は名狀し難き有様であつた。斯る狀況下に所屬部隊は北支に上陸するや連日連夜困苦飢渴を克服して強行軍を続け八月二十二日には獨流鎮を二十四日には靜海を攻略した。之等攻撃の際氏の中隊は豫備隊であつたが靜海攻撃の際に敵の裝甲列車を攻撃し其の際氏は遺憾なく輕機關銃の威力を發揮し中隊の戦勝に寄與する處甚大であつた。次で九月四日より馬辛庄及馬集の攻撃

に際しては所屬中隊は大隊の右第一線となり夜暗を利用して敵陣地の前方約五百米に近迫して攻撃を準備し五日午前六時攻撃を開始した。此時氏は第一線小隊の左第一線分隊として攻撃に参加したが此攻撃間氏は馬集の最左翼望樓の家屋を占領して猛威を振へる敵の機關銃を發見し機を失せず獨斷之に急襲的猛射を浴びせ之を制壓して中隊突撃の動機を作り續いて中隊も突撃に移るや氏は分隊を率ひ深さ三米に及ぶ水濘を越へ中隊長と共に勇敢に突撃遂に馬集を占領し息つく間もな

く後屯を猛攻して同日午後五時同村南端を占領した。後屯は爾後に於ける我が攻撃の據點として重要な戦術要地である。之が爲敵は中隊が後屯を占領するや三方面より銃砲火を浴びせて来たが中隊長以下敵火を冒して陣地を構築し之が確保に努めた。然るに四五百の敵は同夜十時頃及午前一時頃二回に亘り後屯を奪還すべく逆襲して来た。此の時氏は沈着大膽にも敵を近距離に引寄せ急據群がり来る敵に急襲的猛射を浴びせ毎回多大の損害を與へ敵は多數の屍體を遺棄して敗走するに至つた。然るに敵は執拗にも翌六日更に後屯奪回を企圖せるものゝ如く陞官屯及前屯の敵砲兵は午後二時頃俄然我れに向ひ猛烈なる射撃を開始し中隊の陣地に集中炸裂する砲弾は物凄く爲に中隊は若干の死傷者を生じたが暫くにして息み午後三時に至るや敵砲兵は再び集中射撃を開始し前にも増した慘狀を呈するに至つた。然し氏は其の慘憺たる敵砲弾下に沈着冷靜部下を鼓舞激勵して陣地の確保に努め自ら敵情を監視して居た。然るに同三十分頃敵の一砲弾は氏の直前に炸裂し無念！氏は顔面及胸部に其の破片剣を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し中隊は氏等の仇とばかり翌七日前屯の敵砲兵陣地に突撃し多大の損害を與へて潰走せしめ十一日には遂に敵の要衝たる馬廠陣地を攻略したのであつた。

氏や剛毅果斷の一面春の如き温情を有し中隊内に於ても上下の信頼厚く衆望を寬めて居た。されば其後屯に玉碎するや三木中隊渡邊小隊長を始め戦友や部下は男泣きに泣いたとの事である。中隊長三木大尉より氏の父へ宛てた通信の一節にも「吉森君と小官とは常に親子の如き間柄にあり顔を見る毎にニコ／＼して恰かも親の顔を見る様に喜ばれ小官も絶體に君を信頼し重要な任務には必らず君を中心として差向け君も極めて勇敢且眞面目に活動する事實に神の如く崇高であつた」又「氏の遺骨は森山一等兵の遺骨と共に小官の室に安置しあり今も讀經を濟ませた處戦友が来て氏の靈前に梨を供へ生ける人に言ふ如く（吉森よ之を貰ふて来たサア喰べやう）と私語する様は泪なくては見られない。氏が生前中隊全員から敬慕されて居た丈に殊更戦死が惜まれる」とある。以て氏の人となりが見せらるゝ次第である。噫々氏は既に華北の華と

散り其の壯容に接するを得ず。然かし氏か輕機關銃分隊長として死地に分隊を一丸とし戦機に投合して克く輕機關銃の威力を發揚し馬集に後屯に中隊戦勝の素因を作つた其の赫々の武勳は皇軍戦史に牢記せられて後世に芳名を傳へられ英魂は不滅に生き護國の神と祀られ神靈尙皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵伍長勳七等功七級 余語 一正

孝悌兩全の勇士奈家橋の苦戦に勇戦奮闘して散華す

氏は愛知縣東春日井郡鳥居松村の人にして父を源十亡母をとめ養母を鈴子と云ひ大正三年十一月八日に生れ養家には許嫁女があつた。性濃厚篤實にして孝心深く殊に養母に對しては實父毎に勝るとも劣らざる孝養を盡し又實妹に對する慈愛も近隣賞讃の的となつて居た。妹ひで子の氏に對する敬愛も世の手本となり其女子商業學校を最優秀にて卒業の時縣知事よりの表彰状にも兄妹の愛情に就き明記せられし程であつた。昭和二年三月篠岡尋常小學校を卒業直ちに愛知中學校へ入學し第三學年を修了後名古屋市中區大船町山田米穀卸商店に勤務して居たが忠實熱誠業務に勉勵し且近代青年中稀に見る美德を認められ主人の信用殊に深く主人病死の際には實子の名は言はず「一正は居るか何もかも一正に聞け」と遺言して歿したと云ふ事である。昭和十年四月現役兵として在滿騎兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して上等兵を命ぜられ同十二年三月優秀なる成績を以て滿期除隊となつたが在滿警備の功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや間もなく應召屋部隊に屬し勇闘中支方面への征途に就いた。氏は出發に際し親しき戦友に對し「若し俺

が戦死したならば妻の良き指導者になつてやつて呉れ又子供時代から迎も俺を慕つてくれる唯一人の妹があるが吾れ亡き後は兄弟もなく嗚淋しい暮をするであらうから兄の氣持となり力になつてやつて呉れ云々」と用意周到に心情を打明けて頼んだ。士の戦場に臨むや素より生還を期せざる所而かも氏の温情慈愛の至誠亦涙ぐまじきものがあつた。



斯くて九月下旬吳淞砲臺附近に在りて諸種の警戒勤務に従事し九月十一日顧家宅附近の戦闘に於ては聯隊豫備隊となり陳家宅東方學校附近に在りて手馬の掩護及第一線との連絡に任じ敵火を冒して勇敢に行動し克く其任務を遂行した。爾後所屬部隊は王家宅に手馬を残置し大平橋附近に向ひ前進したが氏は其際第四小隊第一分隊内に在りて各線の戦闘に参加し常に率先勇敢に行動し熾烈な敵火の下にも沈着豪膽正確なる射撃を以て敵を壓倒し以て所屬中隊の戦闘に寄與せる所甚大であつた。

十月二十七日堅壘大場鎮の陥落するや所屬隊は機を失せず當面の敵を驅逐して蘇州河方面に進出し敵の退路を遮断すべき目的を以て午後一時揚家橋を出發し途中輕敵を一蹴しつゝ南進し午後二時頃陳巷街附近に達せる時忽ち前方及側方より敵の猛射を浴び中隊は斷乎之を攻撃するに決し氏は小隊の右翼分隊に屬し本道以東の地區を勇猛果敢に前進し敵前二百米に進出した。敵は蔡家橋附近を東方に流るゝ無名クリークの南岸の既設陣地に據り其警戒陣地をクリーク北岸に設けて頑強に抵抗した。今や敵は必死と猛射を浴びせ來たり中隊の前進は極めて困難となつた。此時所屬分隊は本道以西の地區に移動し此方面より難局を打開するに努めた。分隊長は小隊長との連絡の爲氏に連

絡を命したが當時戦死傷者續出し極めて危険なる情況であつたに拘はらず氏は敢然として此任務を遂行して分隊に復歸し爾後分隊内に在りて敵弾の間斷を利用しつゝ匍匐肉迫して午後四時三十分頃敵前三十米のクリークの線まで進出し前面の掩蓋機關銃を撲滅せんと氏は勇敢にも上半身を乗り出して射撃を初めた。敵亦銃口火を吐いての猛射を浴びせ來り氏の隣兵臼井一等兵が右頭部に貫通銃創を受け倒れしを氏は之に手當せんと二三歩寄りそう其一剎那氏も亦頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏は近親知己に對する情誼は世人の鑑と推賞され又現役間の服務成績も極めて優秀にして一般兵の模範とされて居た。今次聖戦に参加するや騎兵隊本來の性能を十分に發揚し得ざりし上海戦場に起ち晝夜間斷なき敵火に曝されつゝ或は手馬の掩護に任じ或は敵前至近の距離に決死の連絡勤務を全うし或は匍匐敵陣地に肉迫して頑敵を射殺する等艱軟遅々たる戦況下にも尙慧眼克く敵情を明察し熱心克く幾多の辛酸を克服し豪膽機敏克く敵火の間斷を利用して戦機に投合せる行動に依り所屬中隊戦勝の爲崇高なる犠牲的精神を發揚して玉碎するに至つた。斯かる忠誠勇武の士を褒へるは痛惜禁じ得ずと雖も氏の赫々たる功績は皇軍戦史を飾りて芳名を不朽に傳ふべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に實家養家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日騎兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 谷原彪夫

沈勇輕敏なる輕機關銃手姚官屯の血戦に奮闘して玉碎す

氏は兵庫縣城崎郡香住村の人にして父を敬市亡母をげんと云ひ大正四年十一月三日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く責任觀念に富み不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和四年三月香住小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて父を扶けて家業に従事し傍ら香住町青年學校へ通學し昭和十一年一月其の課程を修了の上現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營した。入營以來熱心軍務に精勵して良成績を挙げ同年四月上等兵候補者を命ぜられ十二月上等兵に進級し翌十二年三月には伍長勤務上等兵を命ぜられた。其間兵精勤章輕機關銃第二種徽章並に第一種劍術徽章を授けられ同年七月歸休除隊時には歩兵科下士官適任證書及善行證書を附與せられた。

支那事變起るや直に應召長野部隊篠原中隊に編入せられ輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は泥濘酷暑を冒して津浦線に沿ひ南進し良王莊畢庄子徐庄子等靜海附近の諸陣地を撃破し九月十日前後には馬廠堅壘の左翼據點たりし小王莊流河鎮の要點を突破して赫々たる武動を奏し九月下旬には津浦線上敵が最後の抵抗線と恃める滄縣附近の數線陣地を攻撃するに至つた。

所屬中隊は敵主陣地の一鎖鑰たる姚官屯を攻撃する目的を以て先づ第一線陣地に相當する人合庄の堅壘攻撃に参加した。敵の陣地帯は二年有餘の歲月を費し極めて堅固なる陣地を構成し之に各種銃砲火器を配して難攻不落と稱せられて居た。二十一日午後六時より愈々攻撃を開始したが陣地前には幅四米深さ二米の一大水濠横はり其後方には鐵條網を設け附近の地形は平坦開闊にして射界を清掃され極めて困難なる攻撃であつた。敵は我が第一線部隊の近接を發見するや果然熾

烈なる火力を以て我が軍目がけて十字火を浴びせ來り剩へ水濠の半渡に乗じて屢々逆襲して來た。氏は所屬第三小隊長の指揮下に火線分隊内に在りて沈着克く戰機に投合して輕機關銃の威力を最高度に發揚し適切有效に頑敵を火制して小隊の攻撃前進を容易ならしめ次で水濠鐵條網を突破し突撃に方りては分隊長と共に率先敵陣地に突入し神速果敢徹宵部落内の掃蕩に奮戦し遂に之を奪取して翌二十二日午前九時部落南端を確保するを得た。



所屬部隊は引續き姚官屯の堅壘奪取の爲諸偵察を續行し二十四日午前四時を期し夜襲を決行した。此時敵のトーチカは銃口火を吐き銃身も熔けん許りの猛射を浴びせ來り其射弾は折柄青白く照り渡る月光を浴びつゝ死の突撃隊の前後左右に砂煙をあげて落達し敵壘に近づくに従ひ無數の榴彈彈幕の物凄さ凄慘悲壯筆舌に盡すべくもなかつた。氏は斯る状況下にも泰然自若として所命目標に有效穿貫的の威力を發揚して活躍中の敵機關銃を制壓して突撃の動機を作為し遂に分隊長と共に敵陣地に突入し敵を突き伏せ殲ぎ倒し鬼神も三舍を避くべき勇猛果敢なる早わざを以て陣地の一角を占領せんとす

る一刹那身に數彈を受け特に顔面の手榴彈創は致命傷となり「天皇陛下萬歲」と叫びつゝ壯烈なる戦死を遂げた。而して所屬中隊は氏等の勇戦奮闘に依り其後間もなく姚官屯の堅壘を占領するに至つた。

氏や志操堅確頭腦明晰にして武技亦卓越し上下一般の愛敬と信頼を受けて居た。今次聖戦に参加するや一死報國の決意を以て各戦に驍名を馳せ泥濘飢渴其他幾多の辛酸を克服し常に分隊の中堅となり克く分隊長を輔佐し又戦友を激勵して戦

勝の途を開拓した。殊に姚官屯の血戦に於ては其壯烈忠誠眞に鬼神を哭かしむるものありて天晴れ不朽の功績を樹つるに至つた。あゝ今や其壯容に接すべくもなく痛歎哀悼の情を禁じ得ずと雖も其累次の勲績は赫々として皇軍戦史に光彩を放ち其名は千古に轟はれ不滅の忠魂は護國の神となり神靈尙も皇國及遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勲章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 高野 伸 男

兩大腿部に重傷を負ふも尙任務に邁進し馬頭鎮の華と散る

氏は長野縣更級郡信田村の人にして父を政幸母をたけよと云ひ大正三年十月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性誠實温順にして責任觀念に富み犠牲的精神亦強烈であつた。昭和八年七月更級郡信田村地籍工事場に於て人命を救助したる爲長野縣知事より金一封と共に賞状を附與せられた事もあつた。昭和四年三月信田小學校高等科を卒業し引續き牧郷公民學校へ入學し翌五年三月同校を卒業其後は家庭に在りて農業に精勵し孝養を盡して居た。昭和九年十二月現役兵として濱江省梨樹鎮獨立守備歩兵隊へ入營し初年兵教育を受けつゝ討伐及警備に従事した。爾來警門、紅石磊、董家駝子、船廠窩舖、千家窩棚等各地の戰鬪及警備に任じ十一年三月歩兵上等兵に進級し翌十二年三月滿期除隊となつたが滿洲派遣中の功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり尙在營間の諸成績優秀にして兵精勳章第二種小銃射擊徽章同特別徽章及善行證書歩兵科下士官適任證書を附與せられた。

支那事變起るや同十二年八月應召遼山部隊に屬し關中隊の小銃分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて九月十四日には

永定河畔に敵を撃破して直に追撃に移り十六日琉璃河畔馬頭鎮附近の敵陣地を攻撃するや氏は右第一線小隊に屬し猛烈なる敵機關銃火を冒して機敏に狼家庄の敵陣地に突入し敗退する敵に對し甚大なる損害を與へ以て戰勝の基礎を確立した。次で九月二十一日來の黃村戰鬪に於ては常に小隊長を輔佐し率先陣頭に立ちて沈着剛膽逐次に火點を奪取して所屬中隊の任務遂行に大なる貢獻を與へ更に所屬中隊が尖兵中隊となり敵を富昌屯に向ひ追撃するや氏は退却中の敵機關銃隊を發見



し之に猛射を浴びせて多大の損害を與へ尙止まりて我が前進を阻止せんとする敵に對しては猛烈果敢に之を攻撃して其抵抗を破砕し所屬部隊の行動を容易ならしめた。斯くて九月下旬には保定附近の殘敵を剿滅し更に部隊集結間爾後の進出の爲斥候長となり道路偵察及至嚴なる警戒に服務する等殆んど連日連夜積極的に活躍し特に九月二十九日以來十月七日にかけ滹沱河畔の渡河準備に際しては斥候長として敵情地形の偵察を命ぜられ決死的の行動を以て貴重なる情報を提供し所屬部隊の戰鬪計畫に至大なる便益を與へた。

滹沱河の戰鬪に勝利を得たる所屬部隊は更に列車追撃に依り南下したが鐵道爆破箇所を遭遇せば直に下車徒歩追撃に移り以て追撃の歩を休む事なく前進し十七日午後六時頃馬頭鎮北方に達するや敵は河川兩岸を堅固に占領して我が前進を阻止した。而かも此河には長さ約五十米の鐵橋があつたが敵は我が軍の急追撃を知るや我が急追を阻止せん爲之を爆破せんとした。氏の所屬小隊は當時中隊の豫備隊とし控置せられて居たが氏は其際右側背の警戒を命ぜられ服務中更に斥候長を命ぜらるゝや勇躍敵の狙撃火を冒し北岸地區の輕敵を驅逐しつゝ河

岸に近迫して以上の諸徴候を知りて速かに之を報告し更に小隊爾後に於ける突撃を容易ならしむる爲部下一名と共に敵の彈雨を浴び乍ら徒渉場を偵察中突如敵の斥候と會した。氏は素早く其二名を刺殺して偵察の目的を達したが此時氏は右大腿部に貫通銃創を左大腿部に盲貫銃創を受け打倒れた。されど氣丈の氏は之に屈する事なく再び起たんとするを戰友及衛生兵等駆けつけ後方に收容し軍醫の手厚き手當を受けたが出血多量の爲施す術もなく氏は是れ迄と思ひしか「天皇陛下萬歳」をかすかにも奉唱し送客として戰場の華と散つた。所屬中隊の將兵は悲憤の涙を拂ひつゝ一擧頑敵を屠り鐵橋破壊の企圖を水泡に歸せしめ爾後軍の行動に重大なる利益を與ふるに至つた。

氏や濯良にして剛健の人義に滿洲事變に赫々たる武功を奏し今次聖戰に参加するや既得の體験に基き克く部下を指導し常に積極的に活躍して所屬小隊長を輔佐し又獨立勤務に服するや慧眼俊敏能く敵情地形を判斷し剛膽機敏戰機に投合して偉功を奏し以て所屬中隊をして赫々たる武功を奏せしめた。而かも兩大腿部に重傷を負ひ尙任務に邁進せんとする氣魄に至りては眞に軍人の魁鑑たるものにして壯烈鬼神を哭かしむるものがある。斯る忠勇義烈の士を褒へるは痛惜禁じ難しと雖も氏が累次の功績たるや天晴れ皇軍戰史に光彩を放ちて芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 田口伊太郎

難局に屢々傳令の重任を果して遂に姚官屯に散華す

氏は兵庫縣美方郡熊次村葛畑の人にして父を石藏亡母をしなと云ひ明治四十年四月二十六日を以て生れ妻よしのとの間に一女つる子を擧げた。大正九年三月葛畑尋常小學校を卒業し爾後家庭に在つて母なき後の父を輔け農業に従事して居たが長ずるに及んで毎年冬季には酒造に出稼ぎするのを常とし以て家計を助けて居た。資性濃厚にして寡言實行力に富み責任觀念旺盛の人であつた。氏は亦孝心深く又人に親切にして自然村内の信頼を受け後推されて青年團支部長となり奉仕的努力の功績大なるものがあつた。

昭和三年一月徴兵として歩兵第四十聯隊に入營し熱心勉勵喇叭手を命ぞられ成績良好にして同年十二月上等兵に進み伍長勤務を命ぜられ大隊喇叭長となり翌四年七月善行證書を附與せられ歸休除隊となり除隊後は益々農業に勉め冬季は依然酒造に従事して居た。

支那事變勃發するや昭和十二年八月應召し長野部隊隊原中隊に編入せられ中隊指揮班員として勇躍征途に就いた。斯くて北支に上陸するや該地方は當時稀なる豪雨に至る所出水泥海と化し道路は泥濘膝を没し軍の行動困難なる事言語に絶する状況であつたが將兵一同之等困苦缺乏を克服しつゝ難行軍を續け所屬隊は早くも九月十日には流河鎮を占據し十一日には馬廠を攻略した。此の間氏は敵彈雨下する泥海の如き地形に指揮班傳令として勇敢機敏に活躍し中隊長の指揮を容易ならしめた。

馬廠攻略後所屬隊は敵を南力に急追し二十一日午後六時より堅壘を誇る滄縣陣地を攻撃した。此の時所屬大隊は長野部隊の第一線部隊となり展開し午後十時無名部落東南側獨立家屋の敵を驅逐し續いて人合庄の第一線陣地に夜襲を敢行し



た。人合庄陣地は陣地前に巾四米深さ二米の外壕横はり其の後方に鐵條網を繞らし我が攻撃地區は泥濘の高梁畑にして敵は我が前進に伴ひ篠つく雨の如く猛射し其の攻撃前進は容易ならざるのみならず夜間の爲部隊は動々もすれば相互連絡を失する状況であつた。氏は此の困難なる地形に敵火を冒して東奔西走中隊内各小隊並隣接部隊間の連絡に努め適時中隊長の意圖を傳へて其の指揮を容易にし愈々突撃に際しては中隊長に従ひ勇敢に突入し遂に二十二日拂曉敵陣地を奪取するに至つた。敵陣奪取後に於ける部隊の掌握は頗る困難とする所であるが氏は此際大に活躍して中隊長の部下掌握に大なる貢獻を爲した。

長野部隊は續いて二十三日夕刻より敵の第二線陣地たる東花園及姚官屯に向つて攻撃を開始し氏の大隊は姚官屯の敵陣地を攻撃することになつた。之等敵の第二線陣地は所謂本陣地にして其の堅固なる事は人合庄陣地に優て居た。氏の中隊は二十三日午後六時より行動を起し高梁畑を穩密に潜行して一步々敵に近接したが月明の爲敵は我が前進を知ると共に迫撃砲機關銃等を以て猛烈に射弾を浴びせて來た。然かし我が方は之等猛火を冒して一意敵に肉薄し遂に水濠の線に達して敵障害物を破壊し突撃を準備した。當時月明なりしと雖諸隊の連絡は頗る困難にして各隊長の部下掌握指揮の困難は想像も及ばざるものであつたが氏は指揮班長の指示意圖を體し敵火の中を馳驅して命令意圖の傳達連絡に活躍した。而して所屬隊は月の没するを待ち二十四日午前四時決然突撃を實施し其の一角を占領し更に戦果を擴張すべく再び突撃を敢行した。此の時氏は中隊長に従ひ猛然立つて前進せんとした其の利那無念腹部及胸部に手榴彈創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏は幼にして母を喪ひ母なき後の父を扶けて孝養を盡し毎年冬期には酒造に出稼ぎ以て家計を補ひ村民の信頼を博し遂に青年團支部長に推され微兵として入營するや僅かに尋常小學校の教育を受けたのみなるに熱心勉勵伍長勤務上等兵に

迄進み今次聖戦に従ふや忠實勇敢あらゆる困難辛酸を克服し危険を冒して一意自己任務の完遂に努む正に是れ良民良兵の範たるべき者である。斯かる有爲の士を滄海攻撃の一戦に喪へるは洵に痛惜限りなき次第である。然かし氏が萬難を排し人合庄及姚官屯の攻撃に方り極て困難なる傳令連絡の任を完うし中隊長の指揮掌握を容易ならしめた事は之等戦勝の礎石にして其赫々たる武勳は皇軍戦史に輝き芳名は千古に謳はれ其英靈は不滅に生きて護國の神となり尙も皇國を守護し其の父其の妻子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 田中茂夫

沈着勇敢の擲彈筒手屢々偉勳を樹て遂に中趙扶に玉碎す

氏は鳥取縣能美郡安田村の人にして父を茂一郎母をセツと云ひ大正三年十一月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性極めて温順義務心厚く業務に熱心着實にして上下の信望厚かつた。昭和二年三月安田小學校尋常科を卒業し引續き縣立安來實業學校農學部に入り同五年三月同校を卒業し昭和十年一月微兵として松江歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優良にして同年六月選拔せられて歩兵學校教導聯隊に分遣翌十年六月原隊に復歸し七月善行證書を附與せられて歸休除隊した。其後は家業に従事しつゝ傍ら青年學校指導員に推され居村の青年教育に盡瘁し又青年團副長として團の向上發展に貢獻せる所尠くなかつた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召福榮部隊第七中隊に編入第一小隊擲彈筒射手として同月二十七日勇躍征途に就い

た。北支戦線到着後八月二十九日所屬隊が二堡の敵を攻撃するや氏は第一線小隊内にありて小隊の迂回行動を妨害する敵自動火器を制壓して小隊の迂回を容易ならしめ引續き孫家堡の攻撃に際しては同様第一線小隊内にありて奮闘し特に同部落奪取後氏は機敏に村端に進出して河岸に陣地を占領せる敵の機關銃に對し有効適切に擲彈筒の威力を發揮して小隊の攻撃を容易ならしめ翌三十日夜中隊が王口嶺の敵陣地一角を占領して夜を徹するや四周近く敵と相對峙する中に徹宵警戒に



任じ翌三十一日の攻撃に際しては敵の側面に向ひ有効なる射撃を浴びせて小隊の攻撃を有利ならしめ更に九月五日夜西子牙嶺に於て約三百の敵兵夜襲し来るや速かに豫定の配備に就きて機を失せず鎗集せる敵中に擲彈筒の射撃を集中し多大の損害を與ふると共に敵を震駭せしめ遂に其の逆襲の企圖を挫折せしむるに至つた。

九月十五日所屬部隊は南趙扶附近の敵を攻撃した。此の時所屬中隊は其日午前二時三十分より行動を起し中趙扶に向ひ拂曉攻撃を爲すべく攻撃準備の位置に就き午前六時より中趙扶西南角に對し攻撃前進を開始した。當時所屬小隊は中隊の豫備隊として第一線小隊の右翼後を前進した。然るに此附近一帯は泥濘の粟畑にして前進容易ならざるのみならず平坦開闢するべき地物は一物もなくしかも敵は銃眼及塹壕より篠つく雨の如く射撃し來つた。かくの如き状況下に小隊は一進一止しつゝ敵前二百米附近に達するや第一線部隊は勿論配屬機關銃も最高度の射撃を以て敵陣地を制壓せしも尙堤防上の敵機關銃は猛威を逞ふし我第一線の突撃發起を困難ならしめ居りしを以て小隊長は豫備隊の擲彈筒は全部出でて其の敵機關銃を射撃し第一線の突撃を

援助すべく命じた。此の命を受けた氏は勇躍して任に就き速かに適切なる射撃位置を選定して猛火の下沈着冷靜なる射撃により有効なる射撃を以て所命の目標を射撃した。然るに暫らくして無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。併かし中隊は斯くして突撃を敢行し中趙扶を奪取するに至つた。

氏の郷に在るや一村青年の中堅となり其戦陣に立つや選ばれて擲彈筒射手となり彈雨の下沈着勇敢に擲彈筒の威力を發揮し毎戦所命の任務を果して遺憾なかつた。實にかくの如きは擲彈筒手たる重任の存する所一身を君國に捧げて斃るゝまで其任務に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏は聖戦中途惜くも子牙河々畔の華と散りしも毎戦奮闘遂に玉碎して以て樹てたる抜群の武功は萬世不朽赫々として皇軍戦史に輝き其不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 田中俊司

忠孝一如良兵良民の模範擲彈筒手として奮戦大名城外に散る

氏は栃木縣下都賀郡生井村の人にして父を庄平母をトクと云ひ大正四年一月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性温良從順孝心極めて篤く家業に頗る精勵であつた。殊に昭和十年夏父病床に就くや日夜専心看護に努め家事一切を擔當せる如き又入隊後も給料を醫藥の一助にと送金し其外泊休暇に際しては銃執る手に鉄を執り席の暖まるを知らざる精勵孝養振りには世人等しく感激情く能はざる所であつた。氏の家庭は元來資産中流以上なりしも不幸にして氏幼少の頃より次第に傾

き爲に氏は昭和二年六月網戸小學校尋常科を卒業し上級學校に進むを許さず止むなく網戸農業補習學校前期一年に入學し同九年三月後期三年を同十年三月研究科を卒業し其の間青年訓練所に通ひ全課程も修了し其後は専念農業に従事してゐた。昭和十一年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營翌十二年六月上等兵に進級し七月歸隊除隊したが在隊間勳章を受くる事三回稀れに見る誠實の人たりしは勿論武技亦極めて優秀にして其射撃に於ては聯隊長より賞状を受けし外第二種小銃射撃勳章を亦銃劍術に於ては大隊長及聯隊長より各々賞状を受けし外第一種劍術勳章を附與せられた。



支那事變起るや昭和十二年八月召集を令せられ其出發に際し父母に厚く多年育英の恩を謝し今や陛下の赤子として身命を捧ぐる旨を述べて一死報國の決意を披瀝し勇躍して應召し坂西部隊に編入せられ擲彈筒手として同月十八日北支に向ひ征途に就いた。斯くて九月中旬には永定河及拒馬河の渡河戰闘に九月下旬には東蓋山附近の追擊戰闘及大冊河の渡河戰闘に十月中旬には元氏附近瀕龍河の戰闘に何れも参加し毎戰分隊長の指揮下に勇戰奮闘擲彈筒の威力を遺憾なく發揮して中隊の任務達成を容易ならしめた。次いで十一月九日大隊は午前十時舊魏縣東南方約一里の地點より柏庄部落に向ひ攻撃前進した。所屬中隊は當時豫備隊として右翼後を續行せしが午後三時迄に柏庄前線に進出し更に魏縣城外敵主陣地に對せるも午後四時大隊命令により所屬小隊は張庄より大寨に進出し此戰闘に協力中の野戰重砲兵隊の掩護に任すべき旨命ぜられた。氏は所屬小隊と共に敵火熾烈を極むる中を勇躍重砲兵隊の最右翼前に至り敵が迂回して我重砲兵

隊の側方に攻撃し來るべき行動に備へた。果して薄暮の頃より敵は小寨謝町大小社町の附近に進出して我重砲陣地を脅かすこと屢々なりしが小隊は徹宵三百米の廣正面に展開して敵の猛攻撃に反撃を加へ其都度之を擊退した。氏は此間克く警戒の任を完ふし又夜間にも拘はらず困難なる擲彈筒射撃の觀測に任じ小隊の戰闘を有利ならしめ以て重砲掩護の任務達成に貢献せる所甚大であつた。

十一月十一日大名城攻撃に際し午後一時頃中隊は大隊の第一線となり大名の敵陣地右翼を包圍すべき任務を受け大名東北方六百米の社家橋に進出した。然るに敵は大名城壁及城壁下より一齊に砲彈銃火の猛射を浴せ來りしが之を冒して更に北舖に進出し包圍の態勢を整へた。然かし城壁外無名部落に蟠居せる敵重火器は頑強に抵抗し其爲に中隊は一舉に城壁下に近迫することを許さなかつた。而して中隊當面の成營部落は敵第一線最右翼の陣地なりしを以て敵は特に堅固に設備し鐵條網を繞らし加ふるに飛行場に續きたる一面の平坦地なりしを以て據るべき地物はなく爲に中隊の前進は頗る困難であつた。然るに氏は第一線小隊内にありて猛火の下其間斷を利用して勇敢に一進一止して敵に近迫し其射撃により鐵條網を破壊し小隊の突撃路を開設せるに成營部落内三軒家の屋上に陣地を占領せる敵機關銃三挺は我に猛射を浴びせ最後の前進一層困難となるに至つた。此時氏の分隊は擲彈筒を以て該機關銃を撲滅すべく命ぜらるゝや氏は直ちに勇躍して第一三分隊の中央前に突進し前方二百米該三軒家屋上の機關銃三挺に對し剛膽沈着確實なる操作により逐次發射し其の第四第五彈は正しく命中見事完全に之を撲滅することを得た。然し此際午後三時五十分敵彈左側腹部を貫き重傷を負ふて遂に其場に昏倒し後收容せられて手厚き醫療を受けたが其甲斐なく十五日第二野戰病院に於て遂に名譽の戰傷死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや至孝其入營するや誠實熱心稀に見る良成績を挙げ今次戰陣に立てば彈雨の下毎戰勇敢每發必中の射撃に

依り皇軍擲彈筒の威力を發揮し常に中隊戰勝の素因を爲した。實にかくの如きは盡忠至誠の發露にして忠孝一如の示範と共に軍民の鑑とすべきである。氏征戰中途にして華北の華と散りしは惜しみて尙餘りあるも其技群の武功は萬世不朽赫々として皇軍戰史に輝き英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると共に兩親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 竹内英太郎

身體虛弱の通信手飽迄精神氣魄を以て奮闘克く其任を全うして
南京城外の華と散る

氏は岡山市濱中本町の人にして父を久吉母をサヨと云ひ明治三十八年五月五日に生れ妻シツエとの間に一子英夫がある。資性謹嚴親に仕へて至孝業務に忠實にして處事周密且つ犠牲心に富み進んで難局に當るの美風があつた。大正六年三月尋常小學校を卒業し爾後二年間家事の手傳ひを爲し其後大阪電氣商會電工となり入營時に至つた。大正十五年徵兵として岡山歩兵聯隊に入營し熱心精勵學術の成績優秀にして上等兵に進級し特に銃劍術に秀で屢々賞状を受け昭和二年善行證書を附與せられて滿期除隊した。尙在隊間昭和二、三年支那騒亂の際に於ける勤勞に依り陸軍省より賞金を附與せられ除隊後は引續き電工として勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召三枝部隊戰砲第三中隊に編入通信手として同月三十一日勇躍征途に就いた。斯くて

上海戦線に到着するや所屬隊は九月八日より月浦鎮續いて羅店鎮攻撃に参加し氏は連日連夜敵の猛火の中に通信手として勇敢に活躍し殊に九月二十一日周家心攻撃の際には熾なる敵の銃砲弾に我が通信線の切斷せらるゝこと瀕繁なりしが氏は其都度猛火を冒して保線を全うし中隊の射撃指揮に支障なからしめ以て第一線歩兵の攻撃前進を容易ならしめた。其の後十月二十日よりの大場鎮攻撃に際しても堅壁に據る頑敵の猛射を冒して通信網を構成し爾後連日連夜凡ゆる困難危険を克服



して保線に奮闘し大場鎮攻略後は息つく暇もなく敵を追撃し引續き十一月七日に亘る蘇州河附近戰闘にも頻繁なる通信網の撤收に或は構成保線に連日連夜不眠不休の活動を續け中隊をして第一線歩兵との密接なる協力を爲す事を得しめた。斯くてさしも頑強に抵抗せし上海附近の敵は守を捨てて潰走し所屬隊は之を猛追撃し常熟鎮江を経て南京に向つた。而して十二月十三日夕刻南京城は攻略したが所屬隊方面の敵は揚州附近に陣地を占領し尙頑強に抵抗す所屬隊は十二月十四日早朝より此の敵に向ひ砲撃を開始し第一線歩兵の攻撃を援助した。當時氏は迅速に砲列觀測所及第一線歩兵との間に通信網

を構成し午前七時三十分中隊長と共に揚庄北端觀測所に於て中隊長の指揮を輔佐して居た。暫らくして目標變換の爲觀測所を王家庄に推進する事となつたが當時敵の銃砲弾は愈々熾烈となり前進頗る困難であつた。併し戰機は一刻の猶豫を許さざる場合とて中隊長以下決然猛火を冒して前進し氏は勇敢にも先頭に前進したが途中敵の機關銃弾に無念頭部に貫貫銃創を受け其の場に壯烈なる戰死を遂げた。因に所屬隊は飯田支隊及天谷支隊配屬下に二回に亘り時の軍司令官より感狀授

與の榮譽を擔つたが是れ實に氏等の奮戦と尊き犠牲の賜と謂ふべきである。

氏は元來身體餘り強健ではなかつた。而して親孝行の氏が其の父母や妻子に心ひかれて戰場に女々しき振舞あつてはと氏の妻は健氣にも氏の出征後涙ぐまじき激勵の手紙を送つたのであつた。之に對し氏は「しづさんよく謂うてくれました夫でこそ日本帝國軍人の妻です日本のほんとうの女性です妻が我家にあつて妻の自分を盡してくれてこそ我々は御國の爲働き命を捨てる事が出来るのです。成程僕は體が弱い。然ししづさん安心して下さい。僕の心は強く強く何ものにも負けぬ。敵が向つて来ればどんなものでも碎く丈けの心は何時も持つてゐる。體で戦争はして居ない。總て心である。心で戦ひ心で進むが故に弱い僕の體はみらぬ。心で憎き支那兵をたゞつ斬り心で國の爲働いてゐます。故に今の僕の弱い體は何處へ行つたかありません。唯だあるのは強い心だけです。今の僕は樂に樂に働いて居ます。死すべき時に立派に死ぬ事は決して忘れては居ません。春義(妻の弟)と同じ砲兵ですけれども春義に負けぬ丈はやりませぬ故御安心下さい云々」と認め送つてゐる。實に平素頑健ならざる氏は精神力を以て戦ひ抜こう。人には負けぬ。死すべき時には立派に死すと謂ふ決意を持つて居たのである。此の決意を一層強固ならしめたものは氏の愛妻の激勵文である。果せる哉此精神氣魄のほとばしる所あらゆる辛酸困苦も氏を屈するに足らず篠つく敵弾下に沈着勇敢架線に保線に中隊長指揮の唯一の命脈たる通信線を確保し以て中隊をして中支各地の堅壘を粉碎することを得しめたのである。所屬支隊が二回逸も感状を授與されたのも氏等の貢獻大なるものがあつたと謂はねばならぬ。噫々聖戦の中途氏の如き至誠盡忠の士を喪う洵に痛惜哀悼の情禁じ難き次第である。併し氏が披群の武功は萬世不朽赫々として皇軍戦史に輝き芳名は万世に傳へられ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し又一家殊に妻子の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳七等功七級 館野七郎

勇敢なる輕戰車手石家襄に玉碎す

氏は栃木縣下都賀郡國分寺村の人にして亡父を留吉亡母をハツと云ひ大正二年十月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性不言實行業務に忠實向上心旺盛にして兄の青果業を扶け大に實績を擧げた。昭和三年三月國分寺高等小學校を卒業後東京市下谷區根岸英語學校に於て二ヶ年間修業其後兄の家業に従事しつゝ勉學してゐた。昭和九年一月徵兵として名古屋野砲兵聯隊に入營間もなく滿洲に出動同年十二月上等兵に進級し翌十一年七月歸休除隊となり滿洲事變の功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。除隊後は志を立て巡查試験に合格し警視廳巡查を拜命し其勤務に精勵してゐた。

支那事變起るや昭和十二年九月十七日久納部隊に應召し輕戰車獨立第十二中隊に編入同月二十六日勇躍征途に就いた。氏の日誌中(原文の儘)「勇躍進趣難、百十八士誓如金鐵、暴戾極有那邊元兇、皇威趣處四海歸皇威」とあり。北支到着後十月九日より十七日に亘る間氏の所屬隊は〇〇兵團に屬し南和に至る百数十里長驅追擊中氏は中隊長乗用車操縦手として克く難路を克服し故障なく進撃を遂行せしめた。第一線江北掃蕩作戰に於ては段列と行動を共にし十一月十日大平店附近の戦闘に際し敵彈雨飛の間車輛の監視を命ぜられ能く其任務を遂行し且部隊の進撃を遺憾なからしめた。

十一日北支慶雲縣城西方約六軒の石家寨附近に敵を追撃せし際は段列の最先頭に立ち前進せしが石家寨東方地區に於て道路切壊部あり此時工兵の一隊追及し來り協力して道路の補修を爲せしが前方千米の地點に於て便衣隊盛んに道路を切壊し居るを目撃したるを以て中隊は敵に其作業の餘裕を與へざらしむる爲に中村曹長は當時中隊本部にありし下士官兵を指揮し現地に急進した午後零時二十分左兩側より猛烈なる射撃を受け且敵は我方の少數なるを知り攻撃し來つた。我亦直

ちに應戰道路の兩側に散開し攻撃を開始した。されど我戰鬪力は當時微弱にして輕機關銃四小銃兵七十名に過ぎず敵は千名の兵力を擁せる爲遂に包圍の態勢をとり攻撃し來つた。氏の屬せる輕機關銃分隊は敵彈雨飛の下輕機を射界良好なる地點に据えぜひ館野に機關銃を撃たして下さいとて第二分隊に入り猛烈なる射撃を加へ有効適切なる射撃を敵に浴びせつゝあつたが偶々輕機關銃に故障を生じ中村曹長之が排除中氏は敵情の搜索に努め其排除終るや氏は自ら搜索せし有利なる目標を射撃せんとし再び輕機をとる一刹那惜いかな敵の一彈飛來氏の心臟部を貫くや 天皇陛下萬歳と唯一語を名殘とし壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。所屬隊は分隊長戦死し中村曹長亦負傷したるも激戰七時間の後午後八時敵を撃退することを得た。

氏の征途に就くや所謂北馬の地に近代機械化部隊の精銳として意氣軒昂凡有困難の克服は素より期する所然かも皇威を四海に光被せざれば斃るゝも已まざるの決意鐵よりも堅かつた。果せる哉突如敵の大軍に圍まるゝや氏の卓越せる射撃技能を發揚して遺憾なく克く大敵を制壓し其前進を阻止し得たのである。偶々不測の故障を生ずるや猛火の下沈着冷靜克く敵情を視察し戰機に投合せる射撃目標を發見し將に之に殲滅的打撃を加へんとし兇彈に斃れしは痛惜措く能はざる所である。然れども氏が參戰以來梅風沐雨愛車を驅つて其快速を發揮し戰線實に百數十里神速果敢に殘敵を掃蕩し堅陣を粉碎して皇軍の威武を中外に宣揚せる功績に至つては正に皇軍戰史に異彩を放つものであり其最後の武勳亦軍人の龜鑑たるものであつた。今や氏が壯容に接する能はずと雖も其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級

鶴藤 豊 二一

勇敢機敏の機關銃手東邊庄攻撃に奮戦して職に殉す

氏は岡山縣小田郡吉田村の人にして亡父を常吉母を春能と云ひ大正元年十二月十二日生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして而かも清白明朗責任觀念の強い人であつた。十三歳にして早くも父に死別したが爾後克く老祖父と母に仕へて只管孝養を盡した。昭和二年吉田小學校高等科を卒業後は若年の身にて一家を双肩に擔ひ専心家業に精勵し近隣の風評も良好であつた。昭和八年現役兵として伏見歩兵聯隊機關銃隊に入隊し翌九年所屬部隊と共に滿洲に派遣せられ各地の匪賊討伐に参加して勳功を樹て勳八等に叙し白色桐葉章並に金百五拾圓を賜はり同十一年一月内地へ歸還し滿期除隊となつた現役中は品行方正軍務に精勵し武技亦優秀にして精勳章及銃劍術優等賞を授與せられ又除隊の際は善行證書を附與せられた。

支那事變起るや間もなく應召赤柴部隊に編入せられ末永大隊の第一機關銃隊に屬し第一小隊第二分隊の二番銃手として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて北支上陸後は連日膝を没する泥濘惡路を踏破し或は灼熱の炎天下に飢餓を克服しつゝ強行軍を続け八月二十一日には氏の所屬部隊は津浦沿線畢庄子附近の敵を攻撃したが氏は此際第一線に在つて克く分隊長及射手を助けて敏活且勇敢に行動し他の銃手を激勵して渾然一體となり機關銃の威力を遺憾なく發揮せしめ銃隊の戰鬪に寄與する處多大であつた。斯くて末永大隊は其の日午後同地附近を占領し翌二十二日直ちに東邊庄の敵を攻撃した。此時氏の所屬第一機關銃隊は第二小隊を大隊の第一線左中隊に第四小隊を右中隊に配屬せられ敵の掃射する丈餘の高梁畑を押し分けつゝ泥濘膝を没する中を敵の第一線陣地に向つて前進したが此行動は頗る困難にして敵陣地に近接するに従ひ

高粱畑を薙き通る敵の銃砲弾は凄惨なるものであつた。殊に此日友軍砲兵の援助なかりし爲第一線大隊の攻撃は容易でなかつたが氏は之にも屈せず沈着勇敢機敏に射手を助けて敵に猛射を浴びせ死傷續出する中に益々士氣を鼓舞激勵して奮戦大に力めた。斯くして正午稍前第一線は機關銃の掩護射撃下に突撃を敢行せしも敵の第一線陣地前に在る水濠の障碍に阻まれ一時頓挫の已むなきに至り其儘遂に夜に入つた。翌二十三日拂曉大隊は諸偵察を了へて攻撃を續行して敵火を制



し機熟するや第一線中隊は敵の猛火を物ともせず遮二無二水壕を涉り猛烈果敢に突撃を敢行した。此際氏は射撃陣地に在つて其身邊に集中する敵弾を物ともせず射手を助けて敵陣地を猛射し殊に其自動火器を制壓して第一線中隊の突入を援助したが其成功を見るや直ちに前進して第一線に追及すべく立ち上つた瞬間無念！頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し第一線中隊は氏等機關銃隊の適切なる援護射撃に依り突撃功を奏して第一線陣地を占領し次いで東邊庄の本陣地をも占領するを得たのであつた。

氏や義には滿洲事變に参加して偉勳を樹てたが今次再び戦線に立つや滿洲事變の尊き経験と矜持とを以て終始沈着剛膽に行動して衆を激勵し凡ゆる艱苦を克服して歴戦者たるの眞價を發揮し克く其任務を遂行して銃隊に大なる貢献を爲した。然かるに聖戰参加僅かに二旬斯から忠勇義烈の士を喪ふ洵に痛惜の情に堪へない。然かし百戦功なくして瓦全するは士の潔しとせざる處蓋し氏の如きは所謂一戰玉碎して其名を殘したるものである。噫！今や再び氏の壯容に接すべくもないが其赫々たる武勳は燦として皇軍戦史に輝き其芳名は千載に謳は

れ英靈は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國及一家の前途に限りなき加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 中嶋 福一

分隊長として匪賊重圍の裡に奮戦職に殉す

氏は和歌山縣西牟婁郡江住村の人にして父を政治母をサヤと云ひ大正三年十二月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして情義に敦く殊に敬老の念が深かつた。昭和三年三月江住小學校高等科を卒業し爾後家庭に在つて父の業を助け昭和十一年一月現役兵として和歌山歩兵聯隊に入隊し爾來熱心軍務に精勵し七月には精勳章を授與せられ十二月上旬兵に進級した。而して翌十二年四月所屬隊と共に滿洲守備の爲渡滿し竹蓮鎮附近の警備に任じ七月には和田小隊分隊長として宜昌屯窟備子溝浩遼河附近匪賊討伐に参加し其後所屬和田小隊は三流道に分遣せられ氏は分隊長として日夜搜索警戒等に任じ克く其の任を全うした。斯くして九月八日より竹蓮鎮西方地區の討伐開始せらるゝや氏は山田小隊第二分隊に屬し九日將軍溝十日克爾氣附近匪賊討伐に参加し連日連夜殆んど不眠不休勞苦を厭はず積極勇敢に活躍し中隊の任務達成に貢献する所大なるものがあつた。

九月下旬窪丹河に架橋の爲中尾小隊は援護の任を以て該地に派遣せられ氏は中尾小隊分隊長として克く分隊を指揮掌握して日夜警戒援護の任に服して居た。然るに此の間匪賊は架橋點より程遠からぬ孫區空窩棚に蟠踞しある情報に接し中尾小隊は同月二十九日龜井部隊長より之が討伐を命ぜられ中尾小隊長以下二十二名は直ちに出發した。午後四時頃孫大李窩

棚南方千米附近に至るや忽ち該部落方向より射撃を受けた。此の敵は約五十名計りなりし爲中尾小隊長は直ちに之を攻撃するに決した。氏は小隊の右分隊長として克く部下を掌握し勇猛果敢に攻撃前進した匪賊は我が正確なる猛射に死傷續出し忽ち高粱畑に影を没し小隊は之を殲滅すべく尙前進した。然るに其前進地區は左右密林の如き一連の高梁畑であつたが小隊が敵前二百米附近に迫るや突如左右の高梁畑より猛射を浴び續いて一度没した正面の敵は再び我に猛射を開始し中尾



准尉以下小隊は全く敵の包圍火の中に陥り之等敵の總兵力は約四百名に達し小隊は遂次死傷者を生じ左隣接の中島分隊長も戦死した。中尾小隊長以下更に勇氣を振ひ興し彈藥の續く限り敵に猛射を加へ敵の死傷算なかりしが氏は益々部下を叱咤激勵し敵の逡巡に乗じ正に突撃せんとする刹那無敵彈頭部に命中し遂に壯烈なる戦死を遂げた。中尾小隊長以下は氏等の奮戦と尊き犠牲に十數倍の敵と對戦之を抑留し日没後中隊主力到着し茲に勇氣百倍我が將兵は猛烈に敵を夜襲し遂に之を潰滅したのであつた。

氏は生來至誠篤實の人にして軍に入りては熱誠不撓の勤勉を続け更に滿洲に派遣せられ警備の重任に服するや凡ゆる辛酸困苦を克服して其の任を全うし選ばれて分隊長の要職を命ぜられ匪賊討伐の爲戦線に立つや沈着勇敢敵の重圍の中に克く部下を掌握指揮して寡兵克く多數の敵を斃し皇軍の威武を宣揚して遺憾なかつた。斯の如きは盡忠一死報國の至誠に燃る士にあらざれば不可能の事である。抑も支那事變勃發後滿洲に於ては之と相鼓應して匪賊怡頭蠢動し加るに滿蘇國境は愈々一觸即發の危機を胎み此の際に於ける滿洲警備の重任と其の勞

苦は決して北支中支の戦線に戦う者に比し何等差違あるものではない。氏や李大窩棚の一戦に散華して今や其の壯容に接すべくもないが氏が滿洲派遣後日夜の警備と累次の討伐殊に李大窩棚の戦闘に樹てたる赫々の武勳は燦として千古に輝き其の名は後世に瀛はれ英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し一家の前途を加護照覽するであらう。氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 中谷正志

黄村の激戦に右腕を失ふも尙奮戦を続け任務を完うせる斥候

氏は長野縣上伊那郡朝日村の人にして父を虎三郎母をセイと云ひ大正四年三月三十一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く諸事熱心着實にして而かも不屈不撓の氣概を有し世人の信用厚かつた。昭和三年三月朝日尋常小學校を卒業し翌四年四月より松本簿記學校に入學し同年九月之を卒業した。昭和八年一月現役志願兵として松本歩兵聯隊へ入隊し滿洲事變に従軍して哈爾濱及呼蘭に駐屯し討匪警備の業務に服し熱心勉勵克く其職務を完うし翌九年五月凱旋功を以て勳八等瑞寶章を賜はり又在營間精勤に付善行證書を授與せられ歩兵上等兵を以て滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遼山部隊に屬し佐藤中隊第一小隊の小銃手として勇躍北支方面への征途に就いた。九月十六日所屬中隊は南伯附近の戦闘に於て聯隊豫備隊として参加し翌十七日大石橋派縣附近の戦闘に於ては尖兵として前進し次いで大石橋附近の敵を攻撃するや氏は所屬小隊第二分隊長の指揮下に猛烈なる敵の彈雨を冒して勇戦奮闘し以て大石橋の占領に貢献し特に夜半數回に亘る敵の逆襲に際しては雷雨を物ともせず奮戦力闘見事に之を撃退した。

九月二十二日所屬大隊は夜十二時を期し大冊河を渡河し彈丸雨飛の中を黄村の陣地を目がけて肉迫した。然れども敵の銃砲は猛烈加ふるに左第一線正面に於ては鐵條網に阻止せられ攻撃進捗せず死傷者續出苦戦に陥つた。此時まで所屬中隊は大隊豫備隊として控置されて居たが右第一線に増加し續いて敵主陣地の攻撃を命ぜられた。氏は中隊の右第一線小隊の第二分隊長を命ぜられ嚴然として部下を掌握し勇躍率先熾烈なる敵火を冒して敵陣地に肉迫し遂に突撃號令一下猛然突入して壯烈なる白兵戦の後陣地の一角を占領した。時正に午前二時三十分であつた。然れども敵は衆を頼みて之が奪回を企て再三逆襲を反覆し遂に我が軍重圍に陥り苦戦を續けて居た。



午前四時頃所屬中隊長は南方敵陣地の偵察と聯隊より直接右方に
出されある第三中隊との連絡の爲椎名曹長を長とする一組の斥候を
派遣した。此時氏は部下四名と共に椎名曹長の指揮下に入り數線に
亘る敵陣地の間隙を南方に潜入する事正に五百米敵情を偵察中敵は
續々兵力を増加し一齊に逆襲の形成にあるを發見し斥候長は機を失
せず之を中隊長に報告したるが此時早くも敵に發覺せられて前後左
右より敵の包圍を受け追退全く窮まるに至つた。然れども氏は沈着豪膽克く斥候長を輔佐し部下を激勵して占領せる陣地
の一角に據て應戰中敵輕機關銃の爲右腕關節部に貫通銃創を受けドツと打ち倒れた。氏は一聲幽かなる唸めきを發したが
再びがばと立ち上り左手に銃を持ち替へ部下を勵まし必死の奮闘を續けた。此有様を認めし曹長は「中谷やられたのか何
處か」と尋ねれば氏は力強き聲にて「曹長殿！ 右腕がブラブラになりました之では戦ふにどうも不自由です」此問答に

部下一同は氏の勇敢決死の行動に勵まされ此處を先途と死闘中左翼に在りて奮戦中の上等兵亦大腿部を射貫かれて倒れ敵の逆襲は愈々急迫を告げた。されど死を決せる氏は身の苦痛をも打ち忘れ部下の志氣を落すまじと齒を喰ひしぱりつゝ叱咤激勵奮戦し遂に二方の血路を開いて第三中隊に連絡を取り其任務を全うした。其後氏は野戰病院に收容せられ手厚き看護治療を受けたが惜しいかな破傷風の爲九月二十九日華北戦線の華と散つた。所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り敵情を明かにするを得事前の處置を整へ且力戦奮闘の後赫々たる戦勝を獲得するに至つた。

氏や義には滿洲事變に参加して赫々たる武功を奏し濃厚篤實にして功を誇らず忠實業に服し地方青年及在郷軍人の模範として諸人の愛敬を受けて居た。今次聖戦に参加するや平漢線の軍と譟はれし遠山部隊に屬して大石橋の堅壘を一蹴し以て其一番乗の驍名を轟かせ飢渴泥濘幾辛を克服して戦友を激勵し更に保定争奪戦の鍵を握りし黄村附近の激戦には萬死を賭して重任に就き壯烈悲愴鬼神を哭かしむるの奮闘に依り所屬大隊戦勝の爲重大なる素因を與へた。あゝ忠烈義膽眞に軍人の鑑たるものであつた。今や其壯容に接し得ざるは痛惜極まりなしと雖も氏が累次の功績は天晴れ皇軍戦史に光彩を放ち芳名永く後世に誦はるべく又其忠魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 成田 徳治

忠烈傳令の重任を全うし通州の華と散る

氏は北海道後郡泊村の人にして父を徳松母をきそと云ひ大正四年二月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性快活純眞にして孝心深く業務に當るや極めて熱心且不屈不撓遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。昭和六年三月國後郡古釜布小學校高等科を卒業し其後は家業を手傳ひつゝ青年訓練所に通學し入營時迄に其の課程を修了したが在學中優秀なる成績を挙げ又登校退出に際しては假令當番日にあらざる日と雖も進んで室内の掃除を手傳ひ又火氣に注意する等克く獻身公共的精神を發揮し査閲官より表彰を受け教師學友よりも深き信頼を受けて居た。昭和十年十二月現役兵として旭川歩兵聯隊に入營したが翌十一年四月支那駐屯歩兵聯隊に編入替となり北支に到着し警備の重任に就いて居た。

昭和十二年七月七日蘆溝橋事件勃發するや事變警備下令と共に氏は品部部隊に屬し永松中隊の第二小隊長の傳令として選拔せられ駐屯地たりし遼縣を出發し部隊主力に合し更に七月十四日天津出發酷烈なる炎天下の難行軍を續け十八日通州に到着した。斯くて所屬部隊は風雲險惡なる情況下に日夜緊張の警備に就いて居たが愈々二十七日通州南門外に在る第二十九軍の軍隊に對し攻撃に決するや所屬中隊は大隊の第一線となり東兵營の攻撃を開始した。東兵營は周圍約七百米の廟にして其周圍は高さ約五米の圍壁に圍まれ其内部に於ても圍壁に依つて區劃されてあつた。支那軍隊は此圍壁に上中下の三段に銃眼を設け其突角には各方向に掃射を行ひ得る機關銃を配置し圍壁の内側には一帯に掩蓋散兵壕を設け其掩蓋は空爆砲撃を避け得る如く堅固なるものであつた。又圍壁の外周には幅約七米深二米の外壕を設け其外周は一面に高粱畑にて地上の展望を許さなかつた。所屬小隊は中隊の左第一線となり敵前百五十米の三軒家西端の線に進出し攻撃準備を整へ

た。氏の小隊長内田中尉は突撃準備の爲細部の敵情を確むる爲氏を隨へ高粱畑を縫ひつゝ敵前約二十五米に近接し敵陣地の突角に輕機關銃の有る事を發見したるを以て擲彈筒を以て先づ之を撲滅せんと欲し氏をして此命令を傳達せしめた。間もなく我擲彈筒は一齊に火蓋を切つて此機關銃を沈黙せしめた。此時戰場俄かに活氣を呈し彼我の銃砲聲は耳を聳せん許り驟雨の如き敵弾に附近の高梁は裂帛の響をあげて倒れ行く中を物ともせず小隊長の許に歸來復命した。



此頃我が大隊砲は所屬中隊の正面に二個の突撃路開設を完了するや時到来りと第一線部隊は一齊に前進所屬小隊も中隊に配屬せられたる重機關銃小隊の支援射撃に送られて一意猛進し氏は影の形に隨ふ如く小隊長の身邊を放れず小隊の先頭を切つて躍進し今や敵前至近の距離に達せし時無念一彈飛來頭部貫通の致命傷を受けどつと地上に倒れた。小隊長内田中尉は大聲「成田々々」と叫び呼んだが最早や答ふる力もなく戦のく手で僅かに銃を舉げて之に應へた。時正に午前八時五十分であつた。小隊長は悲憤の涙を拂ひつゝ氏の尊き遺骸に取すがり「仇はとつてやるぞ」と叫び終るや轟く突撃號令へした。

一下飛鳥の如く疾驅したが哀れや小隊長も間もなく胸部に敵弾を受けて其場に打斃れた。其後小隊は高屋准尉之を指揮し左突撃路より突入し頑敵を粉碎し敗走する敵を追ひ徹底的に兵營の掃蕩を完了し午前十時二十分城頭高く日章旗をひるがへした。

るゝこと三回に及び上下の信頼特に厚かつた。今次聖戦に参加するや選ばれて小隊長傳令となり酷熱百二十度の炎天にも疲勞の色さへ見せず小隊長の傳令勤務を全うし劍電彈雨の中亦滅私報國の一念に横溢し克く其職分に邁進し遂に玉碎するに至つた。あゝ斯かる忠誠勇武にし前途有爲の士を事變勃發幾何もなくして喪へるは真に痛惜の情禁じ難しと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳七等功七級 村川 清

優秀豪膽なる觀測手上海戦線に奮闘して戦勝の途を拓く

氏は愛知縣南設樂郡新庄町の人にして父を嘉吉母をてふと云ひ明治四十一年十一月二十五日に生れ妻文子との間に長男清志を擧げた。性素朴眞摯にして特に孝心深く人と交はりて情誼に敦く又事に當るや熱誠着實遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。大正十一年三月郷里の高等小學校を卒業し間もなく上京深川區佐賀町菅沼商店へ入店し忠實に勤務して居たが大震災に遇ひて歸郷し其後は自宅に於て金物商に従事し孝養怠りなかつた。昭和四年一月現役兵として三島野戦重砲兵聯隊へ入營し熱心軍務に勉勵し諸成績拔群にして伍長勤務上等兵を命ぜられ翌五年十一月輝かしき成績を以て歸休除隊となつた。昭和七年二月上海事變の爲應召し吳淞附近の激戦に参加して勳功を樹て同年六月凱旋功を以て勳八等に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年九月應召淺田部隊に屬し中村中隊の一番觀測手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月下旬上海戦線に到着し十月早々より大場鎮附近の戦闘に参加した。所屬中隊は同月二日殷行鎮の陣地より江灣鼓馬場附近の敵陣地を砲撃して偉功を奏したるを初めとし楊木橋劉家宅と壘壘を逐次に粉碎して第一線歩兵部隊の攻撃に協力して赫々たる武勳を奏し次で名にしおう大場鎮北側陣地たる馬橋宅李碩宅附近の堅陣に對し陣地要點の破壊射撃に任じたが

正確有效なる射撃は見る見る濛々たる爆煙の中に陣地に據る敵の人員材料を飛散せしめ敵の心膽を奪ひ友軍の志氣を鼓舞し遂に大場鎮陥落の一素因をなすに至つた。其間氏は敵彈雨飛の中に泰然自若として觀測掛下士官を輔佐し晝夜に亘る射撃諸元の決定に任じ又前進觀測所要員として決死敵前近く戦機に適合せる觀測所を占領し冷靜機敏微細なる徴候をも見遁す事なく正確に敵情を捕捉し又射撃觀測に任じては的確機敏に之を報告し中隊長の射撃指揮を容易ならしめたる功績は特筆すべきものであつた。

斯くして所屬中隊は友軍砲兵と共に十月二十五日無双の堅壘大場鎮に對し卓越せる破壊威力を發揚し流石頑強なりし敵軍も雪崩を打つて潰走を初めた。皇軍の全線は俄かに活氣を呈し一舉蘇州河の線に之を壓迫殲滅を期しつゝ怒濤の如く猛追撃を初めた。所屬中隊も大隊長平野少佐の指揮下に急追撃に移り眞如鎮を経て一意蘇州河に向ひ前進し敵彈猛烈を極むる蘇州河北岸地區の張家橋翟家屯陸家渡を含む地域内に於て敵前千五百米の李家橋に放列を布置し天候地形共に我に不利なる情況下に氏は敢然として觀測掛下士官を輔佐し精確機敏に射撃



諸元を決定して中隊長の戦闘指揮を容易ならしめ更に決死挺進して敵前三十米に観測小隊長と共に補助観測所を占領して射撃観測を輔佐して居たが折柄打寄する敵の逆襲を物の見事に自衛用機関銃を以て打のめし以て中隊の任務遂行に毫も遺憾なからしめた。

翌三十日所属中隊は巧に遮蔽しある敵機関銃を撲滅すべき任務を受けたが此時氏は敵前六十米の陸家渡前進観測所に於て熾烈なる敵弾を浴びつゝ射撃観測に任じ逐次有効射撃を得將に敵機関銃の撲滅成らんとする午後四時頃敵の迫撃砲弾身邊に落下炸裂し全身に其破片創を受け技に壯烈なる戦死を遂げた。所属部隊は其後氏等の尊き犠牲に依り蘇州河畔の敵軍に多大なる損害を與へ其任務を完遂するを得た。

氏や郷に在りては温良篤實の孝子たり出で、軍務に従ふや成績拔群義には第一次上海戦に従軍して武勳を奏し今次聖戦に参加するや既往歴戦の體驗と優秀明敏なる其頭腦とを以て克く観測掛下士官を輔佐し又観測小隊の中堅となり豪膽機敏射撃諸元の決定に敵情搜索及射撃観測の諸勤務に寝食を忘れ身命を顧みず一意必勝の信念を以て自己の職責に邁進し所属中隊をして赫々たる武勳を奏せしめた。寔に是れ皇軍砲兵の精銳にして一般軍人の翹蓋たるものであつた。今や斯かる有爲忠誠の士を喪へるは轉た痛惜禁ずる能はざるも氏が累次の功績たるや皇軍戦史に光彩を放ち芳名は永く後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 梅田 茂

滿洲事變の勇士再び北支に勇戦遂に澤畔店に玉碎す

氏は群馬縣佐波郡伊勢崎町の人にして父を晋吉母をたまと云ひ明治四十二年九月五日に生れ妻寅代との間に一子悦子を擧げた。資性寡言にして温厚而かも眞面目にして氣概あり特に忠誠の志厚く戦陣に立ちては頗る勇敢であつた。嘗て多數會合の席上談偶々戦争談に及び或人が「決死隊を募るから志願者は出ると言はれたら大抵尻込みするだらう」と云ひたるに一座の人々は殆んど之に賛同の風ありしに氏は「自分にも體驗はあるが全然反對だ吾れ勝ちに進んで出る夫れが日本軍人の特徴だ」と凛然として言ひ放ちたる爲滿座の人々黙して聲なかりしと云ふ逸話もある。大正十三年三月伊勢崎高等小學校を卒業し直に伊勢崎町機業店に業務見習として入店せしも身を立つるに不適と感じ一年にして退店し同十五年九月より高崎市大崎帳簿店に業務見習として入店昭和二年二月十九歳の若年にして獨立印刷業を開業した。然るに氏の熱心と研究の結果は忽ち技術優秀にして他を抜くに至り高崎市の斯界に重きを爲すに至つた。氏は又常に文才の向上と精神修養に努め且親孝行にして前途有爲の模範青年であつた。昭和五年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績良好にして同年十二月上等兵に進級し翌六年七月善行證書を附與せられて歸休除隊した。滿洲上海事變勃發するや昭和七年二月應召三月吳淞に上陸嘉定縣及婁塘の守備に任じ五月北滿に轉進哈爾濱に着し同地附近の警備に任じ五月十九、二十日には三父子及油房附近二十三日より六月一日に亘りては呼蘭綏化四方台興農鎮海倫附近。二日より十二日まで興農鎮四方台維屯附近。十三日より二十日まで海北鎮通化二克山時泉鎮附近。七月三日より七日までは慶城附近。八月九日には四方台附近の各戦闘に参加し奮戦大に努め其功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり昭和七年九月内地に歸還十月

召集を解除せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第二中隊に編入第三小隊第六分隊小銃兵として同月十四日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十三、十四日永定河畔辛庄附近の戦闘に際しては其渡河攻撃に於て又十五、十六日拒馬河畔東茨村附近の戦闘に際しては第一線となり兩戦闘共滿洲事變参加の勇士として常に分隊の中堅となり克く分隊長を補佐し率先勇敢奮戦して以て中隊の任務達成を容易ならしめた。



九月十八日澤畔店攻撃に際しては所屬隊は午前十一時三十分より行動を起し午後零時三十分より攻撃を開始したが氏は選ばれて小隊長傳令となり雨と降り注ぐ敵弾の下を馳驅して小隊長の命令意圖を各分隊長に傳達し其戦闘指揮を容易ならしめつゝ只管小隊長を輔佐しありしが小隊が弾雨の下躍進に躍進を重ねつゝ激戦既に數時間暮色迫るも敵は依然頑強に抵抗して未だ敵陣を抜くことを得ず雖て日は没して月光戦場に冴えんとせる頃大隊は夜襲を以て敵陣地を奪取すべく前進を起こした。而して敵前二百五十米にまで近迫せし頃敵

彈益々熾烈となり死傷者相續いで生ずるに至つた。然し氏は毫も屈することなく戦闘激烈に伴ひ愈々頻繁なる分小隊間の連絡に一層積極的に活躍しありしが其の間無念腹部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。併かし大隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲に依り遂に午後八時三十分流石頑強の敵を驅逐し敵陣地を奪取することを得た。

氏や平素温厚勤勉にして諸人の愛敬を受け一度戦陣に立つや彈雨の下積極果敢死生を顧みず任務に邁進し小隊の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。氏の言を借りて言へば吾れ勝に決死隊を志願するは日本軍人の特徴とする所實に氏の戦場行動は此精神此所信の發露に外ならなかつた。征战幾何もなくして北支の華と散りしは惜みても尙餘ある所なるが其赫々の武勳は千載の下青史に輝き累次の聖戦に参加して興亞の礎石となりたる其芳名は後世永遠に語り傳へらるべく其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し兩親妻女の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金瑪勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 梅岡茂雄

忠誠なる模範兵津浦線警備の華と散る

氏は兵庫縣栗原郡富柄村の人にして父を長治母をこむめと云ひ大正四年三月四日に生れ末だ獨身であつた。性温厚實直にして孝心深く諸事積極的にして勞を厭はず進んで難局に當るの美風を有し人に交はるや親切温和にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和四年三月郷里の小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶け家業に精勵し入營時に及んだ。昭和十一年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し克く軍務に勉勵し前後二回に亘り兵精勳章を附與せられ諸成績亦優良にして上等兵を命ぜられ常時一般兵の模範として上下の厚き信頼を受けて居た。

支那事變起るや間もなく長野部隊に屬し輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。斯くて八月中旬北支に到着し泥濘の惡路を行軍し疲勞甚大なりしにも拘はらず氏は志氣旺盛克く分隊長を輔佐し戰友を勞はり扶けつゝ難行軍を續け同月二十四日より津浦線揚柳青附近の鐵道警備の重任に服務するに至つた。當時天津地方に蟠居せる敵軍は皇軍の疾風迅雷的の掃蕩

に堪えかねて津浦線の咽喉たる揚柳青——靜海の地區に後退し以て永定河南岸の防戦準備に躍起となつて居た。附近の地形は北支數十年來稀なる大雨降り続きし爲殆んど泥海と化し文餘の高梁密生して全く通視を妨げ鐵道線路並に之に沿ふ主幹道路の兩側には揚柳の並木連續し敗殘兵及便衣隊の潛伏には屈強の要衝を成形して居た。氏は揚柳青に到着後疲勞回復の暇もなく斥候及下士哨巡察等日夜繁激なる勤務に従事して居た。九月二日には揚柳青——木廠間の巡察として分隊長大



西伍長以下七名の中に加はり午前零時十分揚柳青を出發し鐵道線路に沿ひ約五百米に亘る線路の犬釘を點檢しつゝ線路外側を前進中であつた。午前一時三十分木廠北方約一吉米の附近に差しかゝるや突如夜暗の靜寂を破つて銃聲響き渡つた。是れ氏等に對する便衣隊の狙撃であつた。氏は冷靜直ちに應戦の爲伏射姿勢を執らんとする一刹那無念！一弾飛來胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。巡察隊は其後勇戦之を驅逐し線路の安全を確保するを得た。

氏や忠實熱誠の人郷黨の模範青年であり又中隊の模範兵であつた。今次聖戦に参加するや幾多の辛酸に堪へ一意君國の爲率先衆の模範となり先づ當時の作戦上極めて緊要なりし津浦鐵道の警備を命ぜられたが不幸便衣隊の兇弾に斃れしは空をも掩はん大鳳が燕雀の爲に惱まされ圖南の鷗翼を中道に挫折せられしにも似て痛惜痛憤の情を禁じ得ずと雖も氏が至誠奉公は聖戦の尊き礎石となり特に氏の警備せる鐵道は其直後に展開されし神速果敢なる作戦に方り重大なる役割を演ずるに至つた。其功績たるや皇軍戦史に牢記せらるべく其芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國の前途

に又一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 内田 信 廣

優秀なる後馬駆者江南戦線に活躍して戦勝の端を拓く

氏は横濱市神奈川區羽澤町の人にして亡父を澤之助母をヤエと云ひ明治三十八年十月三日に生れ妻シマとの間に長男信一を擧げた。性温厚篤實にして孝心深く事に當るや熱誠着實にして遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。大正七年三月郷里の尋常小學を優等の成績を以て卒業し其後は家庭に在りて農業に精勵し又進んで公共事業に盡力する等模範青年として其將來を囑目されて居た。大正十五年一月現役兵として野戦重砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ昭和二年十二月現役一年にして砲兵上等兵を以て歸休除隊となつた。歸郷後は再び家業に従事する傍ら郷里の消防組並に在郷軍人分會班長青年團幹事として大に盡力して優良なる成果を収め神奈川縣消防協會長及青年團本部より夫れ夫れ表彰せられた。

支那事變起るや昭和十二年九月應召淺田部隊に屬し村上中隊の第四分隊後馬駆者として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月下旬上海戰場へ到着十月早々より軍直轄砲兵として吉住部隊の左翼隊たりし秋山部隊の戦闘に協力して劉家行より橋亭宅附近に亘る陣地奪取に参加したが氏は其間小陸宅八房宅其他の新陣地に頻繁なる陣地變換並に追撃に優秀なる戰術を發揮し以て名狀すべからざる泥濘地帯並に起伏甚だしき陣地帯を突破して砲兵陣地の推進に遺憾なからしめた。當

時戰場は晝夜間断なく敵銃砲弾を浴び水濺と云はず畑地と云はず支那兵の腐爛せる屍體充滿して臭氣鼻を衝き馬匹の保育の如きは兎角顧みられざる中に氏は自己の勞苦を顧みず黙々として馬匹の手入飼付水與等涙ぐましき努力を拂ひ眞に衆兵の模範として激賞を受けて居た。

十月二十六日より數日間に亘りては所屬中隊は大隊長瀧波少佐の指揮下に藤田部隊の右直接協同の砲兵群に屬し敵陣地要點の破壊並に所望方面に對する火力増加の任務を與へられ大場鎮附近の末期戦闘並に蘇州河に向つて行へる追撃戦闘に参加した。其間氏は十月二十二日八房宅より西塘橋への陣地變換並に十月三十日錢家宅への陣地變換に於ては泥濘實に車軸を没するの大困難に遭遇したが氏は馬匹の状態に仔細なる注意を拂ひ前中馬駟者を督勵して人馬協力難關を突破して迅速に放列布置を完了し戰機に應ずる運動性を發揮せるは實に氏の旺盛なる精神氣力の賜であつた。而かも前車を誘導し段列位置に到着するや率先掩體構築に従事する等常に積極的に任務を完遂したが十月三十日午後五時三十分敵の小銃彈飛來無念にも腹部貫通の重傷を受け野戰病院に收容せられた。手術の結果は良好であつたが翌三十一日同病院に於て又もや敵の小銃流彈飛來し不幸にも胸部に貫貫銃創を受け竟に江戰線の華と散つた。併かし所屬中隊は氏等の忠勇義烈の奮闘に依り其後蘇州河畔の戦闘に敵に多大の損害を與へ赫々たる戰勝の途を招くに至つた。



氏は幼より思想正純各種の勤勞に服して靜かに人生の正道を歩み家庭生活に將た社會生活に尊き使命を果して來た。今

次聖戰に参加するや献身報國の至誠燃ゆるが如く既得優秀なる取法の妙諦を發揮して所屬中隊の戦闘威力を隨所に顯揚せしめ又敵彈雨飛の下に身の危険と勞苦を顧みず鞍馬の保育に片時も怠る事はなかつた。定に是れ皇軍野戰砲兵の精華にして又一般軍人の範と謂ふべきである。斯かる忠誠勇武の士を褒へるは痛悼哀惜の情に堪えずと雖も氏の赫々たる功績は天晴れ皇軍戰史に輝き芳名を後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族殊に愛子の將來を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 梅原喜六

誠實沈勇の砲手蘇州河畔の激戦に任務を完遂して職に殉す

氏は横濱市中區陸町一丁目の人にして父を朝吉母をとよと云ひ明治三十九年二月十九日に生れ妻はるとの間に祐明弘子の二愛子を擧げた。性温良眞摯にして孝心深く又慈愛同情心に富み世人に交はるや親切圓滿にして信頼を受け克く業務に精勵し一度び決意すれば不屈不撓遂げずんば己まざるの氣概を持つて居た。大正八年三月靜岡縣伊東小學校高等科を卒業し其後東京市深川區天龜木材株式會社へ勤務し入營時に及んだ。昭和二年一月現役兵として三島野戰重砲兵第二聯隊へ入營し熱誠軍務に精勵して良成績を擧げ翌三年十一月善行證書を附與せられ砲兵上等兵を以て滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年九月應召淺田部隊に屬し竹山中隊の砲手として勇躍中支方面への征途に就いた。上海戰線到着後十月上旬以來大場鎮附近の戦闘には藤田部隊の右直接協同砲兵群に屬し氏は九番砲手として敵彈雨飛の中に毅然として砲

側に彈藥補充に任じ中隊戰闘に寄與せる所多大であつた。

十月下旬より十一月月上旬にかけ蘇州河の渡河戰闘及南市浦東の封鎖戰に於ては所屬部隊は依然藤田部隊の右直協砲兵群に屬し敵陣地要點の破壊第一線歩兵戰闘に對する直接協同並に友軍砲兵への火力増加の重要任務を與へられ大場鎮附近に於ける末期戰闘より蘇州河畔への追撃戰闘に參加した。氏は此間最も積極的に活躍し彈藥の整備並に砲側への彈藥補充に

毫も支障なからしめ以て中隊の戰闘威力を發揚した。殊に十月三十日眞如鎮附近の戰闘に於ては午前十時敵彈雨飛の下に時雨勝なる天候に土質軟弱なる錢家宅に最も機敏に陣地占領を完了して蘇州河對岸の敵を猛射したが氏は敵機關銃の猛射を浴びながら射撃操作の間斷を利用し掩體を増強する等目覺ましき活躍を續けた。

十一月五日所屬中隊は午前十時より砲撃を開始し午後二時より鐵條網の破壊射撃を開始した。約二十分間に命中彈八發を得て所望の突撃路を開設し續いて所命任務の射撃を續けた。當日氏の所屬第一分隊の五番砲手は病氣の爲休養を命ぜられありし爲氏は九番五番兩砲手の職務を兼務して居た。氏は彈丸の裝填を終つて定位置に就き發射令を待つ折しもあれ憎むべき小銃彈飛來し下腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏は陣中より妻宛に「生命は天にまかせるより外なし。あまり心配致さぬ様。子供の面倒頼む」と既に生死を超越しての出征であつた。蓋し多年の修養と純忠至誠の士にあらざれば斯る心境に到達し得ぬ事と察せられる。今次聖戰に参加す



るやよく分隊の中堅となり分隊長を輔佐し幾多の辛酸を克服し晝夜間斷なき敵の彈雨を冒し一意専心積極的に自己の任務に邁進し中隊の任務の遂行に尊き礎石となつた。寔に是れ皇軍砲兵の本領を發揮せる模範兵と云ふべきである。あゝ斯かる忠誠勇武の士を喪へるは眞に痛惜哀悼に堪えざるも氏が黙々の裡に尊き職責を完遂せる功績は天晴れ皇軍戰史を飾り其芳名は後世に誦はるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神ともなりて遺族殊に愛子等の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 野津本 光

郭庄に於ける敵の夜襲に特有の射撃劍術の技能を發揮し敵數名を斃して玉碎す

氏は島根縣八東郡朝酌村の人にして父を操一母をフジと云ひ明治四十三年八月三日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順寡黙にして沈勇特に同情心厚く困窮せる人に對しては進んで勞力又は私金を以て之を援助し以て自己の天職と爲すが如き美風があつた。大正十三年二月初酌村小學校高等科一年にて中途退學し翌十四年三月青年訓練所の課程を修了爾來農業に従事してゐた。昭和六年一月徴兵として松江歩兵聯隊に入營同年十二月滿洲事變に出動各地に轉戦し同八年十二月内地に歸還功により勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。在隊間は熱心精勵學術の成績優良にして上等兵に進級し特に武技に長じ射撃劍術共に賞状を受けた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召福榮部隊松原隊に編入第一小隊第二分隊小銃兵として同月二十七日勇躍征途に就い

た。而して北支戦線に到着し九月三日大郷庄附近の戦闘に於ては火線分隊内にありて勇戦奮闘克く其の本分を完うし遂に中隊と共に敵陣に突入して敵を敗走せしめ次で中隊は孫門口、夏庄附近の敵を撃攘して四日蟹庄の敵を攻撃し同地を占領した。然るに優勢なる敵は逆襲し來り此の時氏は逸早く獨斷屋上に登り之に猛射を浴びせ以て中隊の攻勢移轉を容易ならしめた。更に五日燒窑盆の敵を攻撃するや該陣地は殆んど全部掩蓋を有する堅固なる陣地なるのみならず敵が馬廠川の堤防を缺潰せる爲敵陣地前は泥海と化し我前進意の如くならざりしも

中隊全員勇敢に敵の十字火と凡ゆる困難を冒して遂に敵を撃退し其後九月中旬牛新庄の攻撃十月中旬平原附近の攻撃に於ても氏は勇戦奮闘以て中隊の任務達成を容易ならしめた。



十一月中旬黄河北岸の掃蕩戦開始せらるゝや中隊は先づ安仁衛附近の攻撃に参加し次で十四日郭庄附近攻撃の際には中隊は其の攻撃に先だち趙牛河左岸堤防の線に據る敵の攻撃を命ぜられた。此の時所属小隊は中隊の第一線となり氏は其火線分隊内にありて午後三時より行動を起し續いて午後三時十分より戦闘を開始した。敵は堤防に沿ひ約千五百米の廣正面に亘り陣地を占領し重機関銃自動小銃等を配備して我に向ひ側射斜射の射弾を集中し尙且蔭莊附近に在りし迫撃砲亦我に射弾を浴びせ我が攻撃は頗る困難の状況にあつた。しかし中隊は薄暮より愈々攻撃前進を起すや氏は分隊長指揮下に猛火を意とせず勇敢に一進一止敵を制壓しつゝ近迫し遂に敵陣に突入之を奪取し引續き右岸の敵に對し敵前強行渡河を敢行して攻撃した。此の時氏は深さ一米餘の河を勇敢に渡河して率先々頭に立ち再び猛烈果敢に敵陣

に突入した。其際敵は我れを寡兵と侮りしか優勢を恃みて逆襲し來り忽ち激烈なる手榴彈戰及肉彈戰となつた。氏は剛膽沈着特有の射撃銃劍術の技能を發揮し瞬く間に敵數名を射殺し奮戦したが無念敵彈左鎖骨下部を貫し午後九時過遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。此の時我れに對せる敵は約一千にして其夜終夜反撃し來り其の都度猛烈なる手榴彈戰肉彈戰を演じたるも氏等の奮戦と尊き犠牲とにより翌朝午前八時三十分遂に郭庄を奪取することを得敵は多數の死體を遺棄して潰走するに至つた。因みに氏は唐官屯に於ては鐵兜に馬廠附近の戦に於ては靴に小銃弾を受けたるも微傷だに負はず爾來敵彈恐るゝに足らずと爲し一層勇敢に奮戦を繼續してゐた。

氏や曩に滿洲事變に各地に轉戦して功あり今次亦戦陣に立つや毎戦勇敢小銃兵たる本分を完ふせしのみならず殊に郭庄の夜襲に際して寡兵克く衆敵に對し沈着剛膽特有の武技を揮ひて奮戦大に努め敵の心膽を寒からしめ皇軍歩兵の本領を發揮して遺憾なかつた。是れ氏が君國に一身を捧げ盡るゝまで其任務に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏や中途にして惜くも黄河々畔の華と散りしも其奮戦以て樹てたる拔群の武功は万世不朽赫々として皇軍戦史に輝き不滅の英魂は護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 黒田 勝

勇敢挺身難局を打開せる輕機関銃手豐臺附近に散華す

氏は岡山縣赤磐郡五城村の人にして父を龜次郎母を古宇と云ひ大正四年十月六月に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實

にして孝心深く人に交はりて誠實圓滿諸人の愛敬を受けて居た。又事に當るや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和五年三月五城小學校高等科を卒業し其後は大工職を見習ひつゝ兎角強健ならざる父を慰めつゝ業務に精勵し入營特進に一人前の大工になつて居た。昭和十一年一月現役兵として岡山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を挙げ上等兵候補者を命ぜられた。同年五月支那駐屯軍歩兵部隊に編入せられて爾來北支に駐屯し益々優秀なる成績を挙げ上等兵を命ぜられた。



支那事變起るや品部部隊に屬し古市中隊第二小隊の輕機關銃手として急遽豊台附近の警備に就いた。當時敵の大軍は附近の山野に充満して傲岸不遜に構へ物情愈々尖鋭化しつゝあつたが七月二十日以來中隊主力は福田戰車隊長の諱下に入りて造田庄に位置し戰車隊の掩護及飛行場の警戒を擔當した氏は連日連夜歩哨巡察等頻繁且廣範圍の警戒勤務に服したが豪膽熱心克く其重任を全うした。同月二十七日所屬中隊は前記戰車隊長の指揮下に南苑西北方揚家花園に集結し敵情地形を偵察中であつたが皇軍は愈々斷乎京津地方に蠢動する支那軍を覆滅するに決し氏の中隊は敵の退路遮斷及殘敵掃蕩の命を受け正午行動を起し二十八日未明馬家堡馬村の線に進出した。此際氏は克く分隊長を輔佐して活躍し特に輕機關銃を適切なる射撃位置に誘導し其威力を最高度に發揚せしめて所屬中隊の任務達成に寄與せる所頗る多かつた。

同日午後二時頃に至り友軍騎兵中隊は一文字山に於て又友軍歩兵第九中隊の一部は西五里店に於て敵の重圍に陥り苦戰

を續け尙有力なる敵部隊は長辛店方向より蘆溝橋を経て逐次豊台方面に向ひ前進中なりとの情報に依り所屬中隊は友軍の危急を救授する目的を以て即時馬村附近を出發し洪大庄南側を経て蘆溝橋南側に向ひ前進中午後六時頃榆樹庄西方に於て數倍の敵と遭遇し直に之を攻撃した。氏は此際中隊の右第一線小隊に屬し中隊の最右翼に位置して居たが敵は猛烈なる火力を浴びせ來りて我が攻撃前進の如くならず加ふるに敵は地形地物を巧に利用し我が第一線散兵は殆んど敵影を認め難く殊に輕機關銃は其目標發見に多大なる困難を感じて居た。茲に於て氏は敢然敵の彈雨を冒して約百米を躍進して先づ敵の一部機關銃の位置を確認し輕機關銃を招致して之を猛射せしめた。敵は此猛射に依り沈黙すると共に南方に移動を初め同時に氏の小隊正面の敵火力は大に衰へたる爲所屬小隊は機を失せず躍進して有利なる態勢を整へ中隊の戰鬪を著しく容易ならしむるを得た。所屬小隊は更に攻撃前進を起したが氏は新なる敵現はれ我れを猛射中なるを目撃して之を速かに分隊長に報告して適時に制壓せしめ所屬小隊の戰鬪を有利に進展せしむるを得た。氏は更に分隊長と共に勇躍躍進に移つたが無念一此際敵彈の爲左胸部及心臟部に貫銃剣を受けて竟に壯烈なる戰死を遂げた。併かし所屬中隊は氏等の積極且勇敢なる行動と尊き犠牲に依り難局を打開するを得次で優勢なる敵を撃破して赫々たる戰捷を收め友軍の危急を救出するを得た。

因に父龜次郎氏は氏の戰死の報に涙一滴見せず「勝は一人息子ですが人一倍優しい方で親孝行な子でした。六月末までよく便を寄越し立派に最後まで奉公したいと常に言つて居ました程ですから本人も満足であらうし私共も皇國の爲に一人の息子を捧げ得た事を嬉しくも名譽に思ひ電報が來た時には仲よくやつてくれたと思つた事でした」と語つて居るが洵に此親にして此子ありと謂ふべきである。氏の教官にして本事變に小隊長として参加せる山下中尉は「氏は常に元氣旺盛にして平時より尊重愛護せる輕機關銃を身より放さず何かと云へば率先事に當る美風を有し奮戦力闘軍人としても普通人と

しても誠に立派な人格者として一般兵の模範であつた。今回圖らずも所屬中隊と同一戦場に於て共に壯烈なる戦死を遂げたのは斷腸の思がある」と述懐して居る。あゝ斯る忠誠勇武の士を早くも聖戦初期に喪へるは痛惜禁ずる能はずと雖も氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に輝きて芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 倉持留吉

王谷莊堡石頭村攻撃に分隊全滅する迄奮戦して戦勝の端を拓く

氏は茨城縣北相馬郡高野村の人にして亡父を安次郎亡母をなかと云ひ大正二年十二月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温和にして終始一貫熱心勤勉しかも積極的にして大事に臨みては頗る勇敢であつた。昭和四年三月高野小學校高等科を卒業し同五年一月青年訓練所に入所同年十二月農業補習學校に入り同八年三月後期第三學年卒業と同時に青年訓練所の課程をも修了した。昭和九年十二月徴兵として滿州獨立守備歩兵大隊に入營熱心軍務に精勵し精勳章を受くること二回同十二年二月善行證書を附與せられて滿期除隊した。尙駐滿警備の功により勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊第八中隊に編入せられ同月二十七日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十二日より十四日に亘る永定河附近の戦闘に際しては克く分隊長を輔佐しつゝ勇戦奮闘し九月十五日より十七日に亘る拒馬河々畔附近の戦闘に際しては右岸の敵陣地攻撃に當り奮戦克く分隊の前進を容易ならしめ次で九月十八十九日平漢線

西側地區を追撃するや退却中の敵に對し適時正確なる射撃を加へ小隊の追撃を容易ならしめた。

九月十七日所屬大隊は涿州南方松林店の線を出發し泥濘膝を没する田畑を跋涉し遠く大冊河の線に向ひ不眠不休の急追撃を行ひ將兵一同疲勞困憊其極に達した。氏は此間堅忍持久不屈不撓率先志氣愈々旺盛にして進で難局に當り續いて九月二十一日には克く十三里の行程を突破し直に大冊河畔王谷莊堡附近石頭村西南方高地の堅固に設備せる敵陣地に對し夜襲す



ることとなり中隊は其の夜即ち二十二日午前二時行動を起し同二時三十分大冊河の渡渉を開始した。當夜は陰曆十七日の皎々たる明月中天に懸りて晝をも欺く明るさなりし爲早くも敵は我企圖を察知し果然猛烈なる射撃を浴せて來た。しかも大冊河は水深腰或は胸に達する濁流なりし爲對岸に向ふ前進は頗る困難なりしが此間氏は率先勇敢凡ゆる困難を克服して對岸に達した。此頃敵火は一層猛烈となりしが之を物ともせず上野分隊長指揮下に勇敢に躍進を重ね敵陣地に近迫するや大隊正面にありし敵機關銃は熾に猛射を浴せ來り我前進を妨害せしを以て分隊は此敵機關銃陣地に對し剛膽にも巧に其側

面に肉薄して突入し遂に之を撃退し尙も續いて前進し勇敢に敵陣地の側面に進出し前線より退却せる敵に對し射撃と突撃とを反覆し多大の損害を與へ尙且大隊正面に於て執拗頑強に抵抗しつゝある敵に對し中隊に先んじて益々肉薄した。此頃我が死傷續出せるも分隊長以下之に屈せず突入し數十名の敵を撃退し以て大隊敵陣地奪取の端緒を開きしが敵機關銃の側防火により分隊は遂に全滅するに至り氏亦共に敵彈の爲壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏は戦陣に立つや不屈不撓彈雨の下積極果敢率先奮闘して死生を顧みず只管戦勝に邁進し兵の本分を完ふして遺憾なかつた。當時石黒部隊長より「第八中隊の上野分隊は敵陣地に突撃し機關銃の側防火の爲全滅したるも死傷を顧みず敵を全滅せしめたる奮闘は蓋し範とすべきものと信ず」と激賞を受けたるに徴するも分隊擧つて如何に奮戦せしかを想察し得らるゝのである。實にかくの如きは身命を君國に献げて一死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。噫氏は征戰中途にして大冊河畔の華と散りしは惜みて尙餘あるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途と一家の多幸を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵伍長勳八等功七級 楠 忠 夫

秦家橋の激戦に致命傷を受くるも尙戦はんとせる忠孝兩全の勇士

氏は愛知縣丹羽郡西成村の人にして父を孝貫母をふじへと云ひ大正四年十一月十八日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く賜暇を以て歸郷せる場合に於ても深更に至る迄父母の按摩を行ひ乍ら四方山の話聞かせて慰めると謂う風であつた。又常に身を持する事謹嚴人に交はるや誠實温和を第一とし職務には忠實熱心にして倦む事知らず爲に諸人より深き愛敬を受けて居た。郷里の小學校卒業後は名古屋市中區鐵砲町洋反物問屋天馬永四郎方に住み込み夜間商業學校に通學して之を卒業したが頭腦明晰にして優秀なる成績を擧げ在學間級長を勤めて居た。氏の得意廻りの成績は拔群にして其注文品は常時店内賣上よりも多額に上りし程にて店主を初め店員一同より深き寵愛と敬服を受けて居た。昭和十

年一月現役兵として名古屋騎兵聯隊へ入營し間もなく滿洲派遣部隊に屬して渡滿し克く軍務に精勵し警備の重任を果たし在營間前後二回に亘り兵精勳章を附與せられ又守備の功に依り従軍記章並に一時賜金を賜はり騎兵上等兵を以て滿期除隊となつた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召星部隊に屬し福井中尉の指揮する機關銃小隊の第二分隊射手として勇躍江南戦線に向ひ出征した。斯くて九月十三日より劉家行及顧家宅附近の戦闘に参加したが十四日には第二中隊に配屬せられ同中隊が小舎宅を占領するに方り氏は最も適切有效なる射撃を以て徹底的に敵を制壓し以て敵の企圖を挫折せしめ又第一中隊が威家宅進出の場合には機敏有效なる支援射撃に依り同中隊の目的達成に甚大なる協力を與へた。越へて九月二十五日の戦闘に於ては姚家宅より田宅方向に退却する敵に對し機を失せず之に殲滅的の大打撃を與へ又同月二十七日の戦闘には屋上に射撃位置を求め荻窪クリークの線に陣地を占領しある敵機關銃を制壓して所屬部隊の攻撃を容易をらしむる等目覺し

き活躍を續けて居た。

十月下旬所屬部隊は大場鎮附近の戦闘に参加したが大場鎮の陥落するや氏の小隊は尖兵中隊たりし第一中隊に配屬せられ揚家橋を出發し揚家橋濱家宅道を蘇州河に向ひ殘敵を掃蕩しつゝ前進中濱家宅附近に於て自動火器を有する敵兵數十名と遭遇して鎧袖一觸之を一蹴し爾後猛烈なる追撃に移つた。次で趙家角北陳巷に據る敵をも撃退し敗敵に尾して之を追撃

したが王家宅東南方クリークの線に構築せる敵陣地に阻止せられて爾後の追撃困難となり敵前五十米乃至百米の線に展開して激戦を交ゆるに至つた。氏は此際敵が死物狂となつて猛射する中を物ともせず神速果敢に所命位置に銃を据え弾巢と化せる地域内に在りて沈着剛膽に正確なる射撃を行ひ以て頑敵を制壓した。午後三時稍々前俄然蔡家橋北側に敵機關銃現はれ所屬部隊に對し側射を初めた。氏は之に對し敏速に射向を變換して此敵に對し猛射を加へた。此時敵機關銃の一弾飛來氏は頭部に貫通銃創を受け一時は鐵兜諸共がつくりと首を垂れた。併し氏が絶倫の攻撃精神は神秘的にもかつと眼を開いて敵方を睥み「銃はどうした、敵は」と絶叫し其手は尙も堅く銃把を握つて居た。期せずして戦友等は「捕殺すな」と四圍より集り氏は後送された。昏々として意識を失へる氏は遂に同夜午前一時戦友に見守られ野戰病院の一室に聖戰の華と散り去つたのであつた。併かし所屬部隊は氏等の奮戦と尊き犠牲に依り第一線中隊の攻撃進捗し遂に赫々たる戦勝を博するを得た。

氏の一生涯たるや誠實努力の結晶而かも親に仕へて至孝、主人に事へて献身的の奉公を致し以て世の模範となり出で、軍務に服するや忠誠勇武衆兵の領袖であつた。而して今次聖戰に参加しては騎兵隊本來の性能發揮上甚だ不便なる上海戰場に臨み泥濘及クリークの諸障礙に苦しみ而かも晝夜間斷なき敵の銃砲彈を浴びつゝも澄判たる意氣と其精練なる射撃技能とに依り能く機關銃小隊の全威力を發揚し常に部隊の骨幹をなし赫々たる武勳を奏するを得た。斯かる忠良精銳の士を喪ひたる事は眞に痛惜の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ江南戰史に輝き其雄魂英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ芳名は後世に傳はるべく其神靈や尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日騎兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 山崎市作

拒馬河畔に奮戦重傷を負うも介抱を拒みて戦友の進撃を促す

氏は栃木縣下都賀郡國府村の人にして父を長作亡母をクラと云ひ大正四年一月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性寡黙温順孝心極めて深く諸事眞面目にして勤勉且大事に臨みては沈着剛膽であつた。昭和二年三月國府小學校尋常科を卒業し其後壬生町鈴木菓子製造南方に見習店員となり入營時に至つた。昭和十一年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し學術の成績優良にして同年六月には選ばれて歩兵學校教導聯隊に分遣せられ翌十二年五月精勤章を附與せられ六月原隊に交代復歸した。

支那事變起るや坂西部隊第五中隊に屬し第三小隊第二分隊小銃兵として昭和十二年八月二十九日勇躍征途に就いた。斯くて北支戦線に到着後九月十四日永定河畔胡林南方地區の戰團に於ては常に分隊の中堅として勇戰奮闘し特に東莊に於ては所屬小隊は中隊の左第一線となり氏は篠つく雨の如き敵彈下に於て沈着終始正確なる射撃を爲し勇戰奮闘以て中隊の任務達成を容易ならしめた。

九月十五日所屬隊は拒馬河の線に達するや敵は水深胸に達し而かも急流の拒馬河を陣地前の障壁となし對岸に一連の堅固なる陣地を構築し我渡河に乗じて皇軍を撃滅せんと待ち構へて居た。之が爲我第一線の渡河は容易ならざるものであつたが所屬中隊は第三小隊をして我岸に於て第一線小隊の渡河掩護を爲さしめ其の掩護に依り一舉渡河せんとした。氏は此掩護部隊に在て第一渡河點附近に陣地を占領せしが午後三時三十分我が第一線強行渡河の爲第一線に進出するや對岸の敵機關銃は俄然猛烈なる射撃を浴せ來りしを以て掩護部隊亦直ちに之に對し猛烈なる射撃を加へ之が制壓に任じ茲に忽ち激

戦を展開するに至つた。氏は従つて如き敵の弾雨を物ともせず分隊長指揮下に渡河部隊を猛射する敵に對し沈着冷靜克く每發必中の射撃を爲し奮戦大に努めつゝありしが無敵機關銃の爲右膝及大腿部に敵弾を受けた。かくと見て戦友は駆け寄り氏を介抱せんとするや氏は手を振りつゝ之を拒み「進め／＼」と叫びて前進を促し其死期迫るを自覺し陛下の萬歳を唱へつゝ人事不省に陥り遂に翌十六日午前四時名譽の戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏の尊き犠牲と奮戦激勵とに勇奮し強行渡河を敢行して十六日午前七時頃にはさしも堅固なりし敵陣地を奪取することを得た。



氏は幼にして母に死別し爾來父と妹と三人暮にして除隊後は菓子店を獨立開業するを親子共に樂しみ居たのであつた。而して氏は父にとりてはかけ換なき一人息子であつた。然るに戦死の報傳はるや氏の父は「君國に献けた體ですから戦死は元より覺悟して居ました。伴も嘸満足せう」と斷腸の思を包みて君國の爲滅私奉公の赤誠を吐露してゐた。之れ實に萬邦無比眞の大和民族の血から出た言葉である。氏や唯だ一人の父一人の妹を故國に残しつゝも其戦陣に立つや元より父子の精神は一貫せざる筈なく果して忠誠の進る所弾雨の下沈着剛膽死生を顧みず每發必中の射撃を爲し小銃兵たるの本分を完ふして遺憾なかつた。殊に傷つくも介抱を拒みて他兵の前進を促せる如き一念唯々戦勝を思ふのみであつた。古來此の父にして此の子ありは蓋し氏父子の如きを謂ふのであつて氏參戰幾何もなくして拒馬河畔に散りしは惜みても尙餘あるも生死不常は殊に戦場の常である。氏の一戦勇奮玉碎して以て樹てたる赫赫たる武功は萬世不朽皇軍戰

史に輝き英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國の前途を守護し又一家の守護神ともなりて老父の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 山 浦 秀 雄

精練なる機關銃手西保障に奮闘して同地確保の礎石となる

氏は長野縣北佐久郡川邊村の人にして父を理次母をたけじと云ひ大正二年十二月一日に生れ未だ獨身であつた。性快活眞摯にして孝心深く又友情に厚く事を行ふや熱誠着實諸人の愛敬を受けて居た。昭和二年三月山浦小學校高等科一年を修了後直ちに小縣郡組合立實科中學校に入學し同五年三月同校を卒業し其後は家庭に在りて農業に従事して居た。昭和九年六月徴兵として近衛歩兵第一聯隊へ入營し翌十年二月滿洲派遣部隊に編入せられて渡滿し匪賊討伐に従事し同年六月上等兵に進級し翌十一年三月滿期除隊となり戦功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遠山部隊に屬し鈴木機關銃中隊第二小隊の四番銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後九月十六日琉璃河々畔媽頭鎮附近の戦闘に於ては氏の所屬小隊は右第一線中隊たりし第六中隊に配屬を命ぜられたが氏は敵の銃砲火を冒しつゝ極めて沈着に第一線兩小隊の中間に射撃陣地を占め正確なる射撃を以て媽頭鎮北側の掩蓋機關銃を制壓し以て友軍歩兵の前進を容易ならしむると共に敵の出撃に際しては有效適切なる猛射を浴びせて之を撃退した。

越えて同月二十一日大冊河畔黃村の戦闘に於ては主力機關銃隊内に在りて勇躍攻撃前進し敵の重機關銃を求めて之を制壓し以て第一線歩兵の前進を容易ならしめ又黃村の主陣地及其後方陣地の突破に際しては熾烈なる敵火を意とせず第一線歩兵の行動に伴ひ神速に射撃陣地を推進し適切機敏に要點の敵を制壓し以て所屬大隊の戦闘を有利に進展せしめた。所屬部隊は其後保定附近の戦闘に参加し殘敵を掃蕩しつゝ石家莊方向に南進したが同月二十三日所屬小隊は小松少尉の指揮を以て第六中隊に配屬せられ同中隊の尖兵に續行し中康庄―富昌屯道を前進中遙か前方に退却中の機關銃を有する敵の一縱隊を發見し歩兵尖兵と共に機敏に其側方に進出し有効適切なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ之を潰亂敗走せしめた。氏は優秀なる射撃技能を有し僅かに九十發を以て約四十名の敵兵を射殺し所屬部隊の賞讃を受けた。



其後所屬部隊は石家莊より列車進撃に依り十月二十日障河北岸雙廟附近に進出し同河南岸の要點たる西保障南方高地の奪取を企圖した。氏の小隊は此際第六中隊に配屬せられ氏は小隊の左分隊の四番銃手として二十日夜午前二時頃より同高地の西南部を攻撃して之を占領し其後大隊陣地の右翼據點として同高地の確保に努めたが敵は失地奪還を企て機關銃及各種兵器を以て我が陣地占領を妨害し其射撃は氏等の陣地附近に集中したが氏は克く分隊長を輔佐し戦友を激勵して銃座及其他の陣地構築を完了した。拂曉頃より優勢なる敵は愈々氏等の陣地に近迫し來り山砲及迫撃砲を以てする集中射撃に膚接し包圍の體勢を以て數回に亘り數倍の敵が我が陣地に肉迫し來りて物凄く手榴

彈を投げ込み其炸裂に依り友軍の死傷者續出するに至つた。されど氏は毫も之に怯まず沈着勇敢にも正確且熾烈なる射撃を以て群がる敵を殲ぎ倒し之に多大の損害を與へて毎回之を撃退し以て同陣地を確保し協力中隊の出撃を容易ならしめた。然るに此拂曉戦の末期に於て無念敵彈の爲腹部に貫通銃創を受け西保障の繙帶所に收容せられ手厚き看護を受けたが出血甚しく遂に皆くも戦場の華と散つた。所屬部隊は爾後逐次來著せる兵力を以て同高地の守備を増強し敵は其後も奪回の企圖を放棄せず激戦を反覆したが氏等の尊き犠牲に依て障河南側の高地を持ちこたへ遂に同地方に蠢動せる敵の死命を制するに至つた。

氏や眞摯明朗の人郷に在りては農村青年の模範となり軍に従ひては熱誠忠實兵の模範として信頼を受けて居た。今次聖戰に参加するや突破戦線實に百數十里其間泥濘飢渴凡ゆる辛酸を克服し劍電彈雨の中毅然として自己の職責に邁進し所屬部隊の戦闘遂行に甚大なる貢献を與へた。寔に是れ皇軍機關銃隊の精銳にして又一般軍人の龜鑑たるものであつた。斯かる勇士を喪へるは痛惜の情禁する能はずと雖も氏が累次の功績たるや天晴れ皇軍の華として戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功六級 松島彌一

滿洲事變の殊勲者再び殊勲を奏し馬廐血戰の華と散る

氏は岡山縣和氣郡山田村の人にして父を善太郎母をタ子と云ひ明治四十四年六月二十六日に生れ未だ獨身であつた。資

性剛健着實にして情義に教く特に孝心深かつた。大正十五年三月小田小學校高等科を卒業して三保實業補習學校に入學し昭和五年三月修了爾後家庭に在つて父の業を輔けて居た。昭和七年一月徵兵として岡山歩兵聯隊に入營したが同年四月所屬部隊の滿洲に派遣せらるゝや氏も之に屬して渡滿し各地の匪賊討伐に参加し特に熱河の作戰に加はつて偉功を樹て勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はり同九年五月滿期除隊となつた。



支那事變勃發するや間もなく應召赤柴部隊に屬し第六中隊第一小隊の輕機關銃彈藥手として八月上旬勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて氏の所屬部隊は同月廿日より津浦沿線楊青及尙城附近の殘敵を掃蕩して該地附近の治安維持に努め次で二十三日早朝より西邊庄の攻撃に参加して驍名を轟はれ引續き東五里庄及東密に轉戦し同月下旬より九月初めに亘りては王屯櫻桃家庄馬辛庄馬集曲庄及陳庄等各地の攻撃に参加した。此間氏は凡ゆる艱苦を克服して終始勇敢に奮闘し中隊戰團に寄與せる所甚大であつた。殊に五日午後に於ける後屯の攻撃に際しては氏は其身邊に集中炸裂する砲火を意と

せず終始沈着勇敢に奮闘し率先敵陣地に突入して中隊の該地占領に大なる貢獻を爲した。

九月七日よりの馬廠攻撃に際しては氏の所屬第六中隊は選ばれて決死中隊となり十日午後三時五十分馬廠河水門附近の敵前上陸を決行した。氏は此際第一番艇に在りて雨下する敵陣を物ともせず彼岸に到着するや否や沈着且機敏に上陸し銃手を助けて逸早く敵左翼の掩蓋機關銃に猛射を浴びせて之を制壓し以後後續部隊の上陸を掩護し續いて躍進又躍進を跳せず終始沈着勇敢に奮闘し率先敵陣地に突入して中隊の該地占領に大なる貢獻を爲した。

氏や義には滿洲事變に参加して殊勳を樹て其歸郷するや忠死せる戦友の遺族を慰問し又其墓に詣で、慰靈したが殊に勝田郡北吉野出身の應取伍長の命日には必らず墓参して其生前を偲んで居た。又今次應召出發に方りては同村國防婦人會に分會旗一旗を寄贈し「戦友が目出度凱旋する時は此分會旗を私と思つて力一杯の萬歳を叫んで下さい私は今度肉弾を以て敵陣を破摧し一死報國の覺悟で出陣します」と決意の程を漏らした。果せるかな其戰場に臨むや滿洲事變の尊き經驗と矜持とを以て終始沈着剛膽に行動して衆を激勵し能く其任務を遂行した。殊に白晝強行せる馬廠河の敵前渡河に際し氏の勇敢にして機敏なる行動は天晴れ歩兵の精銳にして一般軍人の模範であつた。今やかゝる忠勇義烈の士を喪ふ眞に痛恨の極なるも氏の赫々たる武勳は燦として皇國戰史に輝き芳名は千載に誦はれ英靈は護國の神と仰がれて不滅に生き尙も皇國及一家の前途に限りなき加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 前田 武雄

慧敏勇敢なる輕機關銃彈藥手大名の激戦に奮闘し戦勝の端を開く

氏は栃木縣那須郡西那須野村の人にして父を千代吉母をツルと云ひ明治四十五年一月二十日生れで妻ハルエとの間に一子初枝がある。資性濃厚篤實而かも大事に臨みては積極勇敢であつた。大正十三年三月大田原尋常小學校を卒業し昭和八年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營直に滿洲に派遣せられ二月奉天に到着し初年兵として教育を受け三月連山に駐屯遼西地方第一區の警備に任じ四月鄭家屯に七月齊々哈爾に移駐し該地方警備に服し十月九日より十一月二十八日に亘りては吉林省秋季大討伐に参加して十二月泰安に移駐翌九年二月七日より同月二十七日まで黒龍江省殘匪討伐に参加四月齊々哈爾に復歸し五月内地に歸着同年十一月上等兵に進級し善行證書を附與せられて滿期除隊した。而して滿洲事變の功に依り勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第九中隊に編入第一小隊第一分隊輕機關銃彈藥手として同月二十三日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後所屬中隊は塘沽附近の警備を命ぜられ其の任を果して九月二十三日部隊主力に追及し翌二十四日には保定西方六吉小朱寨附近の戦闘に十月八日より十日に亘りては滹沱河渡河戦闘に十月十一、十二日に石家莊元氏附近の戦闘に十月十三日より十五日に亘りては元氏より順徳に向ふ追撃戦に引續き十一月七日に亘りては邯鄲磁縣を経て臨漳に向ふ追撃戦に参加し此間氏は連日克く困苦缺乏に堪え危険を冒して其の任を全うし次いで十一月八日院集堡附近の戦闘に際しては所屬小隊は當初中隊の豫備隊たりしが部落占領後其掃蕩を命ぜらるゝや氏は危険を顧みず常に先頭に立ちて活躍し小隊の任務達成を容易ならしめ引續き郭什望附近の攻撃に際しては小隊は中隊の右第一線となり敵を攻撃せし

が氏は敵彈雨飛の下分隊長に従ひ勇敢に前進又前進し其の間常に敵情に注意して屢々有利なる目標を分隊長に報告し又彈藥の運送を澁滞なからしめ愈々敵に近迫し突撃を令せらるゝや分隊長に續いて敵陣に突入り勇戦奮闘以て敵陣奪取に大なる貢献を爲した。



十一月十一日所屬部隊は宋哲元最後の據點たる大名城を攻撃した、此時所屬中隊は部隊の第一線となり正午行動を起すや敵は一齊に猛烈なる射撃を開始し而かも我攻撃地區は平坦開闢にして據るべき地形地物なく爲に中隊は死傷續出一時苦戦に陥りしも氏は之に屈せず克く分隊長の意圖を體して六番以下を適當なる位置に誘導し彈藥の運送をして澁滞なからしめ又絶へず敵情に注意を拂ひ小隊の前進を最も妨害する敵自動火器の位置を確かめては之を分隊長に報告し分隊の射撃をして適時有効ならしめ、かくの如くして敵の第一線陣地前四百米に近迫せしが此の時激戦の爲我が輕機關銃の彈藥は將に盡きんとする状況であつた。而かも此頃敵火は愈々熾烈を極めしが氏は勇敢にも死傷者の彈藥を蒐集して彈藥を補充せん

と活躍中無念其際胸部に貫通銃創を受け其の場に倒れ衛生隊に收容せられて治療の上更に野戰病院に後送せられ手厚き治療を受けたるも其甲斐なく十一月十七日第二野戰病院に於て遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。此の戦に中隊は七名の戦死者三十餘名の負傷者を生じたるも氏等の勇戦奮闘に依り午後五時頃には其の第一線陣地を突破し續いて夕刻より夜間に亘り天空に聳ゆる大名城壁を攻撃して午後七時半には此堅壘を奪取することを得た。

氏や曩に北滿に轉戦して功あり今次亦召されて戰陣に立つや歴戰者として常に分隊の中堅となり分隊長を補佐して積極率先射手と一體不可分關係にある彈藥手として勇敢に活躍銃側の彈藥補充を円滑ならしめ以て皇軍輕機の威力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に其彈藥盡きんとするや身の危険を忘れて戰場を奔走し死傷者の所持せる僅少なる彈藥をも蒐集して戰機を逸せざらんとす。かくの如きは實に彈藥手たる重責の存する所身命を君國に獻げて斃れて後已む盡忠赤誠の發露にして眞に軍人の範とすべきである。氏や征戰中途にして北支の華と散りしと雖も其赫々の武勳と職責に忠實なりし行動とは千載の下青史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又遺族殊に愛兒の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は傷死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級

黛 祇 文

堅忍機敵の輕機關銃手辛庄攻撃に敵の逆襲を撃退す

氏は群馬縣多野郡吉井町の人にして父を千松母をゆわと稱し大正二年一月四日生れで未だ獨身であつた。性質直誠實にして志操堅破意極めて鞏固にして一度決すれば必ず之を遂行するの氣概があつた。昭和二年三月吉井小學校高等科を卒業し續いて實業補習學校に入り昭和四年三月其の本科を卒業して同町青年訓練所に入所して同八年三月其の課程を修了した。而して其の年十二月徴兵として近衛歩兵第二聯隊第九中隊に入營し熱心精勵成績優良にして十年六月上等兵を命ぜられ同十一年三月滿期除隊となつた。除隊後は専心家業に従事し消防組小頭並に青年學校教練指導員を囑託せられた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月應召森田部隊に編入せられ勇躍して征途に就いた。かくて北支に上陸するや酷暑泥濘飢渴の中に連日難行軍を續け九月十四日より十五日に亘りては永定河畔十六日は可西務十七日には西官頭附近の戰鬪に参加した。之等戰鬪に氏は危険を顧みずあらゆる辛酸を克服して克く其の任を完了した。次で保定石家莊元氏順德攻撃の際に所屬中隊は師團直屬隊として殘敵を掃蕩しつゝ前進し十月十五日所屬森田部隊に合し爾後洪家屯附近を警備しつゝ、爾

後の戰鬪を準備した。



十月三十日所屬隊は辛庄敵陣地攻撃の命を受けた。之迄豫備隊又は師團直轄隊として行動し脾肉の敵に堪えざりし所屬原田中隊は此の日晴の尖兵中隊として前進した。而して午後三時五十分敵火を冒しつゝ東部辛庄に達した。此時我が先遣第十中隊は村端に於て敵の前進部隊と交戦中なりし爲直に展開し第十中隊と協力して攻撃を開始した。氏の小隊は中隊の左第一線となり氏は第二分隊輕機關銃手として綿畑を利用して巧に第一線に進出し盛に我を猛射し其の前進を妨害しつゝある敵のチェッコ機關銃に向ひ突如側方より急襲的

猛射を浴びせ敵の前進部隊は逐次退却を初め我が第十中隊及氏の中隊は之を追ひ敵の本陣地に向つて前進し同時に我が第七中隊も亦西部辛庄の敵に對し攻撃を開始した。此の時敵の銃砲火は頗に熾烈になつたと思ふや否や小癩にも八九十名の敵は逆襲に轉じて來た。氏は此の時とばかり輕機關銃の威力を最高度に發揚し沈着正確なる照準を以て前進し來る敵を片はじより薙ぎ倒し遂に敵は多數の屍體を遺棄して退却したが憎くや此の瞬間敵の一彈は氏の頭部を貫通した。然かし剛毅

の氏は尙銃を離さず戦友の介抱に氣息奄々たる中に「征途半ばに驚るゝは殘念である」と述べ幽かに口の中に 天皇陛下 萬歳を唱へつゝ壯烈なる戦死を遂げたのであつた。而して所屬隊は氏等の尊き犠牲奮闘に依り氏の戦死後間もなく辛庄の敵陣地を占領確保したのであつた。

氏生來至誠實直志操堅確にして現役兵として徴せらるゝや特に選ばれて近衛兵として禁闕守衛の光榮を擔ひ今次聖戦に従うやあらゆる辛酸困苦を克服し万難を排して自己任務を完遂し殊に辛庄攻撃に於ては沈着勇敢機に投じて輕機關銃威力を發揮して偉勳を奏し我が戦勝に寄與する所多大であつた。斯の如きは氏が盡忠報國の至誠と鞏固なる意志の顯現にして洵に軍人の龜鑑とするに足るものである。斯る勇士を聖戦の初期に喪ひし事は痛惜哀悼の極みである。然かし士は百戦功なくして互全を耻づ。氏や早くも華北の華と散りしも其赫々の武勳は青史に輝き其の芳名は萬世に誦はれ英靈は護國の神となりて不滅に生き神靈尙皇國及一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 松本重眞

壯烈鬼神を泣かしむる輕機關銃彈藥手

氏は群馬縣邑樂郡西谷田村の人にして父を通三郎母をうたと稱し大正三年三月三日生れで未だ獨身であつた資性温順にして寡黙實行の人で特に孝心深く弟妹にやさしく一家の中堅として日夜家業に精勵し近隣の風評も極めて良好であつた。西谷田小學校高等科及栃木縣安蘇郡植野村私立東明學院を卒業の後青年訓練所充用西谷田實業補習學校へ入學昭和九年三

月優秀なる成績を以て同校を卒業した。昭和十年一月十日徴兵として歩兵第十五聯隊に入營し克く軍務に精勵し成績亦優秀にして翌十一年七月歩兵上等兵を以て歸隊となり歸郷後は一意専心家業に精勵し老ひ行く兩親を勞はつた居た。

支那支那事變勃發するや昭和十二年八月應召森田部隊に編入せられ青木中隊の輕機關銃彈藥手として勇躍途征に就いた北支到着以來降雨泥濘且暑熱に悩まされつゝも克く困苦缺乏に耐え九月中旬永定河畔に達し同河畔股家舗の戦闘には車輦部隊の掩護に任じ又殘敵掃蕩に當り其重任を全うした。



九月十五及十六日の兩日に亘る拒馬河々畔望海庄附近の戦闘に際しては氏は轟田少尉の指揮する第一線分隊に屬し午後零時三十分行動を起し午後二時三十分より愈々可西務の堅壘に對し攻撃を開始した。此頃敵の陣地帯は左翼の要點たる房山を失ひ右翼の要點固安も危殆に瀕せし爲中央要點たりし望海庄可西務の數線陣地に據る約一箇師の敵は必死の抵抗を試みたのである。所屬部隊が漸次敵陣地に近接するに伴ひ集中する敵の十字の銃砲火は眞に篠つく猛雨の如く我軍は悼ましくも死傷續出するに至つた。氏は悲惨なる戦況にも更

に屈するの色なく沈着剛膽彈藥の補充を遂行し以て輕機關銃の全威力を適時適切に發揚せしめ所屬中隊の攻撃前進を容易ならしめた。然るに同日午後五時半頃敵兵約一中隊は小嶺にも我青木中隊の正面に逆襲し來るを見るや氏は咄嗟短劍を振つて中隊主力と共に勇敢にも群がる敵中に突入して縱横無盡に切り捲くり之に殲滅的打撃を與へて撃退し、續いて可西務の主陣地に突入し陣内を右往左往する敵を猛烈果敢に追撃中突如敵飛行機一機襲來して頭上より爆彈數個を投下すると思

ふ間もなく不幸にも氏は肩部及右腰部等數ヶ所に爆創を受くるに至りたるも屈せず遂に敵機及可西務の敵を完全に撃退するを得た。戦闘終熄と共に氏は直ちに望海庄に收容せられ軍醫の手當を受けたるも何分出血多量の爲遂に翌十七日午前二時氣息奄々たる中に幽かながら 天皇陛下萬歳を口にし從容として瞑目し雄魂遂に肉體を飛び去つた。此爆撃の際氏と同様重傷を負ひたる同郷の三田與惣一氏は氏の戦傷死迄終始介抱せる者なるが其立派なる態度には心より敬服し歸還後親しく父君に當時の状況を話したとの事である。又所屬中隊長青木大尉及江波分隊長よりも氏が勇戦奮闘の狀態と莊嚴なる臨終の模様を詳細報道し來り特に分隊長よりは最後に「よくやつた」と皆様からおほめしてやつて下さい仇は屹度取りますと香花料迄も添へての泪ぐましき弔慰文を寄せて來た。

氏や郷に在りては孝養一村の模範となり出で軍に従ふや日夜軍人精神の鍛練に努め武技亦優秀にして上下の信望厚かつた。一度び聖戦に参加するや一死報國の決意鐵石よりも堅く泥濘飢渴連日の難行軍も物の數ならず徒突く敵の彈雨も更に意に介せず一意任務に邁進して輕機關銃の全威力を發揮せしめ又窮鼠猫を食むが如き敵の逆襲に遇ふや克く戦機に投合して敢然中隊主力に加入して敵を粉砕し敗敵に尾し遂に目指す堅壘を奪取して戦勝獲得の一素因を與へた。寔に是れ軍民の鑑とすべき處不幸敵機の爆撃を受けて玉碎したるは痛恨限りなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に牢記せらるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 増田政徳

敵前上陸に猛火を冒し傷者收容中海中に没落せし勇敢なる擔架兵

氏は福岡縣京都郡小波瀬村の人にして明治四十二年十月二十日生れである。父を茂市母をクニと云ひ養父母は故人となり妻ツノエとの間に長男政昭以下三人の愛子がある。資性實直にして嚴格な軍人らしき人物であつた。大正十三年三月山本尋常高等小學校を卒業し其後入營までの間家業に従事し昭和五年一月徴兵として歩兵第十四聯隊に入營同年十二月上等兵を命ぜられ翌六年七月善行證書を附與せられて歸隊となつた。此間滿洲事變の勤勞に依り慰勞金及從軍記章を賜つた。除隊後は陸軍監獄看守に採用せられ小倉衛戍刑務所に勤務してゐたがよく其責務を盡し上官の信頼厚く模範的看守であつた。

支那事變勃發するや氏は上司に出願し其願叶つてか應召せらるゝ事となつたので氏の喜びは一方ならず當時勇躍欣喜の有様は今尙眼前に浮び出ますと家族や近親の人々が云ふてゐる。氏の所屬部隊は衛生隊の擔架第一中隊で氏は擔架兵であつた。應召以來粉骨碎身一意軍務に精勵し他の模範兵として中隊長の信任厚く選ばれて中隊長の傳令兵を勤めてゐた。

○月○日○○灣上陸の爲午前十一時屏東丸第四回上陸員として中隊長以下三十一名乗艇午前十一時二十分○○嶺南側海岸に上陸した。此時第一線歩兵は既設陣地に據れる敵に對し攻撃前進中であつたが敵前四百米に達せし頃突如戦線は敵銃砲火の爲戦傷者續出するに至つた。之を認めたる中隊長は「綱帶囊を持つた兵は前へ」と命令を下した。此際氏は直に「中隊長殿増田が行つて來ます」と答へて剛膽にも小銃機關銃迫撃砲彈の雨下する中に突進し決死の活動を以て戦傷者を手當收容すること四回下船當時は膝を没するに過ぎざりし海水も滿潮の爲遂に胸に達するに至り其中を遙か二千米沖合なる病

院船まで收容するので實に容易の業ではなかつたが然かも尙ほ又敵陣地前に於て收容せる傷者二名を游伴中悲壯にも海水中に於て頭部に貫通銃創を受け全公亭鎮の海岸に名譽の戦死を遂ぐるに至りしは惜みても尙餘りありと云ふべきである。惟ふに敵前上陸に於て不幸敵の發見する所となるや勇猛果敢萬死を期して沿岸より敵を驅逐し地歩を獲得するのが上陸戦闘成功の第一歩である。即ち水際に於ける全員の決死的奮闘は戦捷の要訣である。擔架兵の行動は第一線に於て銃と劍とを執り射撃し突撃する歩兵の如く華々しくはないが擔架を持つて



第一線兵同様彈雨の中を然かも大なる目標を暴露しながら戦線を馳驅しつゝ傷者を手當收容することは第一線歩兵の犠牲奉公と剛膽機敏に比し何等の遜色ある譯ではない。當時氏は中隊長の命令一下自ら進んで率先收容の先頭を切り彈丸雨注の間に進み加ふるに海水胸に達する中を困難を排して傷者の收容數度に及んだのである。氏の戦死後所屬中隊長より遺族に送りたる書面中にも「小官も未だに其當時益田の男らしき奮闘の姿は彷彿として眼前にさまよへる次第に御座候」と述べてゐる。其勇敢剛毅の行動は極めて困難なる上陸戦闘戦捷の因を致せしものと云ふべく氏の功績は拔群と云はねばならぬ。氏は戦場に到着して未だ大陸に活躍せざるに敵彈に斃れ嗚呼念であつたらうが其短時間の戦場に於て擔架兵の眞價を遺憾なく發揮したのである。士の戦ふや百戦功なく瓦全を耻づ、一戦玉碎名を残すに如かずと實に氏の如きは太く短く惜まれて逝く氏亦満足すべきである。氏今や全公亭鎮の華と散りしと雖も不朽の武勳は永久に擔架兵の鑑として仰がるべく不滅の英魂は護國の神となり出で、は大陸の天地に入り

りては愛兒の上に加護を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 增原衛一

勇敢なる機關銃分隊長中趙扶の激戦に奮闘して玉碎す

氏は鳥取縣日野郡多里村の人にして父を治太郎亡母をしなと云ひ大正四年五月七日に生れ未だ獨身であつた。性温順にして同情心に富み又孝心深く諸人に交はり誠實、事に當りて熱誠眞摯而かも不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和五年三月多里小學校高等科を卒業し在學間學術優等操行亦佳良にして賞を受け尙池田侯爵寄贈の賞品をも附與せられた。小學校卒業後は家庭に在りて家業を手傳ひつゝ多里農業公民學校に通學し青年學校制度を實施せらるゝに及び同學校の研究科に編入せられ入營時に至つた。頭腦明晰人格亦高邁にして校内の信望最も厚かつた。幼にして母を喪ひ祖母の慈育に人となり家を思ひ家族を案じ志を立て、竹内靜雄氏の經營せる若松鑛山運輸部に入り自動車運輸の免許證を得同部に於て運輸業務に従事して居た。昭和十一年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月熊本陸軍教導學校に派遣され鋭意研鑽勉學中であつた。

支那事變起るや間もなく原隊に復歸を命ぜられ福榮部隊に屬し大野中隊の輕機關銃分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後氏の分隊は八月二十五日より架橋材料中隊の掩護を命ぜられ永定河畔に向ひ前進した。時恰も北支は數十年來稀なる大雨に際會し泥濘車軸をも没する惡路となり車輛部隊の前進極めて困難であつたが氏は克く部下を督勵し積極

的に掩護の重任を完うし以て作戦の進捗に毫も遺憾なからしめた。

九月十一日所屬部隊は東幸庄附近の敵陣地攻撃に着手したが氏の所屬中隊は最前線に在りて搜索據點を占領し敵情地形を搜索しつゝ夜を徹した。氏は其際敵前近距離に於て警戒勤務に就いたが此夜午前三時行動を起し拂曉攻撃の爲左第一線中隊内に在りて敵前五百米に展開した。其後攻撃前進の命令下るや氏は率先勇敢に攻撃前進を續行し敵前五十米に近迫せる時敵兵退却の徴を認め機を失せず直に敵陣地に突入して之を占領した。



九月十五日所屬支隊は全力を擧げて中趙扶の敵陣地に對し拂曉攻撃を行つた。氏の中隊は大隊長安永少佐の指揮下に左第一線中隊となり午前二時三十分行動を起し午前六時より中趙扶の敵陣地を攻撃した。敵は中趙扶部落の周圍の土壘を利用して堅固に陣地を占領し附近の地形は一面に高粱畑粟畑豆畑が交錯して指揮連絡を困難ならしめ畑地には水渉二三十珊の濁水浸りありて行動甚だ困難であつた。敵は我が軍の行動を覺りてか亂射亂撃を加へ來りて我が前進を阻止して居た。氏は左第一線小隊の第五分隊長として部下を激勵し率先分隊の先頭に立ちて勇猛果敢に前進し敵前五百五十米の線に銃を据え中趙扶西北角附近の要點に對し正確且猛烈なる射撃を開始し眼鏡を以て敵情並に射撃の觀測に任じ適切有效に射撃を導き以て所屬小隊の戦闘を有利に進展さして居たが無念！ 此時敵の一彈飛來氏は喉を打貫かれてどつと前方に打ち倒れた。分隊員は直に手當を加へんとしたが氏は眼鏡を固く握り緊め壯烈なる戦死を遂げて居た。時に午前七前

頃であつた。併かし所屬中小隊は氏等の尊き犠牲に依り其後間もなき午前七時三十分頃果敢なる突撃を敢行して頑敵を粉碎し此陣地を確實に奪取するを得た。

氏や情誼に厚く陣中小閑を得ては親の健康を祈り姉夫妻並に甥の身上を案じ又農事の收穫を尋ねる等切々の情を罩めて信書を寄せて居た。又聖戦に参加するや部下を遇する事骨肉の如く泥濘飢渴の中にも率先範を垂れて幾辛酸を克服し彈雨の中に從容而かも戦機に投合して克く輕機關銃の全威力を發揚して戦勝の基礎を作爲した。而して斃るゝも尙眼鏡を堅く握りて其職責に邁進せんとする氣魄を留めしは眞に崇高なる軍人精神の發露であつて所屬中隊將兵をして一入悲憤の涙をそゝらしめた次第であつた。あゝ名分隊長と謳はれし此忠誠勇武の士今や其颯爽たる壯容に接すべくもなく痛歎哀悼の情を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功六級 正 躰 房 夫

東花園の攻撃に決死肉弾を以て敵トーチカを爆破し玉碎して
友軍戦勝の端を拓く(殊勲甲)

氏は岡山縣苦田郡久田村の人にして父を虎一母をみつと云ひ大正四年六月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性從順しかも元氣旺盛にして克己心に富み現役中は給料の殆んど全部を貯蓄して居た。又家業たる農事に熱心なる事は一村の感嘆

措かざる所で模範青年と謂はれて居た。昭和五年三月久田小學校高等科を卒業し續いて久田村青年學校に入り同九年三月卒業同年一月海軍機關兵を志願して合格せしも籤に漏れ翌十年一月現役志願兵として岡山工兵聯隊に入營爾來熱心精勵學術の成績優良にして精勳章を受くること二回同年十一月には上等兵に進級し翌十一年十一月滿期除隊し其後は大阪中山製鋼所に勤務して居た。



支那事變勃發するや間もなく充員召集令状を受けた氏は非常に喜び「今度は愈々御國に御奉公の時が來た。自分は如何なる事ありとも生きては還らず其代り犬死はせぬ拔群の殊勳を樹て万分の一の御恩報じをするのだ。便りをすれば忠義の妨げとなるから絶対に文通はせぬ。凱旋は白木の箱面會は靖國神社」と申し遣し勇躍應召し須磨部隊山本隊に編入せられ吉武小隊の一員として同月二十七日征途に就いた。而して北支戰線に到着し八月二十三日より九月六日に亘る津浦沿線の攻撃間所屬隊は歩兵某旅團に配屬せられ小王莊附近の戰鬪には豪雨を冒し歩砲前進の爲の道路の補修短橋架設及敵前至近彈雨下に於ける敵の阻絶せる道路の修理に任じ歩砲兵をして戰機に投ずる如く前進せしめ、又小王莊より天津に向ふ轉進間は晝夜の別なく猛雨を冒して浸水氾濫箇所を渡河作業に任じ砲兵の移動に支障なからしめ。次で九月七日より十二日に亘る馬廠附近の攻撃に際しては某歩兵聯隊に配屬流河鎮附近に於て敵火の下敵前水濠通過設備を完成し聯隊砲等の通過を安全ならしめ尙且敵の反撃を受くるや陣地を確保して通過部隊の掩護を完ふし。次で九月十三日興濟鎮に於ては友軍の渡

河作業に任ずる等苟くも工兵技術の要する所諸般の作業に組長或は理長として分隊長を輔佐しあらゆる困難を冒して奮闘活躍し配屬部隊の戦勝に貢献せし所甚大であつた。

九月十三日より滄縣附近の攻撃開始せらるゝや吉武少尉の指揮に屬して長野部隊に配屬其右第一線たる歩兵第一大隊長の指揮下に戰鬪に参加し九月二十一日午後八時三十分より人合庄を経て東花園に亘る敵縱深陣地に對する攻撃準備は開始せられた。而して愈々九月二十三日午後六時三十分より東花園陣地に對し攻撃開始せらるゝや「トーチカ」爆破決死班の右銃眼爆破手として石井分隊長指揮下に第一線たる歩兵第四中隊正面の障障物排除に協力し且輕裝甲戰車隊の前進援助を爲しつゝ敵の猛射の中を而かも敵の逆襲を排除しつゝ勇敢に一意南運河々畔堤防上の第一「トーチカ」に向ひ前進した。然るに午前三時十分(二十四日)敵約三十名の逆襲を受けたが戰車と共に之を反撃し同時に分隊長の號令にて「トーチカ」に挺身携行せる手榴彈を投擲しつゝ「トーチカ」に肉薄した。然るに當夜は月明の爲に企圖を秘匿し得ず惡戰苦闘を續け漸く爆藥に燐寸を以て點火し剛膽にも沈着して「トーチカ」の右銃眼口に之を抑入し然る後辛ふじて約三米後退するや一大爆音と共に銃眼は完全に破壊するに至つた。かくして任務は見事完遂したるも惜哉「トーチカ」後方の敵より手榴彈及小銃の猛射を受け遂に左下腿骨貫通銃創及左背部並に右下頸部に重傷を受け歩行困難に陥るに至つた。しかし剛氣の氏は之に屈せず尙も後退に努めしも遂に身體の自由を失ひ漸く中村上等兵に援けられて收容せられ後送の上手厚き醫療を受けたが其甲斐なく九月二十六日午後八時三十分第三野戰病院に於て名譽の戰傷死を遂ぐるに至つた。其入院中家事に關しては一言も語らず其死期迫るや衛生部員はそれとなく言ひ置くことなきやを訊ねしも遺言なく只微かに 天皇陛下万歳と唱へ遂に絶命した。しかし氏等決死隊の尊き犠牲により當時敵火の爲攻撃頓挫せる第一線歩兵の前進路は拓かれ遂にさしも堅固頑強なりし敵陣地奪取の端緒となつた。

氏や在郷在隊間共に衆の模範であつた。今次召集せらるゝや萬死に一生をも希はず先づ家郷との通信を断ちて私情を減却し専念偉勳を樹て君國に報ぜんとせし心構に至りは唯々感嘆の外なしと云ふべきである。果して戦陣に臨むや其牢固たる決意と烈々たる忠誠の迸る所たる處に工兵の眞價を發揮し歩兵の攻撃を容易ならしめしのみならず其「トーチカ」の爆破に至りては岡山工兵部隊長の遺族に對する公文通報中に「其功績は實に上海戦に於ける爆彈三勇士に優るとも劣らざるものにして云々」とある如く眞に皇軍工兵の精華であり其壯烈鬼神をも哭かしむるものがあつた。噫征戦中途にして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に皇軍の損失痛惜に堪えざる所である。然かし氏の赫々たる武勳は燦として皇軍戦史を飾るのみならず萬世不朽皇國軍民の勳鑑となり其の芳名は千古に轟はれ忠魂は不滅に生きて護國の神となり靖國神社に神鎮まりつゝ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に破格の殊勳甲として功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 藤原 浩

正確なる射撃を以て東邊庄の難局を開し戦勝の素因を作る

氏は岡山縣都窪郡帯江村の人にして父を壽市母を初と云ひ大正二年十一月十二日に生れ未だ獨身であつた。性温良誠實にして孝心深く弟妹を慈しみ常に一家の柱石となり病弱なる父を助けて家業に精勵し而かも難局に處するや不屈不撓遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。昭和三年三月帯江小學校高等科を卒業し續いて常江農業補習學校に入學同五年三月同校を卒業し其後は専ら家業に従事する傍ら同村青年學校に通學し同九年一月其の課程を終了した。而して同年同月現役

兵として伏見歩兵聯隊へ入營し軍務に精勵中滿洲事變に際會して渡滿し黒河に駐營する事約一年九ヶ月一觸即發の緊張裡に國境守備の重任を全うし功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。氏は在隊間諸成績優良にして歩兵上等兵に進級し射撃徽章をも授與せられ同十一年一月内地歸還の上滿期除隊となつた。歸郷後は忠實熱誠家業に従事し餘暇を以て村内青年の指導員となり又青年團龜山支部長の要職に推舉せられ率先範を垂るゝと共に同支部の改善振興の爲大に盡力し郷黨一般の信望を一身に集めて居た。



支那事變起るや間もなく應召赤柴部隊に屬し第三中隊第二小隊の小銃手として勇躍征途に就いた。北支到着後は津浦線に沿ひ南進し八月二十一日畢庄子及徐庄子の戦鬪を経て翌二十二日東邊庄の戦鬪に参加するに至つた。當時北支は數十年來稀なる豪雨降り續き道路泥濘膝を没し極めて難行軍を續けたが氏は常に志氣旺盛にして戦友を勵まし克く分隊長を輔けて行軍力を維持増進せるのみならず附近一帯は高粱及び楊柳繁茂し敗殘兵の潜伏には屈竟の地形にして天津方面より敗退せる敵兵所在に出沒せる中に氏は晝夜に互り歩哨斥候の勤務に服し豪膽熱心に其任務を全うした。敵は畢庄子徐庄子と共に津浦線の咽喉部を成形する西邊庄及東邊庄の線に外國將校の指導下に堅固なる陣地を構成し其偽裝は極めて巧妙に出来て居た。此兩部落附近の防備は一陣地帯をなし西部落の周圍には土壁を利用して銃眼陣地を設け西部落の北側に介在する小丘阜は北方一帯の地形を俯瞰し又其丘阜脚に流るゝ一水流は幅約三米深さ約一米五十而かも兩部落の中間地區に弓の如く灣入して自然の主抵抗線をなして居た。敵は此水流

に沿ひ數多の機關銃及掩蓋陣地を設けて斜射側射の設備間然する處もなかつた。所屬第三中隊は末永大隊の右第一線となり氏は中隊の火線分隊に屬し二十二日午前三時行動を起した。前進地域は一面に密生せる高粱畑で到る處沼澤化し連絡通視前進共に頗る困難であつた。チュツコ銃の絶え間なき銃聲は諸方面に聞ゆれど全然其所在を確むるを得ず氏等は彈巢の中に黙々として歩一步ぬかるみを前進した。午前七時頃高粱畑の縁端附近に於て愈々散開の隊形に移り氏の分隊は小隊の中央火線分隊となり東邊庄の西北角に向ひ午前八時頃より攻撃を開始した。彼我中間地區には粟畑が介在して居たが所屬小隊の前進方向は水流に沿ふ陣地の凹角内に進入する態勢にあつた。果然前進するに彼正面射を受くるは勿論右からは西邊庄東側の迫撃砲及同部落北方丘阜脚の敵陣地より左からは東邊庄北側の獨立丘阜附近の機關銃の集中射撃を受け所屬中隊の攻撃前進意の如くならず漸次死傷者を生ずるに至つた。氏は此際沈着冷靜常に正確なる射撃を以て敵を制壓し一意前進を誘起し遂に敵前三十米の線に進出するを得た。技に於て所屬中隊は中隊に協力する機關銃隊及歩兵砲隊の支援射撃と相俟ち最高度に火力を發揚して敵を壓倒し突撃を敢行した。氏も所屬小隊と共に猛然水流線の敵陣地に向ひ突入しハが無念！此瞬間必死と撃ち出した敵の十字火の一弾は氏の前頭部を貫通し午前十一時三十五分壯烈なる戦死を遂げた。而して所屬大隊は翌二十三日午前七時五十分東邊庄の敵陣地を奪取したが氏の勇敢なる奮闘は實に其一要因を爲せるものであつた。

氏や郷に在りては純朴至誠の孝子たり出でて軍務に服するや曩には滿洲事變に重要任務を果し今次聖戦に従ふや氏の所屬部隊は最も神速の作戦を要する津浦戦線に参加し悪天候惡地形に依る幾多の辛酸を克服し寡兵克く堅壘を突破して津浦作戦の緒戦に赫々たる戦勝を収めた。蓋し氏等の尊き犠牲が其一要因を爲せるは敢て多言を要せざる所である。就中突撃發揮の直前に於て所屬中隊が敵の集中火を受け將に攻撃頓挫の悲境に陥らんとするに方り氏が沈着正確なる射撃に依り敵を制壓せる動作は眞に是れ沈勇にして崇高なる責任觀念に富む者ならでは爲し得ざる所にして天晴れ皇軍歩兵の精華と謂ふべきである。今や其壯容に接すべからざるは痛惜に堪えざるも氏が累次の功績たるや皇軍戦史に輝きて不朽に芳名を留むべく不滅の忠魂は護國と神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 藤田 秀一

重傷に屈せず寡兵克く占領地を死守して張新庄に玉碎す

氏は兵庫縣加古郡神野村の人にして父を數母をひでと云ひ明治四十三年一月二十日に生れ妻チカエとの間に一子明代を擧げた。資性濃厚篤實事を爲す熱心にして大事に臨みては勇敢剛膽であつた。大正十三年三月神野小學校高等科を卒業し其後は家事に従事し昭和五年十二月より野田醬油株式会社従業員として勤務してゐた。昭和六年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營翌七年滿洲事變に出動熱河、蘇滿國境方面、吉林、哈爾濱等匪賊討伐の爲北滿南滿の各地に轉戦し同九年十二月内地に歸還した。而して滿洲事變の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊第十中隊に編入第二小隊第五分隊輕機關銃射手として同月十日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後家郷に送りし書面の一節に「中隊の兵器検査があり内地と違ひ實驗射撃ばかりです輕機分隊にて小生は優等の成績を擧げました。機能も良好だから思ふ存分射てることと思ひます」とあり曩に滿洲事變の際にも輕機射手として得意の技能を發揮し凱歌を擧げし事もあり今次亦未だ戦はざるに皇軍輕機の手を發揮せんとせる意氣込を窺ふ

ことが出来る。所屬中隊は八月二十五日より九月十四日に亘る馬廠附近の戦闘及九月二十一日より二十三日に亘る馬落坡附近の戦闘に際しては豫備隊となり敵の彈雨に曝されつゝ禁へ難き勇心を歴へ第一線に跟随し活躍の時機到来を待った。

九月二十三日沼田部隊が張新庄に對し夜襲を執行するや敵は數線の堅固なる陣地を占領しありし爲所屬第三大隊は第十第一十二中隊を第一線陣地奪取部隊とし第九第十中隊は第一線部隊が敵の第一線陣地奪取後之を超越して其第二線陣地を



奪取すべく當初中隊の第二線となり午後十時三十分一同軍旗に訣別し正子頃行動を開始した。當夜は月ありしも天曇り爲に四周暗く剩へ敵より猛射を受けしが之を意とせず勇敢に前進し水濠鐵條網を越へ將に大隊の第一線に進出せんとするや午前二時頃中隊の左翼に向ひ約百名の敵逆襲し來つた。中隊は一部を之に當て主力は計畫の如く第十二中隊を超越して敵の第二線陣地に向ひ敢爲直進せしが此際氏は分隊長指揮下に敵の小銃機關銃彈雨飛する中を物ともせず機敏に左翼に移動して迅速に射撃を開始し有効なる射弾を以て敵に多大の損害を與へ以て敵の逆襲を阻止し中隊主力の前進を容易ならしめた。敵は將校四外四十名の死體を遺棄して退却するに至つた。其後氏の分隊は前進中の中隊主力に追及し左第一線小隊の最右翼分隊として前進中右大腿部に貫通銃創を受け歩行困難となり已むなく射手を交代し同分隊數原一等兵附添其場に残り手當を受けつゝありしが大隊主力前進復々右側方より約二百の敵逆襲し來つた。かくと見たる氏は重傷にも屈せず數原一等兵初め他の負傷者と共に拳銃を以て射撃し敵數名を斃し寡兵克く一步も退かず衆敵と奮戦中再び頭部に貫通銃創

を受け壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏は滿洲事變以來輕機射手として優秀の技能を有し自ら恃む所あり偶々敵の逆襲を受くるや奮戦克く其雄腕を發揮して遺憾とする所なかつた。殊に再度逆襲に遇ふや重傷にも屈せず大敵たりとも懼れず一旦占有せる地は尺寸と雖も敵に譲らざりしは眞に軍人精神の精華と云ふべきである。天氏に一層の雄腕を揮ふべき時を借さず參戰日ならずして散りしは惜しみて尙餘あるも一戰玉碎は百戰功なきに優る。氏が張新庄の一戰に樹てたる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史を飾り其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると共に一家の守護神ともなり遺族の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 小畑 周 藏

沈勇機敏なる輕機關銃彈藥手姚官屯に奮闘玉碎す

氏は兵庫縣養父郡西谷村の人にして父を龜三郎母をひさと云ひ明治四十四年一月一日に生れ妻すみゑとの間に長女初子を擧げた。性温良眞摯にして責任觀念に富み職責の伴ふ所水火をも辭せざる氣概を持つて居た。大正十三年三月西谷尋常小學校を卒業し其後は家庭に在り家業を手傳ふ傍ら西谷青年訓練所に通學し熱心勉勵良成績を擧げ昭和六年十二月同校所定の課目を修了し翌七年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し同年四月滿洲臨時派遣部隊に屬し渡滿し哈爾濱地方の警備に任じ各地の討匪戰に武勳を奏し同九年四月凱旋功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり除隊時には善行證書を附與せられ

た。歸郷後は再び家業に従事し郷黨青年の中堅となり信望厚かつた。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し第八中隊第二小隊の輕機關銃分隊員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支到着後津浦線に沿ひ南進し九月十日前後には馬廠陣地の左翼堅壘を攻撃遂に之を突破して重要戰果を收め九月十三日以後更に津浦線上敵の最後の抵抗線と恃める滄州附近の陣地帯に對し攻撃を準備した。敵は奥深き數線の掩蓋陣地を設け廻らずに水濼鐵條網を以てし又陣地前は泥濘水濼交錯し我軍の攻撃動作は頗る困難であつた。九月二十一日所屬中隊は名譽ある中央第一線に配置せられ午後六時より行動を起し滄州の北方東花園を目ざして攻撃を開始した。斯くて所屬中隊は同日午後十時無名部落東南側に在りし獨立家屋の敵を攻撃するや氏は敵の猛射を意とせず勇敢に彈藥を補充して輕機關銃の威力を發揚して之を撃退し氏は分隊と小隊長間の連絡を命ぜられたが間もなく敵の逆襲部隊を發見するや機を失せず之を分隊長に報告して有效適切なる猛射を行ひ隣く間に之を撃退した。更に深さ二米幅約四米の水濼を躍り越えんとしたが此時正面の人合庄敵陣地より機關銃及迫撃砲の猛火を浴びる至つた。氏は毫も之に屈せず率先勇敢に水濼を泳ぎ渡り鐵條網を越えて人合庄に突入し縱橫無盡に敵を殲す等流石滿洲事變の勇士と周囲の戰友を感嘆せしめた。中隊は徹宵部落内の殘敵を掃蕩して南人合庄の線に進出し爾後の戰鬪を準備した。

同月二十三日所屬中隊は敵の主陣地姚官屯を攻撃する目的を以て午後六時行動を起し午後九時敵陣地前の一水濼を越え



て突撃陣地を占領し突撃時機を待つて居た。夜の更くるに従ひ寒氣身に浸み敵彈は絶え間なく飛來して居た。分隊全員は互に手を握り合ひ水筒の水も分けて呑み大切に携行せる煙草も之れが最後の別れと互に吸ひ合ひ悲壯の決意を以て次の突撃命令を待つた。其間氏は敵の機關銃位置を偵知して分隊長に報告すると共に正確なる射撃に依り之を撲滅した。あゝ午前四時遂に突撃命令が下つた。分隊は小隊の先頭を切り敵陣目がけて突入した。嵐の如き敵彈、怒濤の如き突撃の波、分隊長は一彈を受けて先づ種れ戰友も右に左に倒れ行く氏は「何クツ仇を討たずに置くものか」と形相も物凄く率先陣頭に立ちて突進したが敵前五米附近に於て無念敵彈の爲左肩及胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併かし所屬中隊は氏等の勇戦奮闘に依り同日午前五時遂に姚官屯の堅壘を占領し朝風に日章旗をひるがへした。本戰鬪に於ては所屬森岡中隊長も重傷を負ひ打倒れたが敵兵亦五六百名の屍體を遺棄して潰亂敗走した。

氏や温厚沈勇の人郷に在りては郷黨の中堅たり出で軍務に服するや曩に滿洲事變に轉々たる武勳を奏し今次聖戰に參加するや既往歴戰の體驗に基き分隊の中堅となりて戰友を激勵し分隊長を輔佐し克く難局を打開して戰勝の礎石を投じた。氏の壯烈なる戦死を遂ぐるや戰友相集りて號泣せる謂なきにあらず寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして又一般軍人の龜鑑たるものであつた。斯る忠誠勇武の士を喪へるは痛悼轉た禁じ得ざるも氏が累次の武勳は天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に愛子の將來を加護照覽するであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 小林 富次

勇敢なる輕機關銃手奮戦克く努めて拒馬河畔に散る

氏は栃木縣足利郡毛野村の人にして父を佐吉母をさいと云ひ大正三年十二月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順品行端正郷黨の風評良好であつた。而して其戰場に臨むや責任觀念旺盛沈着にして勇敢であつた。昭和二年三月毛野村小學校尋常科を卒業し其後は足利市富町小林工業合名會社に入社して入營時に至るまで勤務してゐた。昭和九年十二月徵兵として滿洲獨立守備歩兵第五大隊に入營辨河に駐屯して同地附近の警備に任じ昭和十年には高力道畑通砦子昭和十一年には老營溝八四三高地大青溝大蜂窩溝駝腰嶺七聖祠小城廠溝小道溝駝腰嶺香爐腕子昭和十二年には磊子溝蘇伏浴附近の討匪戰闘に何れも参加し滿洲の治安肅正に多大の貢獻を爲し同年三月服役延期解除となり除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三中隊に編入第二小隊第一分隊輕機關銃射手として同月二十九日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三、十四日永定河の渡河戰闘に於ては所屬中隊は聯隊豫備となり軍旗の護衛に任じたが此際氏は分隊長の指揮下に側方警戒或は斥候兵となり克く所命の任務を完ふした。

九月十五日所屬隊が揚家屯附近拒馬河の線に達し渡河攻撃を開始するや敵は水深胸に達する急流拒馬河を陣地前の障礙に利用し其對岸に一連の堅固なる陣地を構築し猛烈なる射撃を浴びせ來りしを以て我第一線の渡河は意の如くならなかつた。此際中隊は主力渡河の掩護部隊となり各小隊の第一五分隊を河岸に出し其射撃に任せしめしが氏は命を受くるや猛烈なる彈雨の下勇敢にも右前方河岸近く掩護射撃に適する地點まで進出し沈着正確なる射撃を以て我渡河を妨害する對岸の自動火器に對し逐次有効なる射撃を注ぎて之を制壓し以て第一線の渡河を容易ならしめ斃て中隊亦渡河して對岸に進

出した。午後九時頃大隊は渡河を完了して對岸に集結し夜間攻撃の部署を整へ直に敵の第一線陣地に對し攻撃前進を開始した。然るに夜にも拘はらず敵彈猛烈にして前進甚だ困難であつたが中隊は勇敢に一進一止しつゝ敵に近迫し敵の三方より受くる十字火を冒して遂に大隊本部と共に猛烈果敢に敵陣地に突入した。此間氏は分隊長指揮下に率先して勇敢に前進且つ突入し壯烈なる白兵戦を交へて遂に敵の第一線陣地を占領するに至つた。然し敵は尙頑強に抵抗し爲に陣内到處

混亂紛戰の状態となりしが中隊は更に進路を右方に轉じて敵の背後に迫り將に突入せんとせし時敵の投擲せる手榴彈は氏の頭上に炸裂し背部並に右上膊部下端に其爆創を受け其場に倒れ遂に衛生隊に收容せられて手當の上逐次後送せられて支那駐屯軍病院に入院し手厚き醫療を受けたるも其甲斐なく十月十日遂に該病院に於て名譽の戦傷死を遂ぐるに至つた。

氏や曩に滿洲に於て討匪の戰闘に参加すること十數回今次亦召されて戰陣に立つや克く分隊の中堅となり彈雨の下勇猛果敢遺憾なく輕機關銃の威力を發揚して我が強行渡河を容易ならしめ其夜襲に當



りては率先奮闘克く歩兵の本領を發揮した。かくの如きは蓋し氏が盡忠至誠發露の結果にして參戰日ならずして華北の華と散りしは惜みて尙餘あるも一戰玉碎は百戰功なき瓦全に優る。實に拒馬河畔に奮戦して以て樹てたる拔群の武功は滿洲事變の戰功と共に萬世不朽皇軍戰史に輝き不滅の英魂は今や護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又老親の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鶏勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 合田 綾夫

観測手として毎戦克く其任を果し更に敵襲に際し砲を守護して

桑園砲廠に散華す

氏は岡山縣兒島郡鉢立村の人にして父を傳吉母を登茂と云ひ明治四十二年四月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温良篤實にして沈勇責任觀念強く居村の模範青年であつた。大正十三年三月鉢立小學校高等科を卒業し引續き岡山縣立第一中學校に入校第三學年を修了し昭和五年一月徴兵として姫路野砲兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優良にして上等兵に進級し同六年十一月滿期除隊した。其後は家業たる農業及肥料商に精進しつゝ傍ら青年團副支部長として團の向上發展地方公共事業に盡瘁し應召の三年前大阪に出て親類先きの經營する映畫館の支配人を勤めてゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召某野砲兵聯隊第三大隊本部に編入せられ大隊観測手として同月二十七日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二十九日には津浦沿線二堡附近の戰團に参加し八月三十一日王口鎮の敵に對し攻撃を開始せらるゝや所屬大隊は午前十一時戰團に加入せしが敵は望樓及圍壁を據點として頑強に抵抗せる爲第一線歩兵の攻撃は容易に進捗せず一進一止の已むなき状態であつた。かくと見たる大隊長は北門望樓を破壊殲滅するに決し先づ観測所を推進せんとせしに第一線附近に適當なる堆土を發見せしを以て観測將校以下の観測手を此地點にまで出した。此地は敵前四百米敵の目標となる地點なりしも観測には缺くべからざる要地であつた。氏等此堆土に到るや敵の機關銃小銃彈は篠つく雨の

如く降り注いで來たが勇敢沈着其觀測に任じ該望樓破壊の爲其射撃指揮に貢獻せし所甚大にして延いて歩兵をして短時間に王口鎮を占領することを得せしめた。其後氏は九月上旬には東子牙附近中旬には東辛庄及南趙扶附近の戰團に参加し何れも常に觀測掛下士官を輔けて觀測所の設備敵情搜索及射撃觀測等に任じ彈雨の下勇敢に活躍以て克く其任を完ふした。

九月二十六日滄縣城陥落するや所屬大隊は追撃隊に配屬せられ德縣城に向ひ夜を日についで難行長驅し十月一日午後十



一時頃桑園に到着嚴重警戒裡に露營した。然るに二日午前四時頃約三、四百の敵は桑園停車場構内我砲廠に夜襲し來つた。氏は奥村軍曹に隨ひ休宿地より急遽砲廠に駆け着け構内砲廠附近に進入せる敵に對し第七中隊小銃携帶者及大隊本部砲廠監視兵と共に群敵と接戦格闘し若干の敵を噓し更に彈藥を積載しある列車の方面に近づかんとせし折惜しくも敵手榴彈の爲顔面兩手指及腹部等に破片創を受け其場に倒るゝに至つた。氏は間もなく收容せられて師團衛生隊に入班手厚き醫療を受けたるも其甲斐なく遂に當日名譽の戦傷死を遂ぐるに至つた。而して大隊は若干の死傷者を生じたるも氏等の勇戦奮

闘と尊き犠牲とにより敵は午前六時死體十數個を遺棄して潰走するに至つた。

氏や郷に在りては一村の模範青年と呼ばれ今次應召されて戰陣に臨むや砲兵の最も重要且困難なる観測手として彈雨の下死生を顧みず活躍克く其重任を完ふせるのみならず偶々敵の急襲を受くるや寡兵克く勇敢に群敵と奮戦敵をして我が砲及彈藥に一指だも染めしめさりし砲守護の行爲は正に砲兵の本領を發揮せるものにして軍人の鑑と云ふべきである。征戰

中途惜くも桑園の華と散りしも其技群の武功は萬世不朽皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途を守護して已まぬであらう。

氏は戰死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 手 錢 勝 郎

進んで難局に當り隣分隊の危急を救ひ西子牙鎮に玉碎す

氏は島根縣松江市雜賀町の人にして養母をトナと云ひ明治四十三年八月六日に生れ未だ獨身であつた。資性温順寡言沈勇にして業務に熱心且責任觀念の強い人であつた。大正十二年三月松江市雜賀尋常小學校を卒業し其後直ちに傘提灯製作業見習となり入營時に至つた。昭和六年一月徵兵として松江歩兵聯隊に入營翌七年二月滿洲事變に出動各地に轉戦し功に依り勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜り同年十二月内地に歸還同月上等兵に進級の上滿期除隊し除隊後は松江合同汽船會社船員として勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召歸營部隊第七中隊に編入第二小隊第四分隊に屬し勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二十九日所屬大隊は獨流鎮より王口鎮に向ひ前進し正午稍前子牙畔二堡附近に於て敵と遭遇し直ちに攻撃に移るや氏は第一線小隊の火線分隊内にありて分隊の中堅となり他兵を激勵しつゝ勇敢に攻撃前進し小隊の包圍攻撃遂行に寄與する所大なるものがあつた。斯くて敵を撃攘し引續き王口鎮に向ひ前進し午後四時三十分頃孫家堡西方約七百米附近に至るや再び敵と遭遇し所屬大隊は直ちに展開して攻撃に移つた。此時氏は中隊の左第一線小隊の火線分隊内にありて勇敢に攻

撃し敵を撃退したる後部落の掃蕩に任じ後子牙河左岸に陣地を占領せる敵に對し村落の土壁に銃眼を穿ちて毎發必中の射撃を爲し敵に多大の損害を與ふる等中隊の任務達成を容易ならしめた。

九月四日大隊は西子牙鎮の敵を攻撃し之を撃退して其夜警戒を嚴にし同部落に宿營中翌五日午前二時三十分頃敵兵二、三百は背後より氏の小隊の宿營地に向ひ夜襲し來つた。小隊は直ちに豫め準備せる陣地に就き應戰之を拒守せしが敵は衆



を待みて五十米にまで近迫し來り熾に機銃小銃迫撃砲を亂射し且手榴彈を投擲して我を惱まし遂に左火線たりし第五分隊方面は頗る危険に瀕し爲に小隊長は第四分隊長に之が増援を命ぜし所氏は「ヨシ自分が行ク」とて勇敢にも危険の地に進んで赴援し第五分隊輕機の右方に出て剛膽沈着正確なる狙撃により一名又一名と數へつつ壁に沿ふて我に近迫中の敵兵二名を噓し續いて第三發を發射せんとせる刹那恰も午前三時五十分惜くも敵の投擲せる手榴彈により頭部に破片創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は戰死二名負傷約三十名を出したるも氏等の勇戰奮闘と尊き犠牲とにより

敵に徹底的打撃を與へて之を撃退することを得た。

氏や平素温順寡言の人なるも一度戰陣に立つや頗る勇敢には滿洲事變に参加して功を樹て今次亦常に分隊の中堅となり積極勇戦殊に夜間突如敵襲を受け隣分隊危険に瀕するや直ちに進んで難局に當る。其「ヨシ自分が行ク」の一語之こそ氏の面目躍如たるものあり何ぞ夫れ壯なる。死生を顧みず進んで難に赴き而かも其剛膽沈着なる戰鬪振りには小隊將兵一

同の感嘆措かざる所であつた。實にかくの如きは一念烈々たる忠誠の發露と云ふべきである。參戰幾何もなく氏の如き忠勇の士を喪へるは痛惜盡きざるも奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は万世不朽赫々として皇軍戰史に輝き其不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 荒井利道

手榴彈を以て敵側防機關銃を破壊し淀家村の華と散る

氏は栃木縣鹽谷郡北高根澤村の人にして父を徳三郎母をキミと云ひ大正二年十二月三十一日生れで妻イマとの間にイチ子トシエの二兒がある。資性元氣潑刺として事に臨み熱心殊に不屈不撓遂行せざれば息まざるの氣概を持つて居た。昭和三年三月北高根澤小學校高等科を卒業し同十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして同年十二月上等兵に進級し次で伍長勤務を命ぜられ特に射撃の技能に長じ小銃射撃徽章を授けられ同十一年七月普行證書下士官適任證書を附與せられて歸隊除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第九中隊に編入第一小隊第三分隊小銃兵として八月二十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後氏の中隊は九月十四日まで塘沽附近の警備に任じ其れより聯隊主力に追及し九月二十三日之と合し一十四日小寨村附近の戰闘に参加し十月一日より同月七日に亘り石家莊攻撃の爲保定より滹沱河々畔に向ひ追撃した。此長途の連續追撃は頗る困難であつたが氏は志氣旺盛不屈不撓分隊の中堅となりて分隊長を輔佐し戰友を激勵して豫定の如

く追撃を遂行せしめ特に三日朝定縣北方の河川に架設せられたる橋梁破壊し其一部流失して前進不能となり我工兵之が修理に當りしが氏は眞裸となり敢然寒水に身を躍らして工兵の作業を援助し其積極勇敢なる行爲は一同の感激せし所であつた。次で十月八日より十日に亘る滹沱河の渡河準備間は或は徹宵至嚴なる歩哨勤務に服し或は車輛通過の爲道路構築に奮勵努力する等只管渡河準備の萬全を期すべく貢獻せし所多大であつた。



十月十一日院家村附近戰闘に際し所屬小隊は中隊の第一線となり敵彈雨飛の中を攻撃前進せしが氏は敵の猛火を意とせず分隊の中堅となり率先勇敢に躍進を繼續して敵に近接し戰闘間常に敵情に留意して屢々有利なる報告を分隊長に呈し又停止して射撃するや沈着克く其特有の技能を發揮し一發必中の射撃は敵に多大の損害を與へた。而して小隊が縮畑内に占據せる敵陣地に近迫し將に突入せんとするや突如左前方に敵の側防機關銃現はれ猛射を浴せ來つた。分隊長は先づ之を始末するにあらざれば小隊の突撃成功覺束なきを看取し氏外二名に之が撲滅を命ずるや氏は勇躍機敏直ちに大膽にも此側防機關銃に對し手榴彈投擲距離まで巧に肉薄して手榴彈を投擲し見事之を撲滅して其重任を果せしも其投擲終るや否や惜むべし氏も亦其敵彈の爲頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏の此大膽なる行動に依り小隊の突撃を容易ならしめ延ひて中隊戰勝の素因を爲すに至つた。

氏の戰陣に立つや率充分隊の中堅となり積極活躍不屈不撓連日の難行軍も、寒冷骨に徹する水中も篠つく如き彈雨の下

も未だ氏をして屈せしむるに足らなかつた。殊に側防機關の撲滅の如きは素より決死而かも大膽機敏能く其重任を完ふした。かくの如きは一に身を君國に捧げて斃れて後已む盡忠至誠の發露と云ふべく軍人の範とすべきである。征戰幾何もなく氏の如き勇士を喪ふ洵に痛惜禁じ難きも其赫々の武勳は千載の下青史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは聖戰を守護し入りては愛兒の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 荒牧美喜雄

トーチカに肉薄銃眼を破壊し瀕死の重傷を負うも尙其潰滅を叫ぶ(澤畔店)

氏は群馬縣新田郡綿打村の人にして父を萬多母をなかと云ひ大正三年十月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚眞摯責任觀念旺盛且事に熱心にして村内の模範青年であつた。昭和四年三月綿打小學校高等科卒業引續き綿打實業補習中等科に入り同六年三月卒業在校間滿二ヶ年以上皆勤且成績優秀の故を以て群馬縣廳より優良章を附與せられ又家庭實習其他の成績優秀に付之亦賞状を授けられた。家庭に在りては一意農業に従事し又自己の勉學を怠らず昭和七年三月新田郡青年聯合修養團主催幹部講習會に於て其講習修了證を又同月劍道三級上の證を授與せられた。昭和九年十二月徵兵として岐阜歩兵聯隊に入營纏て滿洲に出動各地の警備及討伐に従事し滿洲の治安維持に貢獻せし所多く其功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり又在隊間軍務に精勵學術の成績良好にして同十年十一月上等兵に進級し同十一年六月歸休除隊となつた。其後居村青年學校の指導員に選ばれ率先垂範青年指導に盡瘁し又居村在郷軍人分會第七班長に推され分會發展の爲獻身努

力してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第二中隊に編入第三小隊第一分隊小銃兵として同月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三、十四日永定河畔辛庄附近の戰闘に際しては渡河攻撃に又十五、十六日拒馬河畔東茨村附近の戰闘に際しては第一線となり兩戰團共に滿洲事變歴戰の勇士として緒戦より分隊の中堅となり分隊長を輔佐して率先勇敢に奮戰大に努め以て中隊の戰闘を容易ならしめた。



五月十八日澤畔店附近の敵に對し所屬隊は午前十一時三十分より行動を起し午後零時三十分より攻撃を開始した。此時小隊は中隊の左第一線として雨と降り注ぐ敵彈下を高梁及粟畑を利用しつゝ前進又前進逐次敵の陣地に近接し漸く敵前二百五十米に達した。敵は堅固なる陣地に據り其凸角部にあるトーチカの銃眼より猛烈に射撃し來り我前進は頗る困難となるに至つた。此時氏は小隊長より原上等兵杉山一等兵を率ひ該トーチカの撲滅を命ぜらるゝや氏は此重き使命に勇躍任に就き猛火の下勇敢にも躍進又躍進或は匍匐して敵に近迫し敵前僅かに三十米にまで肉薄し部下と共に手榴彈をトーチカの銃眼に貫通し其場に倒るゝに至つた。時に午後一時十五分でありしめ續いて其右の銃眼にも投擲せんとするや無念敵彈右大腿部を貫通し其場に倒るゝに至つた。時に午後一時十五分であつた。直に戰友に纏帶せられ次で小金井一等兵は氏を背負ひて匍匐しつゝ後退せるに出血多量の爲漸次意識不明となりたるも尙トーチカ潰滅を口ずさみ居たりしが收容後醫療手當の甲斐もなく其夜即ち十九日午前零時遂に名譽の戰死を遂ぐる

に至つた。然し中隊は氏等の勇戦奮闘に依り午後八時三十分さしも頑強なりし敵陣地を夜襲して奪取することを得た。氏の郷に在るや青年の模範一村の中堅であつた。其召されて軍に従ふや常に分隊の中堅となり頗る勇敢殊に選ばれて困難なるトーチカの撲滅に向ふや決死奮闘遂に重傷を負ひ意識を失ふも尙任務の完遂を口にして已まなかつた。かくの如きは身命を君國に献けて斃れて尙已まざる忠誠の發露にして實に氏の如きは良兵良民の範と云ふべきである。征戦幾何もなく北支の華と散りしは惜みても尙餘あるも累次の聖戦に参加し殊に澤畔店攻撃に於ける赫々の武勳は千載の下青史に輝き其勇名は千古に謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙皇國を守護し又遺族一家の前途に佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 秋葉豊彦

孝子克く奮戦遂に大册河畔に玉碎す

氏は栃木縣河内郡平石村の人にして亡父を信三郎母をヨネと云ひ大正元年十二月十二日生で未だ獨身であつた。資性温厚篤實忍耐強く責任觀念旺盛衆の愛敬を受けてゐた。氏は特に孝心篤く日頃母に對し「今少し辛抱して下さい。いまは私がお母さんが樂に暮せる様にしてあげます」と慰め外出すれば僅かながらも必ず母の嗜好品を求め來り今次出征後も戦地より給料の大部は母に送金して慰めて居た。大正十五年三月東京市神田區小川町小學校卒業其後文部省内食堂に料理見習として雇はれ昭和四年四月より東京商科大学豫科自治食堂部に料理人として雇はれ入營時まで勤めてゐた。昭和九年一

月徴兵として岐阜歩兵聯隊に入營同年四月滿洲に派遣吉林省掖河に駐屯其附近の警備並に治安維持に任じ、軍務に精勵學術の成績優秀にして精勳章を受くること二回。同年十二月上等兵に進級し翌十年七月伍長勤務を命ぜられ同十一年一月内地に歸還善行證書下士官適任證書を附與せられて滿期除隊し次で功に依り勳八等に叙せられた。



支那事變起るや間もなく應召坂西部隊第七中隊に編入大越小隊第三分隊列兵として昭和十二年八月二十六日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十五、十六日拒馬河畔北相附近の戦闘に際しては所屬中隊は聯隊豫備となりて、戦闘に参加し北相占領後數次に亘る優勢なる敵の逆襲を受けたる際は勇敢に活躍之を撃退し克く軍旗守護の任を完ふした。次で九月十八日夕南義安より前岸の敵攻撃に際しては所屬中隊は右第一線となりて攻撃した。氏は其攻撃準備間斥候となり前面の敵情並に河川の偵察に任じ奮勵努力克く其任を完ふし翌十九日拂曉北義安より渡河攻撃を敢行するや氏は第一線に立つて困難なる地障を冒して勇戦大に努め中隊の戦勝に寄與する所大なるものがあつた。

二十一日夕以來所屬中隊は大册河右岸地區に堅固なる陣地を占領して頑強に抵抗を繼續せる敵に對し渡河攻撃を準備し次で主力の爲渡河點を確保すべき任務を受け同夜半主力に先んじ彈雨を冒し強行渡河を敢行し午前二時二十分敵岸に地歩を占むることを得た。此時氏は中隊の左第一線小隊たる大越小隊長より左側警戒の命を受け勇躍任に就き敵前百五十米の地點に進みて左側警戒に任じた。當時敵の迫撃砲は猛烈に我を射撃し且北相西北角及其右方掩蓋銃眼よりの敵銃火亦熾烈

にして爲に我死傷續出せるも氏は屈せず自若として任地を守備し敵情を監視警戒して居た。此間再三敵逆襲の兆を發見しては其都度機を失せず分隊長小隊長に報告して對應の處置を講ぜしめ以て所屬隊の左側を安全ならしめ中隊は孤立して長時間に亘る主力の渡河掩護の重任を完ふすることを得せしめた。總て我主力渡河を終り攻撃前進に移るや氏亦率先勇敢敵に近迫して猛射を浴びせ遂に敵陣動搖の色あり中隊一齊に突撃に移るや氏亦敢然分隊の先頭に立ちて突入せしが其利那無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏は幼にして父を亡ひ其義務教育を終るや直ちに職に就いて家計を扶け克く母に孝養を盡して居た。而して軍隊に入るや僅かに尋常小學卒業の氏は早くも伍長勤務上等兵となつた。之を以て既に氏が如何に誠實勤勉有爲の士であつたかは察せらるゝ次第である。而かも一人の母を後にして戦線に立つや勇猛果敢凡ゆる困難辛酸を克服して勇戦奮闘其本分を完了して遺憾なかつた。母を憶う孝子の氏が進んで死地に入り奮戦する其決意忠誠は蓋し忠孝一如の信念の發露と謂はねばならぬ。噫斯る誠忠至孝の士を早くも征戦の初期に喪ひし事は誠に痛惜哀悼の情に堪えない次第である。然かし士の戦場に臨むや元より生還を期せず氏や大冊河畔の華と散りしも曩に滿洲國の治安警備に任じ再び今次聖戦に奮戦玉碎して新東亞建設の礎石となりたる紳々の武勳は千載の下青史に輝き不滅の英魂は護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り亦一家殊に母の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 足立喜作

俊敏豪膽なる重機關銃分隊長滄州に奮闘して戦勝の途を開く

氏は兵庫縣神崎郡越知谷村の人にして父を福藏母をゆくと云ひ大正四年八月二日に生れ未だ獨身であつた。性温厚至誠にして頗る孝心深く人に交はりて情義に敦く事に當るや熱誠着實遂げずんば息まざるの氣概を有し村内の模範青年であつた。昭和五年三月越知谷高等小學校を卒業し其後は約一ヶ年家庭に在り父母を扶けて家業に精勵し次で同村荒川製材所に勤務し餘暇を以て越知谷農業公民學校及び同青年訓練所に通學し夫れ夫れの課程を修了し越知谷消防組消防手及び同村青年團作畑分團長に推舉せられ村内の警防並に農村青年の素質向上の爲貢獻せる處甚だ多かつた。昭和十一年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し優秀なる成績を擧げ翌十二年五月伍長勤務上等兵を命ぜられた。

支那事變起るや間もなく長野部隊に屬し第一機關銃中隊の第二分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は泥濘飢渴の難行軍を續け津浦沿線を南進し九月中旬馬廠附近の堅固なる陣地を攻撃するに至り所屬大隊は九月十日拂曉より敵陣地の一鎖輪たる流河鎮を攻撃した。此時所屬中隊は中央第一線となり第一線歩兵部隊に協力して鎧袖一觸同陣地を奪取せしめ午前十時頃流河鎮に進入して部落掃蕩戦に協力した。然るに此陣地は極めて重要點なりし爲敵は午後五時頃同村西南方より約二大隊の兵力を以て奪回の爲逆襲して來た。氏は冷靜豪膽充分に敵を近距離に引寄せ一舉猛射を加へて將棋倒しに薙ぎ斃し其逆襲を水泡に歸せしめた。

所屬中隊は其後敵を急追して南進し次で左搜索隊に屬し魏庄子李家樓の敵陣地を突破し九月二十二日人合庄附近敵陣地の攻撃を開始した。中隊は第二第三大隊の中間地區に射撃陣地を占め特に第三中隊の戦闘に協力すべき命を受け午前五時

四十分より戦闘を開始した。此日早朝來敵銃砲彈の飛來猛烈にして所屬小隊長岡本准尉戦死するや小隊の志氣頓に阻喪せんとするに方り氏は勵聲叱咤一時小隊の指揮を執り毫も戦局に波及せしむる事なく奮闘を續け次で吉田曹長の指揮下に入つた。時恰も敵は第二大隊の左翼及所屬中隊に銃砲火力を集中して來たが附近は據るべき地區地物もなく中隊は刻一刻苦戦に陥つた。されど氏は毅然として怯まず最も活躍する敵機關銃を求めて逐次に三箇所の機關銃を制壓して第三中隊及第二大隊の左第一線部隊に突撃の動機を與へ同日午後第一線陣地を奪

取せしめ機を失せず同地に射撃陣地を推進した。



所屬大隊は二十三日夜更に敵の最堅壘たる東花園附近の敵陣地に對し夜襲を決行した。此際所屬中隊は大隊の左第一線中隊に協力すべき任務を受け東花園の東側地區に進出し午後六時三十分より戦闘を開始した。氏は此際加藤准尉の指揮下に在りて奮闘したが特に第三中隊の水濠徒渉に至大なる支援を與へ次で最前線部隊の最左翼に協力の爲氏の分隊が指令せらるゝや篠つく敵の彈雨を冒して直ちに躍進し敵前三四十米に前進したが忽ち敵の逆襲を受けて我が第一線の攻撃は遲退するに至つた。氏は間髪を入れず逆襲部隊を側射して多大の打撃を與へて之を潰走せしめ以て第三中隊及び工兵分隊の鐵條網破壊準備を迅速ならしめた。續いて鐵條網の破壊に際しては自ら射手となり正確なる射撃に依り敵の側防火器を沈黙せしめ更に突撃決行に方りては突撃點東側の側防機關銃を猛射して完全に之を制壓し以て第一線の突撃成功に至大なる貢獻を與へ引續き陣内戦に適切なる協力を與ふる等眞に目覺しき活躍の連鎖劇であつた。斯くて二十四日午前

六時卅分東花園東側陣地に日章旗が翻翻とひるがへつた。

敵は無念に堪えざりしものゝ如く東花園部落より縦隊となつて捲土重來の勢を以て我大隊目がけて逆襲して來た。氏は機先を制し猛射を加へて敵を分断し遂に敵は潰走するに至つた。然れども尙圍壁に據る頑敵は我が第一線を猛射し第三中隊及機關銃中隊には死傷續出を見るに至つた。而かも第三中隊に既に彈藥を射耗し唯地上に伏臥するの外はなかつた。此時約四百の敵兵は得たりと大逆襲に轉じ來り今や第三中隊は累卵の危機に直面した。氏は憤然として此逆襲部隊に對し殲滅的の大打撃を與へ更に陣地を變換して東南方より逆襲し來れる敵を猛射中無念！手榴彈の破片を頭部に受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午前七時卅分であつた。併かし所屬部隊は氏等の尊き犠牲に依り午前八時遂に敵の逆襲を撃退するを得光輝ある戦勝の基礎を確立するを得た。

氏郷に在るや濃厚着實の模範青年たり出で、軍務に服するや成績拔群將兵一同の深き信頼を受けて居た。而して今次聖戦に参加するや重機關銃分隊長の榮職を擔ひ毎戦克く其卓越せる火力を發揚して歩兵戦闘の骨幹となり赫々たる武勳を奏し特に滄州の血戦に於ては其俊敏克く戦機を看破して戦勝の途を拓き又友軍の危急を救ふ等皇軍機關銃の全威を振つて遺憾なく眞に皇軍の精銳軍人の龜鑑たるものであつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛恨哀悼の情を禁じ得ずと雖氏の赫々たる武勳は永く皇軍戦史に輝き其芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 阿久津清二

勇敢なる輕機射手負傷するも射撃を続け死して尙輕機を離さず

氏は栃木縣芳賀郡清原村の人にして父を宗一郎母をツマと云ひ大正五年一月二十八日生で未だ獨身であつた。資性温厚にして氣概に富み事に臨みては頗る勇敢負けじ魂の所有者で嘗て鴨綠江を泳ぎ通したこともあつた。昭和六年三月清原高等小學校を卒業し爾來農業に従事し傍ら競馬々の飼育を爲してゐた。昭和九年十二月現役志願兵として滿洲獨立守備歩兵第五大隊に入營柳河縣の警備に任じ同年一月三十一日より三月五日に亘りては冬季大討伐に五月二十日より七月二日に亘りては東邊道附近に於ける夏季大討伐に又九月二十三日より十月三十一日に亘りては秋季大討伐に参加し其年十二月一日上等兵に進級し同日より翌年二月二十七日に亘り冬季大討伐更に引續き六月三十日迄春季大討伐に七月一日より九月三十日迄は夏季大討伐に續いて翌年二月二十八日迄第二期第三期討伐に参加し其間戰闘する事實に二十餘回毎戰勇敢に奮戰偉功を樹て又凡ゆる辛酸困苦を克服して治安の維持警備の任を全うし功に依り勳八等に叙せられ昭和十二年三月服役延期を解除せられ善行證書を附與せられて除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三中隊に編入第一小隊第一分隊輕機關銃射手として八月二十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十五、十六日拒馬河の渡河戰闘に際しては敵火熾烈にして第一線渡河部隊たる第二大隊の渡河意の如くならず爲に第三中隊は一部を河岸に進出せしめ之が掩護に任ぜしが氏の分隊は勇躍重任に就き掩護射撃を開始した。此際氏は猛烈なる敵火の下にありて毫も之に屈せず沈着克く正確なる射撃を爲し我渡河を妨害しつゝある敵を逐次制壓し其勇戰奮闘に依り克く渡河掩護の任務を完ふした。次で中隊が同日夜刻渡河するや所屬小隊は常に中隊の第一

線となり中隊長を核心として數回に亘り敵陣に突撃を敢行せしが氏は分隊長と共に率先々頭に在りて側背に群がり來る敵を或は刺殺し或は射殺し遂に之を撃退して天明となるや輕機關銃を以て敵を猛射し之を潰滅する等中隊の敵陣地占領に貢獻する所多大であつた。

九月二十一日所屬部隊は保定攻略の爲王谷莊附近大冊河の線に達した。敵は大冊河の障壁を利用し水中には水雷を設け



其後方には水濠を繞らし更に散兵壕を數條に設け其各線を交通壕を以て連絡する等堅固に陣地を構成して之を占領し我前進を拒守すべく待構へてゐた。第一大隊は此陣地を夜襲して奪取すべき重任を受け直ちに之が準備に着手し其夜即ち二十二日午前零時勅上部落を出發し河岸に攻撃準備を整へ同二時三十分肅々として大冊河を渡河し敵陣地前に迫つた。然るに敵は逸早く我夜襲を察知し死物狂ひに我に猛射を浴せ來りしが氏は大隊の左第一線中隊にあつて敵彈雨注の間に物ともせず渡河し分隊長と共に高粱畑の大濕地を匍匐して前進敵前至近の距離に近迫した。然るに此頃敵火は益々猛威を逞ふし且腰を没する水田に遭ひ全く前進不能となり一時同地に停止を命ぜらるゝや氏は直ちに水田中に壕を掘開して爾後の突撃を準備し且敵情を監視し聽て機熟し中隊長より突撃の命下るや氏は他兵に先んじ輕機を抱へながら水田を匍匐して前進を起し突込めの號令と共に敢然立ちて輕機關銃を左手に抱へ銃劍を右手に撃し敵陣に突入し遂に敵の第一線陣地を奪取し同地を確保した。聽て天明となるや氏は逸早く敵自動火器の位置を發見し之を射撃せんとせし時突如右腕に貫通銃創を受けた。

然し氏は毫も屈せず之に猛射を浴せたが其際無念右前方より飛來せる第二彈頭部を貫通し輕機關銃を握りたる儘遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲に依り王谷莊堡の敵陣は遂に我軍の有に歸したのであつた。

氏や滿洲事變勃發するや勇心勃々現役を志願し獨立守備隊に入り待望の第一線に立ち各地に轉戦功を樹て今次亦召されて出陣するや歴戦者たる矜持を保ち常に分隊の中堅となり頗る勇敢常に先頭に立ちて進み或は沈着正確の射撃を以て敵を制壓し殊に傷つくも屈せず死するも愛銃を離さず唯々一念戦勝に向つて邁進す。かくの如きは是れ輕機射手たる重責の存する所身を君國に獻げて斃れても尙已まざる盡忠至誠の發露にして眞に軍人の鑑と云ふべきである。征戦中途可惜勇士を喪ふ洵に痛恨の情に堪えざるも併し滿洲事變以來今次事變に樹てたる赫々の武勳と其新東亞建設の礎石となりたる不朽の功績とは千載の下青史に輝き芳名は千古に謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇猷を扶翼し奉り又一家一族の前途を加護照覽して已ぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 朝水 周

決死敵前上陸して敵の側防機關銃に肉薄遂に馬廠血戦の華と散る

氏は大分縣北海部郡佐賀關町の人にして亡父を四郎亡母をトヨノと云ひ大正元年十月八日生れで妻無三子との間に一子弘之を擧げた。資性温厚篤實にして情義に敦く能く人の爲に盡した。大正十三年津山尋常小學校を昭和三年三月津山市立中學校を卒業したが氏は幼にして兩親に死別し叔母の家に育てられ長ずるに及び兩親菩提の爲一念發起して津山市安國寺

の師に就き得度して僧となり昭和四年九月京都市妙心寺專門道場に入門一意修業を續け昭和八年一日現役兵として岡山歩兵聯隊に入隊した。入隊後は誠心誠意軍務に勉勵し翌九年所屬部隊と共に滿洲に派遣せられ各地の匪賊討伐に参加して頭部に負傷したが勳功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり同年十一月善行證書を附與せられ上等兵にて滿期除隊となつた。除隊後は神戸の祥福寺に入門して只管修業に努め亡き兩親の菩提を弔ひ其日常報恩慈惠の行ひは諸人の愛敬を受けるに至つた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊第八中隊に編入せられ第一小隊第四分隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支上陸後所屬部隊は折柄の灼熱する炎天下に連日連夜泥濘膝を没する惡路と飢餓艱苦を克服しつゝ強行軍を續け八月二十一日には津浦沿線揚柳青及青木廠附近の殘敵を掃蕩し二十九日には陳官屯附近の敵を攻撃した。此時所屬中隊は當初前衛大隊の右側衛として前進し此際氏は小隊長若狭少尉の率ゆる將校斥候に加はり先遣せられ勇敢機敏に活躍して大超家窪附近の敵情を偵察し斥候長をして有利の報告を呈せしめた。次で九月四日唐官屯及大張屯附近の攻撃に際しては所屬中隊は部隊豫備隊として參加したが此間氏は警戒に搜索に將又連絡に凡ゆる困難危険を克服して熱心誠實に其任を全うした。

所屬部隊は愈々九月七日より敵の要衝馬廠の攻撃に着手した。馬廠の陣地は馬廠河の障害を前にして敵が長時日を費して頗る堅固に構築し難攻不落の堅壘と誇り之に第三十八師及中央軍二ヶ師を合し兵力三萬を以て守備して居た所である。

所屬部隊は七日來逐次敵に近迫し十日馬廠河の線に達した。此時氏の所屬堀田大隊は決死大隊として先づ馬廠河と馬廠運河の合流點附近の敵岸を占領して我軍主力の渡河を援護し續いて敵陣を突破する事となつた。十日午後決死大隊渡河の掩護部隊は夫々配置せられ特に我砲兵は敵陣目掛けて猛烈に砲火を開始し午後三時半頃には彼我の銃砲聲は天地を震撼し凄惨なる光景を現出した。堀田大隊は此時前屯部落を出發し午後の四時半敵陣地前の馬廠河に通ずる馬廠運河上に準備せる工兵隊操縦の發動艇に乗船し大隊長先づ第六中隊を率ひて出發第七第八中隊之に續き我工兵の神速勇敢なる操舟に依り忽ち馬廠河に進出した。敵は迫撃砲機關銃を以て篠つく雨の如く射弾を浴びせて來たが大隊長以下脇目もふらず猛進して敵岸に上陸し氏の中隊も福光中隊長の號令一下水中に飛込み上陸した。之より先氏の屬する第一小隊は馬廠河開門附近に在つて我が上陸地附近を側射する敵の側防重機關銃撲滅の命を受けありし爲小隊は上陸直ちに此敵機關銃陣地に向つて敵の猛射の中を奮進し氏は勇敢にも小隊長若狭少尉山本分隊長直原軍曹等と先頭に前進した。斯くて敵機關銃陣地前四五十米に肉薄せし時最先頭の若狭小隊長重傷を負ひ續いて直原軍曹頭部に貫通銃創を受け戦死したが氏は分隊長等と尙も前進して將に突撃せんとする時無念頭部に貫通銃創を受け口の中に幽かに 天皇陛下と奉唱しつゝ壯烈なる戦死を遂げた。時に午後五時十分頃であつた。此戦に堀田大隊は多數の死傷者を生じたが大隊長以下の堅忍不拔の奮闘と氏等の尊き犠牲に依り此日馬廠敵陣地の一角を奪取し翌十一日さしも敵が難攻不落の堅陣と誇りし敵の要衝馬廠を完全に占領したのであつた。

氏幼にして兩親に死別し中學校を卒業するや父母の菩提を弔ひ又自己を修養せんとして佛門に歸依し進んで僧侶となつた。以て氏が如何なる士であるかは十分に察知せらるゝ次第である。果せる哉今次聖戦に従うや困苦を困苦とせず危険を危険とせず死を見る事歸するが如く從容として死地に入り加ふるに滿洲事變に於ける歴戦の經驗は常に分隊の中堅となりて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 朝霧嘉平治

負傷するも尙突撃前進し遂に迫撃砲彈の爲東邊庄の華と散る

氏は岡山縣英田郡福山村の人にして亡父を市郎衛門母をつるゑと云ひ大正四年八月十日生れで未だ獨身であつた。資性温良眞摯にして孝心深く上を敬ひ下を慈しみ模範青年として敬愛されて居た。昭和五年三月福山小學校高等科を卒業して同地の青年學校に入り同十年三月卒業したが氏の家庭は母の外妹一人而かも農耕地域廣く爲に氏は寸暇なき身に拘らず在學中一日も缺席せず熱心訓練を勤み其格勤精勵は全村の話題となつて居た。昭和十一年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營した氏は亦軍務に精勵し學術の成績優良にして其年十二月一日には上等兵に進級し同時に伍長勤務を命ぜられた。

氏は昭和十二年七月歸休除隊の豫定なりしも支那事變の勃發に在營を延期せられ赤柴部隊に編入せられ第三中隊の分隊長として八月勇躍征途に就いた。斯くて北支上陸後は所屬隊は灼熱の炎天下に連日膝を没する泥濘惡路を踏破し飢餓を克服しつゝ強行軍を續けて早くも八月二十一日には津浦沿線畢庄子及徐庄子附近の敵を攻撃した。此時氏の分隊は初め中隊

の豫備隊に屬して居たが敵陣を奪取すると共に第一線に加はり陣内村落の掃蕩に率先部下を激勵して奮闘し中隊の敵陣確保に大なる貢獻を爲した。



翌二十二日所屬末永大隊は午前三時より行動を起し東邊庄の敵陣地を攻撃した。敵は東邊庄西邊庄の北方に東流する幅約三米深さ一米五十の水壕を前にして其對岸一連に堅固なる陣地を構築し其後方東西兩邊庄周圍にも陣地を占領して居た。尙水壕前の我攻撃地帯は丈餘に繁茂せる泥濘の高梁畑であつた。此時氏の小隊長は大隊の右第一線たる第三中隊の第一線となり前進し午前八時より戦闘は開始せられた。敵は我が攻撃前進に其迫撃砲機關銃を以て篠つく雨の如く猛射を浴びせて來たが小隊長以下彈雨と泥濘を冒し高梁畑に遮蔽して一舉敵前百二十米に迫つた。當時我砲兵は種種の關係上遺憾にも十分の火力を發揚する能はず第一線に於ても高梁の爲通視利かず爲に敵火の制壓不十分にして敵彈は愈々熾烈となり加ふるに小隊の攻撃地區は敵陣地の凹角なりし爲斜射を受くる事甚しく爲に我が第一線は死傷相繼ぎ前進頗る困難となつた。小隊長は今は躊躇反て損害を増すのみと決然陣頭に踊り出で前進を令した。氏は小隊長の號令に率先立つて部下を激勵しつゝ小隊長に續いて前進し一進一止敵を火制しつゝ躍進して遂に敵前四十米に近迫し此處に全線銃身も熔けんばかりに敵を猛射し機熟して小隊長は奮然立つて突撃を令した。氏は小隊長の號令に部下を率ひて猛然突撃前進するや忽ち小隊長敵彈に斃れしが氏は部下を叱咤激勵しつゝ前進を續けしに氏亦下腿部骨折貫通銃創を受けて倒れた。之が爲突撃一時

頓挫したが之を見た氏は手拭を以て傷所を緊縛し附近の部下を激勵して一聲高く突撃を號令し數歩前進せし時敵の迫撃砲彈は氏の直前に落下炸裂し傍の柳原一等兵重傷を負ふて倒るゝや殆んど同時氏は右頸部に其破片創を受け柳原一等兵等と折重なり壯烈なる戦死を遂げた。時に午前十一時三十五分であつた。併し中隊は不屈不撓尙奮戦力闘を續け遂に翌二十三日午前七時五十分東邊庄の敵陣を美事に奪取したのであつた。

氏や家庭に在りては至孝一意家運の興隆に努め軍に従ひては熱心精勵身を鴻毛の輕きに置き劍電彈雨の下率先垂範其任務に邁進して不斷の奮闘を續け中隊の戦捷獲得に貢獻する處大であつた。然るに戦線に立つて僅かに二旬遂に北支の華と散る洵に痛惜の極みである。然し士の戦場に臨むや百戦功なく瓦全を耻づ。氏や参戦日淺きも其赫々の武勳は燦として皇軍戦史に輝き芳名は千古に傳へられ其英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 阿瀬清太郎

決死敵前に突撃路を開設し姚官屯血戦の華と散る

氏は兵庫縣美方郡射添村の人にして父を小太郎母をますと云ひ大正三年二月十三日に生れ末だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く諸事熱心落實にして不屈不撓の氣概を有し模範青年として郷黨の信望高かつた。昭和三年三月郷里味取高等小學校を卒業し在學間常に級中一二番を下らざる優等生であつた。卒業後は家庭に在りて父母を扶け家業に従事し青

年會にては副會長次いで會長に推舉せられ農村青年の指導に大に盡力した。昭和九年十二月近衛歩兵第四聯隊へ入營し熱心精勵優秀なる成績を挙げ伍長勤務上等兵を命ぜられ特に射撃は最得意とする所にして特別射撃に於て優勝し木盃を授與せられ又滿期除隊時には善行證書並に歩兵下士官適任證書を授與せられた。歸郷後は郷里の青年學校指導員を囑託され家業に精勵すると共に熱誠以て青年の指導に方り良成績を挙げ益々其聲望を高めた。其後神戸市川西機械製作會社へ入社し其將來を囑望されて居た。



たのであつた。

所屬部隊は馬廠附近の敵陣地帯を突破するや更に敗敵を急追して南下し九月下旬より津浦線上敵が最後の抵抗線と特める滄州一帶に亘る數線陣地を攻撃するに至つた。所屬中隊は二十一日午後五時より開始せる友軍砲兵の砲撃に伴ひ行動を起し午後六時より人合庄の堅壘に對し攻撃を開始した。敵は陣地前約五十米に横はる幅約四米深さ約二米の濁水溝をた

大水溝を障碍となし更に其後方には鐵條網を設けて障碍の度を増強し陣内には掩蓋陣地迫撃砲陣地等を設けて頑強に抵抗した。中隊は眞先に水溝を越え大隊主力の渡河を掩護すべき命を受け午後十一時人合庄に夜襲を決定した。氏は此際第二小隊第三分隊長として分隊を掌握指揮し率先機敏に水溝を渡り鐵條網を突破して小隊戰鬥を有利ならしめた。爾後中隊主力と共に猛烈果敢に敵陣地へ突入し徹宵部隊内の殘敵を掃蕩し人合庄の敵陣地を占領した。

所屬大隊は二十三日更に敵の最堅壘たる姚官屯陣地に夜襲を決定した。所屬中隊は大隊の左第一線となり敵の彈雨を冒して一意攻撃前進し敵前百米に近迫した。されど前面には徒渉不可能なる大水溝横はり其後方には屋根形鐵條網ありて敵陣地への突入は極めて困難であつた。此時氏は選ばれて鐵條網破壊班長を命ぜられ勇躍十一名の班員を隨へ水溝を越え鐵條網に這ひ寄り隱密に鐵條網を切り初めたが折柄照らす月光に敵より發見せられて猛射を浴び大部分の部下は負傷して破壊作業は意の如く進捗しなかつた。不屈不撓の氏は更に數回場所を變更し凡ゆる手段を盡し部下を激勵して遂に中隊の攻撃正面に二條の突撃路を完成した。斯くて所屬中隊は午前四時頃姚官屯の敵陣地に突撃を決定したが氏は其突撃路を先頭第一に突入した。然るに突撃途中無念敵彈飛來左腹部に貫貫銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は其後終溝の如く敵陣地に突入し激戰奮闘の後之を占領し赫々たる戦勝を獲得したが氏の尊き犠牲に依つ所至大であつた。

氏や夙に忠君愛國の至誠に横溢し頭腦俊敏武技亦卓越し衆兵の模範として名聲を博し又郷に在りては一家の柱石郷黨の中堅として諸人の愛敬を受けて居た。今次聖戰に参加するや分隊長の榮職を擔ひ克く部下を勞はり又叱咤激勵率先垂範水火の中に身を投じて屢々赫々たる武勳を奏した。而して姚官屯攻撃に於ける決死の行動は眞に鬼神を哭かしむる偉勳であり寔に是れ皇軍歩兵の精華にして天晴れ軍人の龜鑑たるものであつた。今や風發叱咤の壯容に接する能はず轉た痛惜に堪えざるも其功績たるや皇軍戰史に光彩を放ちて芳名は不朽千古に誦はるべく不滅の忠魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國

並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 安藤 一一六

忠孝兩全の高射砲手北支防空に奮闘し惜くも保定空爆に殞る

氏は愛知縣東加茂郡阿摺村の人にして亡父を飢餓母をすゑと云ひ大正三年三月二十二日に生れ妻久子との間に長女歌子を擧げた。性質爽快活にして職責を重んじ常に進取向上の氣勢横溢し事に臨みては勇猛果斷であつた。昭和三年三月阿摺北部高等小學校を卒業し其後は母を輔けて農業に精勵し一家の柱石として孝養を盡して居た。昭和九年一月現役兵として高射第一聯隊へ入營し克く軍務に精勵し同年十二月には砲兵上等兵を命ぜられ翌十年十一月滿期除隊となつた。歸郷後は再び家業に就き愈々聖旨を奉載し質實剛健に勤勉力行近隣の敬慕を受けて居た。

支那事變起るや間もなく應召野戰高射砲隊五弓部隊第三分隊一番砲手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は七月下旬北支へ到着暫く天津附近に於て警備に任じて居たが其間他部隊と協力して大沽及び北寧線上の重要施設を占領並に唐山附近に蠢動する敵兵二三十名の武装解除をなさしむる等東奔西走神速なる戰果を收め又永定河畔榆堡鎮附近に於ける渡河戰團には其上空掩護及友軍飛行場上空の庇掩に任ずる等重要任務を完遂し九月二十日頃には涿縣附近の防空に任じて京漢沿線の作戰を安全ならしめた。氏は其間降雨泥濘の難行軍に諸種の障礙を排除し積極的に分隊長を輔佐し又分隊の中堅となつて砲隊の前進並に其警戒の重任を全うした。

九月二十四日早朝涿縣を出發し保定に向ひ前進したが途中固城鎮附近に於て我重砲隊が約四五十名の敗殘兵より襲撃を受けありとの情報に接し氏は所屬小隊長の指揮下に急遽之に趣き直に砲撃を加へて忽ち之を潰亂敗走せしめた。斯くて所屬隊は翌二十五日堂々保定に入城し農學校々庭に陣地を占領して同地に於ける兵站施設の上空掩護の重任に服した。



同日三十日早朝より滿天雲低く掩ひ遠望を許さなかつた。此時俄然上空に爆音を聞きしが其爆音は一秒又一秒保定上空に近づいて來た。高射砲隊員は砲側の配置に就き射撃準備を整へた。

敵か味方か機影は何處と異常の緊張を以て爆音の空に目を見張つたが皆目機影を認むるを得なかつた。午前六時四十分突如雲を衝いて降下せるは正しく敵機にして忽ち停車場附近の兵站施設に對して爆弾を投下した。高射砲隊は間髪を容れず砲口火を吐いて急速なる猛射を集中し瞬く間に敵機を西方に驅逐した。此一瞬間に敵の投下せる一爆弾は砲側に落下し轟然たる爆音と共に破片四散し氏外若干名の戦死傷者を生ぜしめた。氏は胸部及び前膊部に破片創の重傷を受け直ちに入院治療を受け一時經過良好であつたが翌八月一日午前十

一時頃症状革まり午前十一時半遂に悼ましくも護國の華と散つた。氏は戦死の前夜中隊長に對し相續人の件と愛子の養育費に關し遺言し靜かに瞑目したる由であるが是氏が平素家庭に對する責任を如何に重視しありしかを立證するものにして氏が戰場に於ける盡忠報國の至誠と相俟ち本來の使命を全うせるものと謂ふべきである。あゝ北支は數十年來稀に見る豪雨の爲到る處泥濘膝を沒し見渡す限り丈餘の高梁畑綿亙して敗殘

兵所在に出没する中に所屬車輛部隊の行動たるや蓋名状すべからざる苦難に遭遇せるは察するに餘りある所であるが不屈不撓の氏は率先難局を打開して砲手の任務を完うした。寔に是軍人の龜鑑たるものであつたが今や其壯容に接すべくもななく轉た痛惜に堪えざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名を後世に残し不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 齋藤 熊

職責觀念旺盛の良射手重傷を負うも射撃を續け拒馬河畔に散華す

氏は群馬縣群馬郡瀧川村の人にして父を稻五郎母をサヨと云ひ明治四十四年七月二十九日生で未だ獨身であつた。資性忠實責任觀念強く事に當つて沈着勇敢であつた。大正十五年三月前橋市久留方高等小學校を卒業したが在校八年間一日も缺席せしことはなかつた。昭和七年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして同年六月には滿洲守備の爲同地に駐屯せるに恰も同年九月滿洲事變突發各地に轉戦功を樹て勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり又上等兵に進級し同年九月内地に歸着善行證書下士官適任證書を附與せられて滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第三機關銃中隊に編入第一小隊第一分隊機關銃射手として八月二十九日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十三日股家舖の戦闘に際しては永定河の渡河掩護隊に屬し有効なる射撃を以て敵を制壓し以て主力の渡河を容易ならしめ次で十四日には永定河の濁流を渡河して敵を追撃し同夜門村の夜襲に際しては第一

線となり勇猛果敢敵に近迫し其機關銃火の威力を以て敵を震撼し第一線歩兵の強襲を成功せしめ九月十五日東茨村附近の戦闘に際しては第一線歩兵と緊密に協力し其火力を以て敵に多大の損害を與へ協力歩兵をして敵陣地の奪取を容易ならしめた。

九月十六日拒馬河畔駱駝灣附近の戦闘に際しては所屬小隊は第九中隊に配屬せられ午後一時頃行動を起し同一時二十分



より戦闘を開始するや氏は射手として分隊長の指揮下に終始沈着正確なる射撃を以て敵の重要目標に對し有効なる射撃を浴びせて之を制壓し歩兵の攻撃前進を容易ならしめ殊に第一線歩兵が逐次前進して敵陣地前五十米に近迫せる頃敵の側防機關銃を發見するや迅速に之に射向を指向し沈着せる操作により精確良好なる射撃を以て之を急襲し忽ちにして此敵機關銃を射撃不能に陥らしめ第一線歩兵をして側防火の危害を免れしめ次で約百五十名の敵が第九中隊の左翼方面に逆襲し來るや之に對し現陣地よりは適當なる射撃不可能なりし爲當時敵の火力は熾烈を極めしも氏は之に屈せず此逆襲部隊の射撃

に適する地點に陣地を變換せんとして直に出發左翼方面に移動せしが途中無念敵小銃彈の爲右大腿部に受傷するに至つた。然し剛氣の氏は之に屈せず遂に陣地を占領し鮮血流るゝも敵の逆襲部隊に對し有効なる射撃を開始せしが出血甚しく射撃すべき力も盡き分隊長の命に依り後退收容せられ手厚き看護を受けたるも遂に其甲斐なく翌十七日馬辛庄衛生隊に於て名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏や曩に滿洲事變に参加し各地に轉戦功を樹て今次亦召されて戦陣に立つや歴戦の經驗に鑑み機關銃の花形たる射手として勇敢沈着常に有効的確なる射撃を以て敵を震撼し皇軍機關銃の精銳を發揮して聊かも遺憾なかつた。殊に友軍危急と見るや身の危険を忘れて陣地を變換し而かも重傷を負ふも屈せず射撃を繼續せる如きは是れ實に機關銃射手たる重責の存する所身命を君國に捧げて斃れて後已む盡忠至誠の發露と云べく眞に軍人の範とすべきである。征戦中途可憐良射手を喪ふ洵に痛恨の情に堪えざるも其赫々の武勳と職責遂行の示範とは千載に輝き英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇國を守護し又遺族一家の前途に尊き佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 澤 政治

率先彈雨を冒して敵陣地に突入し馬廐血戦の華と散る

氏は鳥取縣岩美郡大岩村の人にして父を河村幸一母をみよと云ひ大正二年十月十日に生れ澤家の養子となり亡養父を重治養母をいとと云ひ妻たつ子との間に一子政代を擧げた。性温厚篤實にして責任觀念旺盛氣概に富み又孝心深く情義に敦く名實共に一家の中堅となり近隣の敬慕を受けて居た。昭和二年三月大岩小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて家業を手傳ひ傍ら青年團評議員として會員を指導して居た。昭和八年十二月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營し間もなく滿洲派遣部隊に編入せられて渡滿し各地の討伐警備の重任を全うし功を以て勳八等瑞寶章を賜はり翌九年五月凱旋後は繁激なる演習勤務に精勵して良成績を擧げ特に武技に習熟し衆兵の模範として信望を得て居つた。昭和十年十月善行證書並に歩

兵科下士官適任證書を附與せられて輝やかに満期除隊となつた。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し田巻中隊の第一小隊第四分隊員として勇躍北支に向け征途に就いた。斯くて所屬部隊は炎熱泥濘の難行軍を續け津浦線を南進し八月下旬より九月上旬にかけ先づ津浦線の咽喉部にして且永定河南岸地区の一要衝たる靜海附近の諸陣地を突破して全軍の作戦に重大なる利益を與へた。氏は其間克く戦友を激勵し分隊長を輔佐し率先勇敢に行動し所屬中隊の任務遂行に寄與せる所頗る多かつた。



所屬部隊は更に敵を追撃して南下し九月七日より馬廐附近の敵陣地帯に對し攻撃を準備した。敵の陣地は馬廐河の障壁を利用し月餘の日子を費やして堅固なる陣地を構築し敗殘の第三十八師の外支那中央軍二ヶ師を合して其兵力約三萬を以て之を守備し其主陣地の左翼據點は小王莊及流河鎮の二陣地であつた。敵は馬廐河水閘に依り河水を堰き止め堤防を決壊して馬廐北岸地区を汎濫地帯と化せしめ我攻撃動作を妨害した。所屬中隊は兵團の總攻撃に先立ち小王莊の敵陣地を奪取すべき重要命令に接し九日午後十一時四十分姚家庄を出發し小王莊の夜襲行動に移つた。所屬分隊は中隊主力と共に闇夜を利用し浸水せる高粱畑を或は泥濘膝を没する沼澤地を前進し隱密に敵陣地に接近したが敵前三十米に於て敵の發覺する所となり熾烈なる猛射を浴びるに至つた。至誠奉公胸に燃え豪膽不敵眼中既に敵を呑む氏は神色自若突撃の號令一下と共にサア行くぞと率先身を躍らして大水濘に跳込み瞬く間に對岸に這ひ上がり喊聲をあげて敵陣地に突入し

接戦格闘中頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の勇敢なる行動は所屬中隊將兵の志氣を著しく昂揚し一舉激守兵を粉碎して之を占領確保し次で同日拂曉流河嶺の堅壘を隣りに奪取したが其後幾度か十數倍の敵に依り行はれたる果敢なる逆襲も物の見事に撃退し得たるは全く氏等の尊き犠牲に依り尊き刺戟と激勵を與へられた賜であつた。

氏や誠實忠烈の人郷に在りては郷黨の模範人物たり出で、軍務に服するや曩には滿洲事變に参加して勳功を奏し人格技能業兵の模範として將兵の愛敬を受けて居た。果然今次聖戦に参加するや既往戦歴の體驗に基き克く分隊の中堅となり幾多の辛酸を克服し劍電彈雨の中に從容機敏克く既得の武技を發揚して中隊の戦勝獲得の爲尊き礎石となつた。定に是皇軍歩兵の精銳にして又軍民の鑑となすべきものであつたが馬廠血戦一夜の嵐に散りしは痛歎哀惜に堪えざるも氏の累次の功績は皇軍戦史を飾りて芳名を後世に瀰はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に養家實家の前途に又愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵伍長勳八等功七級 齋藤 淳

斥候に歩哨に將又第一線に大膽勇敢に其任を完うし遂に負傷するも
屈せず奮戦して揚庄の華と散る

氏は岡山縣勝田郡廣戸村の人にして亡父を純一母を倉と云ひ大正三年七月二日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實

にして孝心厚く友情に富み長じて僅少乍ら給料を受くるや殆んど母へ送金し兄の大學通學の學費に充てゝゐた。氏は又勤勉努力家にして責任觀念旺盛の人であつた。昭和四年三月廣戸小學校高等科を卒業し引續き農業補習學校に入り本科第一學年修了後京都藥種學校に學び引續き藥局に勤務し入營時に至つた。昭和十年一月徵兵として姫路騎兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優良にして翌年四月上等兵に進級し同年十一月善行證書を附與せられ滿期除隊の上翌十二年三月より



尼ヶ崎市住友金屬工業株式會社鋼管製造所に入所し精勵してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召桑田部隊第二中隊に編入せられ同月二十七日勇躍征途に就いた。而して北支戦線に到着し八下旬より九月中旬に亘る津浦沿線の戦闘間所屬隊は中井支隊に屬し主として子牙河々畔に行動するや氏は屢々須山將校斥候の一員として泥濘浸水地帯に活躍し中趙扶附近の戦闘に際しては中隊長指揮下に第一線となりて勇戦し次で九月下旬に於ける滄州附近の戦闘間は同じく須山將校斥候の一員として急速なる追撃戦に参加し敗殘兵横行の地域内に大膽不敵の行動を敢行し斥候長の任務達成を容易ならしめ九月下旬より十月中旬に亘る德縣に向ふ追撃間特に蒼房附近の戦闘に際しては同様斥候として遠く敵の背後に進入して敵情搜索に努め十月一日趙庄附近の戦闘に際しては小隊長以下僅かに六名を以て敵の正面に向ひ攻撃せしが附近一帯全く敵火に暴露せるにも拘はらず勇敢に前進して敵前百五十米に近接するや陣地に據れる敵の集中火を蒙り前進頗る困難となり而かも氏の傍に居りし分隊長は敵輕機關銃の集中火を受けて斃れ氏自身亦右前膊に擦過傷と絨衣には二彈を受けた。併

し氏は毫も之に屈せず猛火の下逐次敵に肉薄し敢然小隊長と共に敵陣に突入忽ち敵兵二名を噓し奮戦以て小隊の手庄占領を容易ならしめた。次で十月二十五日所屬中隊が捜索隊となり行動中優勢なる敵の包圍を受くるや樋口少尉指揮下に之が救援に赴き此時亦第一線となりて勇戦以て小隊の任務達成を容易ならしめた。

十一月十日正午臨邑東方二里排庄に進入大休止中氏は展望哨として敵情監視を命ぜられた。氏は忽ち馬庄方向より王家巷方面に北進中の敵大部隊を発見直ちに之を中隊長に報告すると同時に之に的確なる射撃を浴びせて敵を狼狽せしめ其夜は中隊陣地の最弱點部たる東北角に於て井上伍長以下六名と共に第一線獨立分隊として之が守備に任じ徹宵敵の砲撃絶へざる陣地に於て不眠不休緊張警戒に服せしが翌拂曉となるや敵は砲火を我に集中すると共に濃霧に乗じ近く攻撃して來た。氏は敵の猛烈なる砲火の下毫も之に怯まず沈着剛膽敵情を監視して居たが午前八時頃重迫撃砲彈足下に炸裂し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦により益々志氣を作興し三日二晩に亘り執拗に逆襲し來れる敵の心膽を寒からしめ遂に十二日午前九時悉く之を撃退することを得た。

氏の家に在るや至孝其戰場に臨むや斥候に歩哨に將又第一線兵として死生を顧みず敗殘兵横行の地域に或は彈雨の下勇敢殊に趙庄に於ては傷つくも屈せず寡兵群敵中に突入奮戦せる如き小隊の中心人物として重視せられ上下景仰の的であつた。かくの如きは蓋氏の至誠盡忠の精神發露の結果と云ふべきである。征戰中途黄河々畔の華と散りしは惜みて尙餘あるも其奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き其不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日騎兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 齋藤道治

蘇州河畔の激戦に沈着射撃觀測中敵砲彈の爲玉碎す

氏は東京市深川区永代二丁目の人にして亡父を末吉母をふさと云ひ明治四十年五月十日に生れ妻美恵子との間には未だ愛子がなかつた。性快活眞摯にして孝心深く思慮周密にして熱誠事に従ひ義務心旺盛であつた。大正九年三月深川區臨海小學校を卒業直に京華商業學校に入學し同十四年三月同校を卒業し其後は暫く日本橋精米會社へ入社の後家業たる魚問屋業に従事昭和三年一月現役兵として三島野戦重砲兵第二聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を挙げ翌四年十一月善行證書並に砲兵科下士官適任證書を授與せられ滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年九月應召平野部隊に屬し觀測小隊要員として勇躍中支方面への征途に就いた。上海戦線へ到着後は寶山縣下に轉戦したが十月上旬に於ける大場鎮附近に於ては軍直轄部隊となり吉住部隊隷下の秋山部隊の戦闘に協力して劉家行より頓悟橋橋亭宅附近に至る陣地奪取に参加するや氏は觀測挺進班の三番觀測手として熾烈なる彈雨を浴びつゝ率先能く其任務を遂行した。

十月九日より同月二十五日に亘る大場鎮附近の戦闘に於ては所屬隊は藤田部隊の全般任務砲兵群に加はり火力増加並に陣地要點の破壊任務を受け氏は依然三番觀測手として明晰なる頭腦を以て觀測掛下士官を輔佐し克く觀測小隊長の意圖の如く活躍し殊に同月十七日及十九日兩日の戦闘に於ては孫家宅觀測所より柵石橋の前進觀測所要員として派遣せらるゝや敵彈雨飛の中に敢然として任務に邁進し射撃諸元の決定敵情捜索並に射撃觀測に任じ十月下旬には藤田部隊の右直協砲兵群に屬し大場鎮附近の末期戦闘と追撃戦に参加し克く戦機に投合して挺進班の任務を完遂する等所屬中隊の任務達成に貢

献せる所頗る甚大であつた。

堅壘大場鎮の陥落するや皇軍主力は蘇州河の全線に向ひ敵を壓迫し爾後の戦闘を準備した。此時氏の所屬中隊は張家橋附近の放列陣地を占領し其前進觀測所を陳家渡附近に設けた。蘇州河を挟んで彼我の距離僅かに五十米にして所屬中隊は敵砲兵陣地に對し猛撃を浴びせかけた。敵亦之に應戦し彼我の砲戰物凄く大氣を震動する股々たる砲聲附近に落下炸裂する土砂爆煙は暗闇として地上を覆ふに至つた。氏は泰然として附近



家屋の屋上に位置し射彈觀測の重任に服務中午後四時三分突如敵の一彈身邊近く落下炸裂し左大腿部及右腕に重傷を受けて屋根より轉落し名倉中隊長及び淺野觀測小隊長と共に壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は悲憤の涙を拂ひつゝ翌三十一日には砲口火を吐いての奮戦を續け敵砲兵を粉碎し續いて對岸の敵歩兵に壓倒的の大打撃を與へ以て友軍歩兵の渡河攻撃に協力し偉大なる戦果を收むるに至つた。

氏や志操正順頭腦明晰にして快活眞摯の人陣中より母に宛てたる通信にも志氣極めて旺盛の意味を述べて「最初は敵銃砲彈の飛來に無氣味を感じましたが只今は敵前三四百米の屋根の上で任務に就いて居ます。無数の敵彈飛來しますが一發も中りません。昨日も中隊は敵機關銃に急襲火を浴びせて殊勳を奏しました。道治元氣で働いてる事を皆様へお知らせ下さい」と實戰場裡にも此沈着此豪膽果敢觀測小隊の中堅人物として戦友を激勵し觀測掛下士官を適切に輔佐し以て卓越せる中隊の戰鬥威力を發揮し戰勝獲得の爲尊き礎石を投じた。定に是

れ皇軍砲兵の精華にして又一般軍人の模範たる者であつた。然るに蘇州河畔の一戦に此有爲にして忠勇の士を喪へるは痛惜哀悼の情を禁じ難しと雖氏が赫々たる功績は天晴れ江南戦史に光彩を放ちて其芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 櫻井八十一

優秀なる高射砲觀測手北支戦線に活躍し遂に保定對空戦に玉碎す

氏は愛知縣愛知郡日進村の人にして父を銀十郎母をすきと云ひ大正二年四月二十三日に生れ未だ獨身であつた。性温良にして元氣潑刺事に當るや熱心眞摯遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。昭和三年三月日進東部高等小學校を卒業し引續き同村東部補習學校へ入學し傍ら青年訓練所に通學し各々所定の課程を修了し其後は名古屋市に出で津田製縮會社に入社して勤務中昭和九年一月現役兵として高射砲第一聯隊に入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ翌十年十一月砲兵上等兵を以て満期除隊となつた。歸郷後は再び名古屋市に出で不二見燒合資會社勤務を経て百貨店の店員となり精勵勤續して居た。

支那事變起るや間もなく應召野戰高射砲隊五弓部隊に屬し觀測手として勇躍征途に就いた。斯くて七月下旬北支に到着し七月二十九日には臨時砲隊に屬し天津山口街に放列を布置して驛電信局を砲撃し又翌々三十一日には大沽攻撃に参加して支那砲艦を捕獲し翌八月一日には北寧線の鐵路病院を占領する等目覺しき活躍を續け次で北寧線唐山に敵兵二三千名集

結すとの情報を得て八月八日高射砲隊に復歸して他兵種と共に出勤し攻撃準備を整へたが敵は武装解除をなしたる爲天津に歸來して警備に就いた。其後氏の屬する觀測第二班は永定河畔の戰鬪を準備せんが爲友軍野砲兵觀測班の統一指揮下に入りて九月二日敵前近く進出し測地作業に従事した。此際氏は重き器材を擔ひつゝ或は標高三百八十二米高地に或は標高千二百八十米高地に攀登して正確迅速なる測角作業に服すゝと共に河畔の敵情を手に取る如く視察して貴重なる情報を報告し砲兵諸隊爾後の戰鬪計畫及其戰鬪指導に甚大なる利益を與へた。其後氏は高射砲隊進出の爲道路偵察に或は連絡勤務に晝夜に亘る活躍を續け同月十二日には中壘村南方地區の飛行場上空を掩護し更に十四日には永定河上空を庇掩の爲檢査鎮附近に躍進し以て諸兵種の渡河攻撃間上空を掩護した。爾後踵を返へして蘆溝橋に到り長辛店良郷を經由して涿縣に進出し九月二十日には涿縣驛附近に於て防空に任じた。其間氏は惡路の諸障礙排除に常に積極的に活躍し又觀測班の中堅となり觀測掛下士官を最も適切に輔佐して戰鬪準備に遺憾なからしめた。



所屬隊は二十四日早朝涿縣を出發し保定に向ひ躍進したが途中敗殘兵四五十名より奇襲を受け之を擊退して我が第一線部隊の保定城奪取に引續き保定城に入城した。二十七日には保定驛東側に在る農學校々庭に陣地を占領し防空に任じた。九月三十日朝來雲低く垂れ展望を許さなかつた。午前六時四十分頃突如上空に爆音を聽きしを以て隊員一同は射撃準備を整へ異常の緊張を以て上空に最大の注意を拂つて居た。されど全く機影を認むる能はずして氏等觀測班の焦慮は一方ならぬものであつた。敵か友軍か機影は如何にと全神経は爆音の空に注がれた。俄然雲を衝いて機體を現はせるは正に敵機にして驛附近の我兵站施設に爆弾を投下した。氏は神色自若十一番觀測手として活躍中次の瞬間には身邊近く爆彈落下炸裂し其破片を胸部に受け壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬隊は直ちに砲火を開いて敵機を猛射し之を西方に撃退した。氏は頭腦明晰にして責任觀念に富み常に衆兵の深き信頼を受けて居た。今次聖戰に参加するや北支到着早々東奔西走能く其敏腕を發揮して所屬部隊の任務遂行に貢獻し殊に永定河畔に於ける砲兵諸隊の戰鬪準備に方り勞苦を厭はず危険を顧みず實施せる測地作業の如きは眞に隠れたる偉勳と謂はねばならぬ。而して保定對空戰鬪は氏の所屬隊の爲には最不利なる天候にして同情の念を禁じ得ぬ次第であつた。而かも氏は泰然として自己の本務に邁進し遂に玉碎するに至つた。斯かる有爲忠誠の士を喪へるは痛歎哀悼の極みであるが氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられて芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 木口清司

澤畔店攻撃に突撃格闘敵十數人を斃して玉碎す

氏は群馬縣佐波郡伊勢崎町の人にして父を作太郎母をゆうと云ひ明治四十四年生で妻とめとの間に未だ子はなかつた。資性誠實にして剛膽勇敢不屈不撓の人であつた。昭和六年十二月徵兵として滿洲連山關獨立守備步兵隊に入隊熱心勉勵成績良好にして滿洲事變に参加するや各地に轉戰功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり昭和九年五月上等兵にて善行證書を授

けられ満期除隊し爾來耕職に従事して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月十四日應召森田部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。北支戦線に到着後九月十三日及十四日永定河附近の戦闘に於ては中隊は尖兵中隊となり黃村驛より永定河畔に進出せしが其後旅團豫備となり旅團司令部及車輛部隊の掩護等に任じ勃々たる雄心を歴へ第一線の後方より殘敵を掃蕩しつゝ跟隨し時節到來を待った。九月十六日拒



あつた。

九月十八日澤畔店附近の戦闘開始せらるゝや中隊は大隊豫備隊となり第一線中隊の左翼後に位置した。大隊主力は正に澤畔店の敵に對し攻撃態勢をとり終らんとせし午後一時二十分頃敵は澤畔店東側鐵道線路方向より我背後に向つて自動火器の猛射を浴びせて來た。然るに附近一帶は丈餘の高梁畑にして通視困難なりし爲我に向ひ射撃しつゝある此敵の所在を

馬河畔望海庄附近の戦闘開始せらるゝや氏の所屬第一小隊は又々豫備隊となり第一線近く前進せしが可西務の敵陣地に近接するや午後五時三十分頃約一中隊の敵兵我に向つて逆襲し來つた。茲に氏の小隊は第一線兩小隊の中間に増加を命ぜられ待望の第一線となり大に奮戦遂に之を撃退し機を失せず敗退する敵に追尾殺到敵をして堅固に設備せる可西務の陣地に據る餘裕だに與へず疾風の如く此堅陣に突入し該陣地を奪取し追撃隊の渡河並に其後の行動を容易ならしめた。此間氏は克く分隊長の指揮に従ひ其中堅となり常に率先陣頭に立ちて勇敢に攻撃亦追撃し其行動は一般の模範とするに足るものが

確認すること能はざりしも所屬中隊は取敢へず此敵を攻撃せんが爲先づ銃聲の方向に向ひ展開し攻撃準備を整へた。其際左側方に派遣しある斥候より約一中隊の敵兵我に向ひ前進中なるの報告ありしを以て中隊は之に向ひ直に攻撃前進を起し敵と近迫するに至り射撃を開始し敵に相當の損害を與へた。然し敵も亦勇敢にして高梁粟畑等を巧に利用して小癩にも我に接戦を求めて來た。氏は若杉少尉の指揮する第四分隊の一員として恰も中隊の展開軸にありし爲大に奮戦努めたりしが敵は益々近接し來りしを以て中隊は突撃喇叭を吹奏し突撃に移り遂に混戦亂闘となつた。氏は銃剣を揮つて敵中に突入し或は刺殺し或は射殺して奮闘せしが敵主力は中隊長附近に殺到し來り此附近益々亂戦格闘となり氏も亦敵十數人を斃し尙逃ぐるを追ひ一兵をも漏さじと追撃大に努めつゝありしが折柄敵の後方に督戦隊現はれ城んに逃げ行く敵を射撃し其射撃我方にも飛來し惜しくも其一弾は氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し此戦闘に於ける氏の勇敢なる行動は全般の志氣を鼓舞し敵を殲滅するに至らしめ我攻撃部隊たる主力の後方に於ける危険を排除し延いて我軍戦勝の素因と爲つた。

氏や曩に滿洲事變に参加し各地に轉戦勳功を樹て今次亦召されて北支の戦場に臨むや分隊の中堅となり歴戦者たる矜持を保ち緒戦より勇猛果敢大に奮戦し皇軍歩兵の精銳を發揮して遺憾なかつた。實に是氏が戦陣に立つや家を忘れ義に就き身命を君國に捧げて斃れて後已む忠誠の發露にして軍人の模範と云ふべきである。征戦間もなく氏の如き勇士を喪ふ洵に痛惜に禁へずと雖氏の累戦樹てたる赫々たる武勳と東亞建設の礎石となりたる氏の芳名は万古に輝き其英靈は亦不滅に生きて護國の神となり其神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 木下榮藏

身に六弾を受け尙架橋を督勵しつゝ人合庄の華と散る(壯烈)

氏は鳥取市下横町の人にして父を豊蔵母をりよと云ひ明治四十三年十月二十九日に生れ未だ獨身であつたが兄の娘延子を養女とした。性温厚篤實寡黙にして孝心深く弟妹を慈しみ近隣より模範青年として敬慕されて居た。大正十三年鳥取市醇風尋常小學校を卒業し其後は建具職の徒弟となり一意専心業務に精勵し又青年團員として盡力せる所甚大であつた。昭和六年一月現役兵として歩兵第四十聯隊へ入隊し熱心精勵良成績を擧げたが滿洲事變の爲在營延期となり昭和八年二月滿洲臨時派遣部隊に屬して渡滿し一面坡方正海林等各地の討伐に従事して武勳を奏し勳八等白色桐葉章を賜はり同年十二月凱旋の上歩兵上等兵を以て現役滿期となつた。歸郷後は入營前の職業に従事し在郷軍人分會醇風分會旗手及組長として分會の爲盡力し又鳥取消防組員として熱誠消防警備に任じ所轄警察署より表彰せられた。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊岸田中隊に編入せられ第二小隊第二分隊員として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は泥濘酷暑を冒して津浦線に沿ひ南進し良王莊畢庄子徐庄子等靜海附近の諸陣地を擊破し九月十日前後には馬廠堅壘の左翼據點を攻撃突破して赫々たる武勳を奏し九月下旬には津浦線上敵の最後抵抗線たりし滄縣附近の堅陣を攻撃するに至つた。此時所屬中隊は敵の主陣地たる姚官屯を奪取する目的を以て九月二十日午後十一時行動を起し先づ北鄙人合庄を奪取すべく敵前四百米に接近し敵情地形の搜索に着手した。氏は第一線小隊に屬し敵情搜索に従事し其間數次に亘る敵の夜襲部隊を擊退し以て中隊の搜索を容易ならしめた。二十一日午後五時より友軍砲兵の攻撃準備射撃を利用し所屬中隊の第一線は敵前約百米に到達した。而して所屬小隊は小隊の正面に二條の突撃路を開闢すべき命令を受けた。

然るに敵の陣地前には幅四米深さ二米の水濠ありて架橋するにあらざれば突入し得ざる狀況であり且水濠の後方には鐵條網ありて一層の困難を加へ更に其附近は射界を清掃しありて據るべき地形地物の何もなかつた。所屬中隊長よりは突撃の督促頻りなれど未だ突撃路開設の爲着手さへ困難の状態であつた。斯る中にも敵弾は雨や霰の如く所屬小隊に射注がれて居た。此時小隊長は速かに架橋作業班を以て先づ架橋するに決したが氏は決死此任に當らん事を小隊長に切望し戰友



三名と共に敢然として水濠目がけて出發した。氏は等は熾烈なる敵の猛射を物ともせず屈身或は匍匐しつゝ水濠前二十米まで前進した。ああ其意氣其壯烈なる行動は全小隊の感激と切なる祈とをかけられて居た。氏は今や携帯梯子を操作せんと更に水濠の線にちり寄つた。此時氏等を發見せる敵兵は先頭にありし氏に向ひ銃口火を吐いての猛射を浴びせかけた。無念！氏は忽ち身に六弾を受け右下腹部の致命傷にて遂に尊き犠牲と散つた。氏は啞るゝも猶敵方を睥睨し切齒のまゝ班員を勵まし「梯子を早く架けろ」と叫び呼吸が次第に切迫し乍らも「小隊の渡河は出來たか」「梯子々々」と途切れ途切

れに叫びつゝ息を引き取つた。あゝ氏の忠烈崇嚴なる魂は戰友を驅つて突撃路開設に成功せしめ遂に當面の敵陣地奪取の素因を作爲するを得たのであつた。

氏や曩には滿洲事變に参加して赫々たる武勳を奏し又今次聖戰に参加するや一死報國の念鐵石よりも固く既往歴戰の體験に基き克く分隊長を輔佐し戰友を激勵して分隊の中堅となり各戰克く其驍名を謳はれ殊に人合庄の堅壘に對する攻撃に

於ては進んで難局に當り決死以て鬼神をも哭かしむる壯烈なる行動を敢行した。寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして亦一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や忠誠勇武の士を此一戦に喪ひ其壯容に接すべくもない。眞に痛嘆哀悼の情を禁じ得ざるも其赫々たる累次の勳功たるや天晴れ皇軍戦史に光彩を放ち不朽の芳名は後世永く語り傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 岸 初 男

琉璃河畔の戦闘に偉勳を樹て遂に地頭庄に散華す

氏は岡山縣和氣郡伊里村の人にして父を悠治亡母を正と云ひ大正三年一月五日に生れ妻竹子との間に未だ子はなかつた。資性温厚實直にして責任感念旺盛而も剛毅果斷の氣概があつた。大正十四年三月伊里小學校高等科を卒業し次で補習科に入學して二ヶ年に亘り其課程を修めた。氏は小學校一年生の時不幸にも母に死別し爾來祖母の手に育てられて成長し克く其教訓を迎え指導に従ひ孝養を盡して來た。昭和十年六月十日現役兵として龍山歩兵聯隊に入營し在隊間良成績を擧げ翌十一年十二月上等兵を以て満期除隊となつた。

支那事變勃發するや八月應召森本部隊に編入せられ上田中隊宮ヶ原小隊の輕機關銃彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて北支に上陸し九月十二日の良郷附近開古庄の攻撃に際しては氏は中隊の左第一線小隊左翼分隊に在つて敵の集中火を物ともせず逐次敵陣地の右翼を包圍する如く躍進又躍進して遂に小隊は敵の右翼側に進出して敵を側射し多大の損害を與

へて中隊の攻撃を容易ならしめた。氏は此際終始沈着且勇敢に行動して彈藥を補充し戰機に投じて最有效なる射撃を續行せしめ中隊の戦捷に貢獻する處多大であつた。次で九月十五日より實施せる琉璃河畔の攻撃に際しては氏の所屬中隊は折柄の灼熱する炎天下を彈雨を浴びつゝ敵陣地に向ひ前進し同夜は第一線大隊の豫備隊として敵陣地より程遠からぬ水なき河中に待機し敵情地形等の諸偵察を行ひつゝ翌朝の攻撃を準備した。此夜月燈々として四邊を照らし早くも我中隊の所在



を察知せる敵は其陣地より熾に銃砲火を浴びせかけて來た。之が爲中隊は相當死傷者を出すに至つた。此時中隊長は狀況を大隊長に報告し爾後の行動に付連絡せんとしたが第一線大隊本部の所在不明の爲氏及玉尾兩上等兵を長とする二組の連絡斥候を派遣する事となつた。此命令を受けた氏は勇ましく「デハ行つて参ります」と力強き一語を残し決死の部二名を率ひ勇躍任務に就いた。然るに氏は出發に際し大隊本部は右前方約三百米附近にあると示されたが見當らず更に其左前方約三百米に於て漸く之を發見し連絡するを得た。其間未知の地形に於て敵彈を潜りつゝ而かも餘り遠からぬ敵陣地前を

四時間に亘り右往左往して之を捜し當てた氏等斥候の苦心は一方ならぬものであつたが畢竟斥候長たる氏の不撓不屈の精神力と熱烈なる責任感とが此成功を齎らしたもので氏は無事連絡の任を完うして中隊に歸還し中隊長より其任務達成に對する努力を激賞されたのであつた。翌十六日天明と共に我砲兵は敵を猛撃し其掩護に依り所屬大隊は敵に肉薄し愈々突撃の機迫るや氏の中隊は第一線に増加し勇猛果敢に敵陣に突入した。此時氏の所屬宮ヶ原小隊は實に其一番乗りをしたので

あつたが氏は小隊長に従ひ勇敢に突入忽ち敵數人を斃し續いて部落内の掃蕩戦には銃手を助けて眞先に前進し適時彈藥を補充して輕機銃の威力を最高度に發揚せしめ小隊は其掩護射撃の下に猛烈果敢に敵を追撃し其際敵の作戰計畫表を鹵獲して偉功を樹てたが氏の終始率先しての奮闘は之等小隊の功績に寄與する處甚大であつた。斯くして敵を撃退せる我大隊は尙殘敵を掃蕩しつゝ不眠不休の追撃を續け翌十七日は坨頭庄西端より更に追撃に移らんとし第一線を擧げて立上つた其瞬間敵の一砲彈は氏等の頭上に炸裂し無念！氏は傍に在りし戰友と共に其破片創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午前九時頃であつた。併し中隊は氏等決死の奮闘により引續き敵を急追して保定に向ひ前進し一週日後には早くも之を占領して爾後の作戰を有利に指導するを得たのであつた。

氏は幼にして母を喪ひ専ら祖母の手に養育せられたが孝心深く祖母に仕へて孝養至らざるなく出で軍に従うや其旺盛なる責任觀念は敵火も凡ゆる辛酸困苦も氏を屈するに足らず或は夜間連絡斥候として或は輕機銃藥手として或は篠つく雨の如き敵の猛火を冒して敵陣に突入せる其活躍奮闘は正に皇軍歩兵の龜鑑とするに足るものにして皆之其任務の爲には斃れて後息む責任觀念の發露である。噫々氏聖戰に参加して僅かに三句惜くも河北の華と散る洵に痛惜の次第である。然し士は百戦功なくして瓦全を耻づ。氏が琉璃河畔の一戦に樹てたる武勳は赫々として皇軍戰史に輝き其芳名は千古に傳へられ英靈は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 宮浦 八郎

單身突撃路を開設して戦勝の途を拓き姚家屯の激戦に玉碎す

氏は兵庫縣神崎郡鶴居村の人にして父を信治母をむねと云ひ大正三年三月二十四日に生れ未だ獨身であつた。性豪膽快活にして孝心深く又友情に富み諸人の愛敬を受けて居た。昭和三年三月鶴居小學校高等科を卒業し同年九月より神戸昭和堂藥局に入り克く業務に精勵研鑽を積み藥種商の免狀を受けた。然るに進取潑刺たる性格は滿洲事變中にも拘はらず北滿方面へ雄飛するの念頓息み難く遂に昭和八年二月決然渡滿し興安嶺山麓興安路に於て藥店を開業し大に其敏腕を發揮したが徵兵検査の爲歸國して之に合格し昭和十年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營した。爾來克く軍務に勉勵して良成績を擧げ特に銃劍術は其最も特意とする所にして前後七回に亘り上司の賞狀を與へられ又射撃技能も優良にして賞狀並に徽章を授けられ伍長勤務上等兵に進み除隊時には歩兵科下士官適任證書並に善行證書を附與せられ諸上官より深く惜まれて退營した。歸郷後は再び渡滿を志したが父母の反對を受け已むなく方向を轉じ三菱重工業神戸造船所機械工場の事務員に採用せられ工場長よりも大に其將來を囑望されて居た。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し岸田中隊の擲彈筒分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は炎熱泥濘の難行軍を續け津浦沿線を進し八月下旬には津浦線の咽喉部にして且永定河南岸に於ける右翼要衝たる靜海附近の敵陣地を撃破し九月十日前後に亘る馬廠一帶の堅壘攻撃に方りては敵陣地の左翼たりし小王莊及流河鎮の鎖鑰を突破したが氏の分隊は當初聯隊豫備隊として参加し流河鎮攻撃の際には極めて有力なる敵情捜索の結果を報告して大中隊長より絶讃を受け尙攻撃前進に方りては彈丸雨飛の中を物ともせず克く部下を掌握し好機に投じて主要目標に對し有效適切なる威

力を發揚して敵を壓倒し以て所屬中隊の任務達成に多大なる貢獻を與へた。

所屬部隊は馬廠陣地帯攻略後敵の津浦線最後の抵抗線たりし滄洲一帶の敵陣地帯を攻略する目的を以て周官屯を出發し九月二十日夕高官屯に進出した。此時所屬中隊は大隊の第一線として高官屯に於て諸準備を整へ同夜十一時人合庄敵陣地の前方約四百米に到達し數次に亘る敵の逆襲を受けたが氏は克く奮闘之を撃退しつつ極力敵情地形の搜索を容易ならしめ



た。翌二十一日は早朝より敵火極めて猛烈にして諸偵察意の如くならず漸く午後五時より友軍砲兵の攻撃準備射撃の實施と共に攻撃前進を起した。然るに敵の陣地前には幅約四米深さ約二米の大水深あり其後方には網形鐵條網を設け附近の地形は射界を清掃して據るべき地形地物とてもなかつた。敵は我前進を發見して猛射を浴びせて來たが一進一止敵を制壓しつつ敵前百米に達した。折柄水濠架橋の爲決死隊の出發を認めたる氏は機を失せず手榴彈を以て敵を制壓し以て決死架橋を掩護した。斯くて所屬中隊は遂に人合庄陣地に突入し徹宵掃蕩戰を續げ天明と共に全く同陣地を占領し更に爾後の攻

撃を準備した。

二十三日午前三時所屬小隊は中隊長より姚官屯驛を奪取すべき命令を受けた。氏は熾烈なる敵の猛火を冒し部下を激勵して目指す驛構内に進入した。折しも友軍第十二中隊は左右の敵より十字火を浴びて見る見る死傷續出の苦戦中であつた。氏は突撃だ！と叫んだが敵前三十米には鐵條網ありて我前進を阻止したる爲先づ鐵條網の切斷が先決問題であつ

た。氏は敢然鐵線鉄を持ち手榴彈はないかと戦友より一發を受取り「見て居れ！敵に喰はせてやるんだと形相も物凄くバツと飛び出した。小隊長はあつ危いぞ！と叫んだが敢然手榴彈を敵に投げつけ大山の如く體を横たへて鐵條網を切り初めた。敵は一齊に氏の身邊に集中火を浴びせて來た。豪膽なる氏は馬鹿め！今に鑿にしてくれるぞ！と大聲でわめき二ヶ所の突撃路を完成しおい突撃だ！皆来い！と云ふや否や敵陣めがけてまつしぐら小隊長は「安浦殺すな！續け」と軍刀一閃斬り込んだ。氏は此時早くも敵の散兵壕に飛び込み敵のチェコ機關銃手をズブリと刺殺した。其瞬間氏はアツと叫んで眉間を抑へ敵中に倒れた。おう宮浦？おう分隊長殿！確かりせと左右より激勵の言葉を投げると氏は微笑に笑を湛えつゝ水筒を傾け「天皇陛下萬歳」と幽かに奉唱し從容として息を引取つた。敵は勇猛果敢なる我突撃に恐れて逸早く潰走した。小隊長殿！宮浦がやられましたと報告すれば小隊長は足早に近寄つて紅に染まりし氏の屍に取りつき「おうよくやつて呉れた。敵はくたばつたぞ！」と感極まり涙は頬をつたわり其聲は慄ひ其後は男泣きに泣き伏して仕舞つた。居並ぶ分隊員は頭も得あけずすゝり泣いて居た。所屬中隊は午前三時四十分遂に姚官屯驛を奪取するを得たが氏が崇高なる犠牲的奮戦に俟つ所頗る大なるものがあつた。

氏や志操堅確體力氣旺盛殊に武技に卓越し一隊將兵の信頼を一身に蒐めて居た。今次聖戰に参加するや選ばれて擲彈筒分隊長の榮職を命課せられ克く部下を掌握激勵して毎戦赫々たる武勳を奏し殊に姚官屯驛の攻撃に於て壯絶悲壯人間わざとも思はれぬ偉功を奏し遂に護國の人柱となつた。寔に是皇軍歩兵の誇りであり一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や風發叱咤の壯容に接する能はず痛恨哀悼極まりなしと雖氏の勳功たるや天晴れ皇軍戰史に異彩を放ち其芳名は千古に傳へて愈々芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で破格にも勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 宮浦今朝吉

勇敢なる小銃兵克く奮闘して東茨村の華と散る



氏は群馬縣北甘樂郡小坂村の人にして亡父を嘉重郎亡母をさわと云ひ大正三年九月六日生れで未だ獨身であつた。資性快活明朗業の愛敬を受け事を爲す積極的にして大事に臨みては頗る勇敢であつた。大正十五年六月小坂尋常小學校六年にて中途退學し直ちに桐生市某家に奉公昭和八年七月川越市某自動車店に入り自動車運轉助手を勤め入營時に至つた。昭和九年十二月徵兵として滿洲獨立守備歩兵大隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績良好にして同十二年三月上等兵に進級の上滿期除隊した。此間二年有餘に亘り寧日なき警備と屢々各地の討伐戰に参加し滿洲の治安維持に貢獻せし所尠からず其功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊に編入せられ八月二十九日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後氏は既に滿洲事變に於て歷戰の經驗あり其勇士として常に分隊の中堅となり克く分隊長を輔佐して率先勇敢積極的に活躍以て終始分隊の戰闘を有利ならしめた。九月十二日より十四日に亘る永定河畔胡家舖門村附近の戰闘に際しては中隊長の指揮下にありて永定河を渡河攻撃し勇戰奮闘克く其任務を完ふした。

九月十五日拒馬河畔東茨村附近の戰闘に際しては氏の所屬第三小隊は尖兵となり同日午前七時より東茨村に向ひ行動を

起せしが氏は此時川端斥候長に屬して斥候兵となり午前八時三十分東茨村に達し大膽にも敵地深く進入して敵の配備殊に自動火器の位置を苦心慘憺仔細に互り偵察し迅速詳細に之を斥候長に報告し以て小隊長の戰闘指揮を容易ならしめ更に部落西端に進出して尖兵到着まで敵情監視に任じ愈々尖兵該地に到着するや任務を完了して之に合し爾後中隊の右第一線小隊内にありて午前九時四十分より攻撃を開始した。愈々中隊攻撃前進を起すや氏は火線分隊の一員として篠つく敵彈下に沈着正確なる射撃を以て敵を制壓し又前進に當りては分隊の中堅として分隊の先頭に立ち他兵の志氣を鼓舞しつつ勇進に勇進を重ね奮戰大に努めつゝありしが攻撃半ばにして腹部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏や曩に滿洲の各地に轉戰して功あり今次亦召されて戰陣に立つや歴戰者たる矜持の下に常に分隊の中堅となり率先勇敢積極的に活躍し兵の本分を完ふして遺憾なかつた。是に氏が忠誠の致す所にして征戰幾何もなく河北の華と散りしと雖累次の聖戰に参加し東亞建設の礎石となりて樹てたる赫々の武勳は千載の下青史に輝き英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り遺族を加護照覽するであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 宮本辰雄

本部傳令機宜の獨斷中隊を適切なる射撃位置に誘導し遂に辛庄子に散る

氏は熊本縣八代郡植柳村の人にして父を卯三郎母を力子と云ひ大正五年十月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順孝心深く家業に熱心精勵の人であつた。昭和七年三月植柳小學校高等科を卒業し同十一年一月現役志願兵として熊本歩兵

聯隊機關銃中隊に入營爾來諸般の成績優良にして上等兵に進級し益々軍務に精勵して居た。

支那事變起るや笹原獨立機關銃部隊に屬し選ばれて本部傳令となり昭和十二年八月五日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十五日所屬部隊は房山北方高地に展開して前面の敵を攻撃するや本部は第一線兩中隊の中間後方に在りて戰闘を指揮しつゝありしが氏は彈雨の下本部と第一線中隊間を往復馳驅して部隊長の命令意圖の傳達に任じ其都度適時確實に之



を傳へ部隊長の戰闘指揮を容易ならしめた。九月十六日辛庄子の敵攻撃に際しては所屬部隊は午前五時より行動を起し午前八時三十分より戰闘を開始せしが氏は屢々戰線を前後左右に駆け廻り本部中隊間の連絡に奮闘努力し其攻撃前進相當進捗せる頃部隊長は敵機關銃が前方圍壁より猛威を逞ふし協力部隊の前進を憚ましつゝあるを知るも第一線たる部下第三中隊の位置は高粱畑内にありて之を發見し得ず却て後方部隊長の位置より明瞭に之を確認し得たるを以て部隊長は第三中隊をして現位置より前方二本木附近に陣地を變換せしめ該機關銃を撲滅せしめんとし其旨氏をして第三中隊に傳達せしめた。氏は命を受くるや嵐の如き敵の猛火を冒して密林の如き高粱を押し分けつゝ勇敢に第三中隊の位置に前進せしが一刻も早く敵の該機關銃撲滅の必要を痛感しある氏は恰も第三中隊の現射撃位置より若干移動せば其敵機關銃を射撃し得る良好なる陣地あるを發見し而かも其位置は後方より見たる二本木の位置より射撃開始迅速なりと判斷し部隊長命令の要旨を傳達すると同時に獨斷自ら陣頭に立つて第三中隊を此位置に誘導し速かに敵機關銃に對し射撃を開始せしめ我協力部隊の

前進を容易ならしむることを得た。而して氏は其重任を完ふし幸に微傷だに負はず再び本部位置に歸るを得て右の次第を復命しつゝありしが其際無敵彈頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや孝子。其出で、戰陣に臨むや素より忠孝は一道である。本部傳令に選ばれて重き使命を帯び彈雨の下死生を顧みず戰線を東奔西走し常に其重任を果して遺憾なかりしのみならず就中辛庄子の攻撃に際しては常に迅速確實なる傳達を完ふせしに止まらず其機宜の獨斷は實に傳令の行爲として申分なく眞に天晴れの働きであつた。是に氏が本部傳令として常に指揮官と一心同體となり自ら銃を執りて戦ふにも優りて一意戰勝に勇奮せる旺盛なる攻撃精神の發露と云ふべきである。氏や征戰幾何もなくして北支の華と散りしは惜みて尙餘あるも其拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途を守護し又兩親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 三 森 宗 壽

龍王廟緒戦に十數倍の敵に對し勇戦奮闘して北支の華と散る

氏は鳥取縣日野郡日野上村の人にして父を茂市母をウメと云ひ大正四年一月七日生れで未だ獨身であつた。資性温良眞摯にして情誼に敦く寡黙實踐の人であつた。昭和四年三月大正小學校高等科を卒業し續いて大正農業補習學校に入學し同七年三月卒業更に研究科に在學し同九年三月卒業したが之より先昭和六年四月日野上青年訓練所に入所し補習學校通學の傍其訓練を受け同十年三月全課程を修了した。氏は之等在學間も餘暇あれば父を助けて農業に従事し克く親に仕へ又弟妹

をも勞はる等一家和合の中心であつた。昭和十一年一月現役兵として松江歩兵聯隊に入隊し五月支那駐屯歩兵聯隊に轉屬せられ益々軍務に精勵して其年十二月歩兵上等兵に進み翌年三月伍長勤務を命ぜられ其間精勵章を授與せらるゝ事二回に及んだ。氏は時局に鑑み進んで皇軍幹部たらん事を中隊長に申出で遂に採用せられて十二年六月下士官候補者を命ぜられた。



氏の大隊は更に大瓦窓に前進し午後四時頃大隊長は機關銃一小隊及氏の所屬田淵小隊を世良中尉の指揮に屬し龍王廟に至り永定河左岸地區の敵情を監視すべく命令した。此時氏は田淵小隊の分隊長として午後五時世良中尉の指揮を以て大瓦窓を出發した。世良部隊が前進を起すや間もなく龍王廟より迫撃砲機關銃の射撃を受けしも世良中尉は尙應戦せず慎重に敵情を監視しつゝ前進を續けたが敵は更に猛射を浴びせ來り尙後續隊は續々永定河を渡河し逐次龍王廟南北の地區に展開し

小嶺にも我を包圍する如く攻撃の状況なりし爲世良中尉は之を攻撃して龍王廟を奪取するに決した。此際小隊の最左翼に在りし氏は龍王廟南側より我左翼を包圍する如く前進し來れる敵に對し分隊をして猛射を浴びせ多大の損害を與へたが敵は逐次増加し其射撃は漸次熾烈となり分隊の前進は漸く困難なるに至つた。併し豪氣の氏は更に屈せず動もすれば寡兵の爲萎靡せんとする部下を勵まし「大和魂の眞價を敵に知らすのは今だぞつ」と叱咤激勵し一進一止敵を制壓しつゝ前進した。然るに敵弾は篠つく雨の如く物凄く部下の山内一等兵先づ戦死し次で岩下一等兵も斃れ輕機關銃にも敵弾命中して破壊され射手和田二等兵も重傷を負ふに至つた。されど氏は毫も屈せず益々勇を鼓し部下を激勵掌握して奮戦自らも亦又戦線に加つて正確なる射撃を實施し更に躍進を號令して立つや其利那無念腹部に盲貫銃創を受けて其場に倒れた。剛毅の氏は尙且前進を叫び數歩を前進したが再び倒れ此時氏の重傷を知つた富岡二等兵が介抱せんとするや之を叱咤して前進を命じたが氏は自己の再び起つ能ざるを自覺し聲も幽かに「富岡長い間世話になつた。分隊の者は仲よく忠義を盡して呉れ中隊長殿にも小隊長殿にも宜敷」と述べ心靜かに瞑目した。時に午後六時三十分頃であつた。之より先き世良隊の苦戦奮闘を知つた所屬大隊は直ちに敵の左翼を包圍する如く攻撃し午後九時頃龍王廟及其北側陣地に突撃して殲滅したのであつた。

氏は豫て父に宛て次の如き遺言狀を送つた居た。

「國家の干城として入營致して國の爲働いた事を嬉しく思ふ。私の死後軍人の家族として女々しい振舞し下さるな私も七度人と生れて國家を護らん。左の件に付一言申し置きます。

一營内に於ける書籍類は良則正治の参考にして下さい。

一入營以來の貯金六十圓位あり正治の學費に内十分一は青年團へ寄附して下さい。

外別に遺言すべき事はない。吳々も言ひ置く事は必ず必ず女々しい振舞をして村の人から物笑ひにならない様に。祖父上様にもよろしく。」

噫氏が如何に忠烈至誠の士であつたかは此遺書に據つても明かである。氏が入營前既に居村の青年團理事に推され衆望を一身に蒐めて居たのも決して偶然ではない。斯る忠孝兩全有爲の士を聖戦最初の犠牲たらしめし事は洵に痛惜哀悼の情に堪えない。然し氏は既に〳〵死を決意しありし事は遺書に示す所にして而かも士は百戦功なく瓦全を耻ぢ一戦玉碎して名を残すに如かずとは古來大和武士の念願する所である。氏や龍王廟の一戦に早くも北支の華と散りしも十數倍の敵に對し堅忍不拔最後迄奮戦を續け緒戦に於て遺憾なく皇軍の威武を示して敵の膽を寒からしめし事に戦勝の素因を作つた。其功績は燦として皇軍戦史に輝き其芳名は千古に誦はれ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又遺族一家の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 塩入木佐次郎

重傷を負ふも尙部下を激勵奮闘し黄村の激戦に玉碎す

氏は長野縣上田市大字上田の人にして亡父を忠一亡母をとらと云ひ太正三年十一月十三日に生れ未だ獨身であつた。性温順にして孝心深く人に交はりて親切正直であつた。又難局に當りては堅忍持久且沈勇果斷であつた。幼にして父母に別

れ東京市深川區牡丹町の叔父鹽入兼三方に養育せられ靜かに人世の行路を考へ心身の鍛錬に努めて居た。昭和二年三月東京市本郷區駒込千駄木尋常小學校を卒業し其後は叔父方に在りて家業を手傳ひ入營時に及んだ。昭和十年十二月現役兵として關東軍獨立守備歩兵隊へ入營し軍務に精勵し特に滿洲事變に關し功績を樹て勳八等白色桐葉章を賜はり又入營以來前後三回に亘り精勳章を附與せられ十一年十二月には歩兵上等兵に進級し翌十二年三月善行證書を附與せられ滿期除隊となつた。支那事變起るや間もなく應召遼山隊隊に屬し久保中隊小銃手

として勇躍征途に就いた。斯くて九月十四日永定河畔に敵を撃破して敵を追撃し同月十六日南泊附近の戦闘には第三小隊長宮下准尉の指揮下に中隊豫備隊として右翼後を前進し翌十七日大石橋附近の戦闘には豫備隊となりて大石橋を警戒し翌十八日には待望の右第一線小隊となり勇躍奮進克く其優秀なる射撃技能を發揚し忽ち派縣の敵陣地を占領した。爾來不眠不休の猛追撃を行ひ生粟や生甘藷に飢を忍び泥濘酷暑を克服し大册河北岸地區に進出した。

永定河畔に脆くも大敗して總退却をなせる敵は大册河南岸地區の既設陣地に遁入した。此河は保定の北方約四里を東方に流るゝ大河にして河幅百米水深一米四〇位より一米七〇に達し敵は中洲及河岸に監視部隊を配置して鋭く警戒の目を光らせ南岸黄村附近一帶には數線より成る堅固なる陣地を設け地雷鐵條網及水濘などをめぐらしトーチカ及掩蓋機關銃の配置も物凄く其工事日數は實に數ヶ年を要したとの事であつた。所屬加島大隊は黄村附近の敵陣地を攻撃の目的を以て二十一日午前六時行動を起し同日午後十一時頃より愈々攻撃を開始し



た。中隊は左第一線中隊として展開し氏は中隊の右第一線小隊の小銃手として綿畑を通過し大冊河北岸堤防に達した。此夜月明かにして對岸よりは絶え間なく砲彈を受け氏等の頭上には物凄き砲彈が或は高く或は低く唸りを發して通過して居た。氏等は機關銃隊の掩護射撃の下に肅々として渡河するや對岸の小銃は銃口火を吐いて猛射を加へて來た。忽ち友軍には死傷者相ついで出て來たが氏は毅然として先頭を切つて濁流を超え對岸に取りつき克く分隊長を輔佐し分隊の集結を確實ならしめ續いて猛然白兵を揮つて敵陣地に突入し頑敵を撃破して第一線陣地を占領之を確保した。中隊は引續き第二線陣地に向ひ突撃を敢行した。此時不幸にして分隊長戦死するや氏は直ちに分隊長代理となりて部下を掌握激勵し手榴彈を以て敵を制壓しつゝ右方より突入を企圖し移動中敵の掩蓋機關銃は月光を利用して氏等の突撃部隊に猛射を浴びせて來た。氏は之にも動せず率先勇敢に突入したが無念！忽ち敵彈の爲右大腿部に貫通銃創を受けて打倒れ鮮血サツと迸つた。然し豪氣の氏は之に屈せず再び立上り分隊を激勵突入を敢行せんとする一刹那更に腹部に貫通銃創を受け萬歳の一語を名残とし竟に壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は氏等の勇敢なる奮戦に依り其後間もなく第二線陣地を占領して之を確保し所屬部隊爾後の戦闘に至大なる利益を與へ遂に赫々たる戦勝を獲得する事を得た。

氏や曩には滿洲事變に参加して赫々たる武功を奏し濃厚沈勇の勇士として上下の信頼を受け今次聖戦に参加するや一死報國の決意愈々堅く歴戦の諸體驗に基き克く分隊長を輔佐し又战友の模範として自づから分隊の中堅を爲して居た。而して敵が乾坤一擲の血戦を企圖せる黄村の激戦は眞に是壯烈凄惨の極であつたが此間に於ける氏の獅子奮迅の奮戦は實に軍人の龜鑑たるもので戦勝獲得に及ぼせる貢献は極めて大なるものであつた。あゝ今や斯かる有爲にして忠誠の士を喪ふ轉た痛惜に堪えざるも氏が累次の勳功は皇軍戦史に光彩を放ちて芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護し一家並に恩愛限なかりし叔父一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 島田惣吉

外長城線夜襲に偉功を樹て惜くも集團地雷に玉碎す

氏は埼玉縣北葛飾郡吉川町の人にして父を榮藏母をくりと云ひ大正四年十一月七日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして質實剛健親孝行の譽高く又事を爲すに表裏なく誠實精勵郷黨の模範と呼ばれて居た。昭和五年三月吉川小學校高等科を卒業し引續き吉川公民學校に入り同七年三月同校後期二年修了更に吉川青年訓練所に入所同九年十一月には吉川消防組消防手を拜命した。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同年五月滿洲に派遣せられ齊々哈爾濱に駐屯同地及林甸附近の警備に任じ入營以來軍務に精勵學術の成績良好にして翌十二年五月には上等兵に進級した。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬小林部隊第五中隊に屬し第三小隊第一分隊小銃手として勇躍征途に就いた。駐滿中家郷に送れる書信に「過日林甸縣の討匪の際名譽の戦死を遂げた戦友が白布に包まれて原隊に歸りました(中略)齊々哈爾濱南部に聳ゆる忠靈塔の入骨式がありました。兵二名の爲こんな盛大な式典を擧げて呉れるのかと思ふと死ぬるなどの事は別に感じない氣になります」云々更に後信に「近日中に我等も出動致します。何も運命です。體の續く限り君國の爲に働いて來ます」又「立派な働をして家名を揚げますから御安心下さい」とあり一死報國の決意牢固たるものがあつた。北支戦線到着後八月中旬に至る間所屬中隊は天津附近の掃蕩敵情搜索及諸種の警戒勤務に任じたが氏は不眠不休緊張裡に熱心服務し克く其任を完ふした。

八月二十日所屬部隊は張北南方外長城線附近に進出せる敵を撃退し且敵の退路を遮断せんとするや所屬中隊は午前八時長城線の敵に對し行動を起し午後二時主陣地線上(へ)のトーチカに據る敵に對し展開し第一第二小隊を第一線とし第三小隊を豫備隊として攻撃前進を開始した。氏は豫備隊内にありて彈雨に曝されつゝ勇心を壓へて時期到来を待ち第一線に跟随した。第一線小隊は午後七時(へ)のトーチカに突入之を占領するや長城南側トーチカに據れる敵は小銃機關銃を亂



射し尙頑強なる抵抗を續けた。之が爲中隊は更に第二第三小隊を第一線とし引續き之を攻撃した。氏は今や待望の第一線となり夕刻よりの大雨に全身濡鼠の儘夕間暗き谷を越へて峻峻を攀ち逐次敵に肉薄して午後八時稍々過ぎ敵前三十米の稜線に進出し熾烈なる敵火を冒して外壕及長城の障壁を踏破し一齊に突入し數十名の敵を撃退して遂に該陣地を奪取した。此間氏は突撃の命令下るや分隊長と共に率先猛烈勇敢に突入し忽數名の敵を刺殺し又逃ぐる敵を射撃し其活躍は實に目覺しきものがあつた。其後數回に亘り敵の恢復攻撃ありしが此時氏は陣地南端に進出せる輕機關銃の射撃指揮に任じ剛膽沈着的確なる射撃指揮を以て其都度敵に多大の損害を與へて之を撃退した。小隊は更に前方一軒家の敵を掃蕩することゝなり小隊長以下殘敵を驅逐しつゝ前進して該家屋を占領するや恰も午後九時頃無念集團地雷爆發し轟然たる音響と共に小隊長以下十一名同時に爆傷を蒙り遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

因に氏の父は氏戦死の報に接するや「惣吉も御國の爲よくやつて呉れた。定めし本懐でしょう。花々しい戦死であつて

呉れ、ばよいと心配してゐます」と健氣に物語つた。

古來忠臣は孝子の門に出づと氏の郷に在るや至孝出で、戰陣に立つや夜間峻峻彈雨にも屈せず沈着勇敢歩兵の本領たる夜間攻撃の精銳を發揮し遺憾なかつた。かくの如きは一身を君國に獻げて斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏參戰日ならずして内蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも一戰玉碎は百戰功なきに優る。開戦劈頭奮戦して以て暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其芳名は亦家門を飾り今や忠と孝とを完ふし英魂は永久に護國の神となりて靖國の神域に神鎮まり皇國の前途を守護すると共に老親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 清水龜造

擲彈筒手每戰沈着正確なる射撃を以て中隊戰勝の素因を作る

氏は群馬縣群馬郡室田町の人にして父を業三母をきくと云ひ明治四十三年五月三十日に生れ妻ふじとの間にハツエ小按子の二兒を擧げた。資性恭儉篤實情誼に厚く一村青村の模範として讃えられ又大事に臨みては沈着剛膽であつた。大正十四年三月室田高等小學校を卒業し爾後家に在つて農蠶業に従事し傍ら青年訓練所に入所昭和五年三月其課程を修了し昭和六年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績良好にして上等兵に進級し同七年三月上海事變勃發するや出征して吳淞に上陸嘉定城附近の警備に任じ五月轉じて哈爾濱に到り同地附近の警備に任じ朱家、油房、康金井、興

農鎮、綏化、海倫、海量鎮、富拉爾基、札蘭屯等轉々移駐して各地の討匪戦に参加し大に奮戦功を樹て勳八等に叙せられ同八年十二月満期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第八中隊に編入第三小隊第五分隊擲彈筒手として同月十四日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十三十四日は永定河附近、十五、十六日は琉璃河畔及駱駝灣附近、十七日は西範領附近、十八日より二十日に亘りては澤畔店附近の各戦闘に参加し或は第一線に勇戦し或は剛膽警備に任じ其都度克く其任を完ふした。九月二十一日所屬隊が尖兵中隊として前進中夜借村に於て友軍歩兵部隊聯大隊砲等敵の包圍を受け苦戦しつゝある情報に接するや直ちに之が救援を命ぜられて該村に急進し此敵を攻撃した。此時氏は第一線にありて擲彈筒の威力を發揮し勇戦奮闘敵に多大の損害を與へて退却の已むなきに至らしめ以て救援の目的達成に大なる貢献を爲した。續いて二十三日西高家莊東端附近に於ける敵襲、十一月一日より十五日に亘る石家莊、元氏、順德附近に於ける累次に亘る便衣隊の襲撃に際しても亦克く奮戦して中隊の任務達成を容易ならしめた。其後十一月二日所屬中隊は獨立して四盤磨の敵を攻撃し引續き花園庄を攻撃するや氏は再び擲彈筒の威力を發揮して中隊の攻撃を容易ならしめ中隊の戦勝に寄與する所大なるものがあった。



十一月三日明治節をとり彰徳城の攻撃開始せらるゝや同日黎明より友軍の砲撃開始せられ次で大隊砲及機關銃の援護射

撃の下に所屬中隊は第一線として敵前千米附近に近接して攻撃準備を整へ午後四時愈々先づ徐庄の敵に對し攻撃前進を開始した。敵は部落の前端より河の對岸其後部落彰徳驛彰徳城と數線の陣地を構築し掩蓋重機關銃座を設備し戰車壕鐵條網等を繞らし頗る堅固に陣地を構成して我攻撃に備へ我軍攻撃前進を起すや猛烈なる銃砲火を浴びせ來り頑強に抵抗した。中東伍長以下氏等擲彈筒手は中隊長の直接指揮下に入り我攻撃前進を惱ましつゝある敵の自動火器に對し剛膽沈着毎發正確なる擲彈筒の射撃を加へて逐次撲滅又は制壓し第一線歩兵の前進を容易ならしめつゝ躍進又躍進午後五時遂に敵前百米の地點に近迫し中隊愈々敵陣地に突撃せんとする直前擲彈筒の突撃準備射撃を命ぜらるゝや此頃戦闘は最高調に達し敵彈一層の猛烈を加へしにも拘はらず氏は其集中射撃下において勇敢にも立ち上り先づ射撃目標を確認し次で沈着克く正確なる照準を以て中隊長所命の目標たる掩蓋重機關銃に對し射撃せしに精度極めて良好見事數發の命中彈を得遂に之を沈黙せしむるに至つた。中隊は此機を逸せず直に突撃に移るや氏も亦射撃を止め直ちに白刃を揮つて第一線に追尾突入せんとし前進を起せしが此時無念胸部に貫通銃創を受け午後六時遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏の的確なる射撃効果により間もなく徐庄の敵陣地を完全に占領することを得た。

氏は選ばれて歩兵の重要火器たる擲彈筒手となり戦陣に臨むや彈雨の下毎戰沈着剛膽常に毎發正確なる射撃を實施し以て皇軍擲彈筒の威力を發揮し遺憾なかつた。殊に徐庄の突撃準備射撃の如き頗る見事にして中隊戦勝の最大素因を爲した。かくの如きは是擲彈筒手たる重責の存する所身命を君國に捧げ死生を超越して任務に邁進せし盡忠至誠の發露と云ふべく眞に軍人の鑑とすべきである。聖戦の前途尙遠遠の時良擲彈筒手を喪ひしは痛惜に堪えざるも北支上陸以來約二閱月毎戰樹てたる拔群の武功は皇軍戦史に輝き其芳名は万世に語り傳へて讃へらるべく英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護すると共に一家の守護神ともなり遺兒の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 神宮峯治

出陣に先ち竊かに自家裏山の老杉に墓標を刻む

氏は群馬縣北甘樂郡高田村の人にして父を春吉母をとめと云ひ明治四十五年五月二十九日に生れ未だ獨身であつた。資性快活温順寡言實行の人にして至誠奉公の念厚く父母に對しては孝養を盡し又弟妹を慈育し朋輩との交際頗る圓満であつた。昭和二年三月高田高等小學校を卒業引續き青年訓練所充用高田實業補習學校に入り同七年三月同校を卒業した。昭和八年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營間もなく滿洲に出動同年二月遼陽に着初年兵教育を受け三月北票縣義縣朝陽寺に六月札蘭屯に七月富拉爾基に轉々移駐し四周匪團横行の地にありて緊張至嚴の警備に任じ克く其任を完ふし此間討匪戰に参加すること十數回匪賊の掃滅に努め滿洲の治安維持に貢獻せし所甚大であつた。其功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり又在隊間學術の成績良好上等兵に進級し翌九年五月内地に歸着同年七月歸隊除隊した。其後家業に精勵し傍ら青年學校教練指導員に推され率先垂範郷土青年の教育に盡瘁し其向上發展に寄與せし所多く生徒は素より一村の敬慕を受けてゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊に編入輕機關銃第二彈藥手として同月十四日勇躍征途に就いた。其出陣に先だち自家裏山の老杉に「享年二十六歲神宮峯治」と刻み何人にも之を告げず氏の出陣後發見したのであつたが氏が當時心中一死奉公生還を期せざりし覺悟の程を窺ひ知らるゝ次第である。所屬中隊は北支戰線到着後九月十三、十四日永定河附近戰闘に當つては旅團豫備として司令部並に車輛部隊の警戒掩護に任じ又殘敵を掃蕩しつゝ勃々たる勇心を押へて第一線に跟隨した。

九月十六日拒馬河畔望海庄附近可西務の敵陣地攻撃に當りては氏は新井准尉の指揮に屬し第一分隊輕機關銃第二彈藥手として待望の第一線となり本戰闘に参加することを得た。中隊は當日午後零時三十分行動を起し午後二時三十分攻撃を開始した。敵は堅固なる既設陣地に據り頑強なる抵抗を爲し殊にト



チカ式側防機關を備へ猛烈に射撃し來り大いに中隊の攻撃を惱ました。第三小隊は中隊長より此側防トチカの撲滅を命ぜらるゝや勇躍之に對し攻撃を開始せしが氏は小隊の火線分隊内に在りて敵の十字火を冒しつゝ彈藥の運送に活躍し銃側に彈藥を充實して射手をして敵トチカの銃眼に對し猛射せしめ以て小隊の前進を容易ならしめ躍進又躍進益々敵に近迫し敵前三十米に達し愈々突撃の命令下り將に突撃の爲起ち上らんとするや敵の壕内より投擲せる手榴彈の爲に右肘に爆創を受けたるも剛氣の氏は之に屈せず分隊長と共に勇猛果敢一舉に突入し遂に該トチカを見事奪取し其結果延て中隊主力の攻撃を容易ならしめた。而して午後五時三十分頃となるや敵兵約一々中隊我正面に逆襲し來り射手之を猛射するや忽ち多數の彈藥を射耗するに至りしが氏は之が補充に奮勵努力して以て射撃を中絶せしむることなからしめ敵に多大の損害を與ふことを得せしめ遂に敵を撃退するに至つた。小隊は機を逸せず直ちに之に追尾するや氏も亦勇躍之を急追し遂に可西務の一角に突入該陣地を奪取し尙も敵を追撃中敵

機上空に現はれ其投下せる爆彈身邊に炸裂し無念左大腿部に爆創を受け直ちに望海庄に收容せられ軍醫の治療を受けたるも傷重かりし爲手當の甲斐もなく翌十七日午前三時遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

夫れ忠孝は一道にして良兵と良民とは其軌を一にす。氏の戦場に臨むや心中再び生還を期せざりしは氏の平素に於ける行爲に照しもあるべしと首肯さるゝのである。果せる哉殉忠の決意流露せる所彈雨の下勇敢而かも傷つくも屈せず只管其任務に邁進し小隊の戦勝に向ひ奮闘して已まなかつた。唯天氏に一層の雄腕を揮ふの時を借さず参戦幾何もなく惜くも空爆に散華せしめしは痛恨の限りであるが可西務の一戦に樹てたる赫々の功績は支那事變史に牢記せられ累次の聖戦に參加して興亞の礎石となりたる其芳名は万世に轟はれ英靈は不滅に生き護國の神となりて尙も皇國を守護し又老親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 姫谷 春 藏

一死殉忠の決意固く陣内戦に多數の敵を殲して張新庄の夜襲に散る

氏は兵庫縣加古郡高砂町の人にして父を久吉母をつくと云ひ大正四年四月四日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實孝心深く眞面目にして熱心大事に臨みては沈着剛膽であつた。昭和五年三月郷里の小學校高等科を卒業し引續き高砂町實業補習學校に入り同七年三月同校を卒業した。小學校在校中は八ヶ年を通じ學力優等品行方正なりし爲町長より賞状賞品を附與せられた。昭和十一年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして下士官候補者に採

用せられ同年十二月熊本教導學校に入校勉學中なりしが事變勃發の爲翌十二年七月歸隊した。氏は特に劍術に秀で聯隊長より賞状を附與せられた。

支那事變起るや沼田部隊森本隊に編入第二小隊輕機第六分隊長として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。氏戦死の後其日誌を調ぶるに「身は死すとも君に忠、親に孝、忠孝一道」と記し又「待つは白木の箱ばかり」と記してあつた。記事簡なるも生還を期せざる覺悟しかも殉忠以て孝に代へんとせる心構なりしを窺ふことが出来る。北支戦線到着後八月下旬には潮宗橋

趙連庄小玉莊九月には丁莊青縣興濟鎮李家妻馬落坡等の各戦場に何れも參加し輕機分隊長として勇戦奮闘克く其任務を達成した。



九月二十三日沼田部隊が張新庄に對し夜襲を執行するや將兵一同今日を最後と軍旗に訣別したる午後十時豆店を出發敵陣地に向ひ行動を起し午前零時三十分頃夜襲隊形を整へ氏の所屬中隊は第二線突破部隊として接敵前進を開始した。敵は其陣地を數線に構へ其第一線陣地は數線より成る散兵壕地帯を設備し其前方には幅五米深さ三米水深一米の水濠を其又後方には深さ四米有刺鐵線の鐵條網を繞らし又第三線陣地は連續せるトーチカを設備し其前方には更に幅五米深さ一米の水濠を繞らし頗る堅固に構築してあつた。而して當夜は月あれども空は曇りて周圍は暗くしかも我軍前進を起すや敵は篠つく雨の如く猛射し來り中隊内にも死傷者を生ずるに至つた。氏は敵の猛火も物ともせず克く分隊を掌握し敵の逆襲に備へつゝ勇敢に前進し遂に敵に肉薄し第一線部隊に續いて水濠を渡り鐵條網を通過し午前一時三

十分第一線に追及進出するや此時敵の逆襲部隊は中隊左側至近の距離に於て我中隊主力の攻撃の爲に混亂集して居た。之を知つた氏は迅速的確なる射撃指揮により分隊をして之を掃射せしめ其數十名を射殺し更に馬落坡方面の敵の掩蓋機關銃の制壓し中隊の前進を容易ならしめしが無念其時敵の一彈頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや孝子。其征旅に就くや忠孝一道一死殉忠以て孝に代へんとして居た。果せる哉其戦陣に立つや其決意と忠誠の進る所毎戦勇敢率先部下を率ひ指揮的確機宜に適し克く分隊長たる重任を完ふして遺憾なかつた。聖戦初期早くも斯かる忠孝義烈の士を喪ひし事は惜みて尙餘あるも氏や待望の分隊長となり奮戦以て樹てたる拔群の武功は萬世不朽皇軍戦史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國及一家を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 森本光次

張新庄激戦に獨斷屋上に輕機を据ゑて奮戦斃るゝも引鐵を離さず

氏は兵庫縣姫路市北今宿の人にして父を清太郎母をコトと云ひ大正三年三月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性眞面目事に熱心積極的にして責任觀念強く郷に於て又軍隊に入りて共に上下の信頼厚かつた。昭和三年三月居住地小學校高等科を卒業し同七年四月大阪工科學校電氣科に入學し同九年三月四番の優等成績を以て卒業した。昭和十年一月徴兵として姫路歩兵聯隊へ入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀特に武技に長し銃劍術に於ては大隊長より一回射撃に於ては中隊長より二回賞状を受け更に聯隊特別射撃に第一位を占め聯隊長より賞状を附與せられた。而して同十一年十一月滿期除隊し翌

十二年三月三菱神戸製作所に入社し精勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年七月應召沼田部隊淺野隊に編入第三小隊第五分隊輕機關銃射手として八月十一日勇躍征途に就いた。而して北支戦線に到着し八月二十五日より九月十四日に至る馬廠附近の戦闘及九月二十一日より二十三日に互る馬落坡附近の戦闘に際しては所屬中隊は聯隊豫備となり敵の彈雨に曝されつゝ勇心を壓へて第一線に跟随し活躍の時期到來を待つた。此間氏は運傳兵として或は斥候として日夜連絡搜索警

戒に困苦危険を排して活躍克く其任を完うした。

九月二十三日聯隊が張新庄の敵陣地に對し夜襲を決行するや敵は數線の堅固なる陣地を構築しありし爲所屬大隊は第十一第十二中隊を第一線陣地奪取部隊とし第九第十中隊は第一線部隊が敵の第一陣地奪取後之を超越して其第二線陣地を奪取すべく當初大隊の第二線となり午後十時三十分一同軍旗に訣別し正子頃行動を開始した。當夜は月ありしも天曇り爲に四周暗く刺へ敵より猛射を受けしが各隊は勇敢に前進し水濠鐵條網を越へ氏の中隊は大隊の第一線中隊が敵



の第一陣地突入と共に第一線に進出して敵の第二陣地に向ひ前進した。二十四日午前五時頃氏の所屬第三小隊は中隊の左第一線となり攻撃すべき命を受くるや爾後泥濘隊を没する中を氏は分隊長指揮下に勇敢に前進し凡そ五百米も前進せし頃一條の道路に出て且其前方に村落らしきものを發見せし爲其村落に進みんとし道路を前進せしが該村落の前方約三百五十米附近に達せし頃張新庄北端より數發の射撃を受けた。其際氏は小隊長の命により迅速に此敵に對し射撃を開始するや